

A sepia-toned illustration of a woman with large, dark, feathered wings. She is wearing a long, flowing Victorian-style dress with a high collar and a sash. Her hair is styled in an updo with a floral headband. She is looking slightly to the right with a serene expression. The background is a textured, rocky or forest floor.

ヴィクトリア朝文化研究

Studies in Victorian Culture

No. 14

November 2016

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

ヴィクトリア朝文化研究 第14号

目 次

論 文

- 『希望の巡礼』のリズム——ウィリアム・モリスの1880年代——
……………川 端 康 雄 3
- J. S. ミルのイエスと J. H. ニューマンの神
——ヴィクトリア時代知識人にとっての信仰とは——
……………有 江 大 介 33
- J. プリーストリーと T. H. ハクスリー
——18世紀後期イングランド啓蒙の遺産とヴィクトリア時代知識人——
……………松 本 哲 人 62

エッセイ「ヴィクトリア朝文化研究の(場所)」

- 索引の旅
……………富 山 太佳夫 79
- ヴィクトリア朝文化研究の一指針
……………中 島 俊 郎 84
- 大学の二つの身体
……………大久保 譲 89

書 評

- 坂本優一郎著『投資社会の勃興——財政金融革命の波及とイギリス』
……………高 田 実 94
- 小川真里子著『病原菌と国家——ヴィクトリア時代の衛生・科学・政治』
……………鈴 木 晃 仁 99
- Peter Gurney, *Wanting and Having:
Popular Politics and Liberal Consumerism in England, 1830-70*
……………眞 嶋 史 叙 104

Akiko Shimbo, <i>Furniture-Makers and Consumers in England, 1754-1851: Design as Interaction</i>	土 方 史 織	109
Sarah Amato, <i>Beastly Possessions: Animals in Victorian Consumer Culture</i>	伊 東 剛 史	114
Takashi Ito, <i>London Zoo and the Victorians 1828-1859</i>	岩 間 俊 彦	119
Bernard Lightman and Bennett Zon, eds., <i>Evolution and Victorian Culture</i>	藤 田 祐	125
G. A. Bremner and Jonathan Conlin, eds., <i>Making History: Edward Augustus Freeman and Victorian Cultural Politics</i>	舟 川 一 彦	130
William Vaughan, <i>Samuel Palmer: Shadows on the Wall</i>	高 橋 裕 子	136
Béatrice Laurent, ed., <i>Sleeping Beauties in Victorian Britain: Cultural, Literary and Artistic Explorations of a Myth</i>	山 口 恵里子	141
Deborah Lutz, <i>Relics of Death in Victorian Literature and Culture</i>	福 原 俊 平	146
河村民部著『セオドア・ワッツ＝ダントン評伝 ——詩論・評論・書評概説と原文テキスト付』	松 村 伸 一	151
海老根宏・高橋和久編著『一九世紀「英国」小説の展開』	宮 丸 裕 二	156

第15回全国大会要旨	162
編集委員会からのお知らせ	173
投稿規程	173
著作権および掲載論文の公開について	173
転載許可願について	174
優秀論文賞規程	174
編集後記	175

論文

『希望の巡礼』のリズム ——ウィリアム・モリスの1880年代——

川端 康雄

はじめに

1880年代のウィリアム・モリス (William Morris, 1834-96) は一方で草創期のイギリスの社会主義運動を牽引し、他方、本業のモリス商会ではテキスタイル部門を主としたデザイン制作で目覚ましい成果を上げた。後者の仕事は1880年代後半に本格化するアーツ・アンド・クラフツ運動の源泉となる。この時期にイギリスで展開された政治と芸術の前衛運動の両面で彼は決定的に重要な役割を果たした。

本稿では1880年代におけるこれらのモリスの活動のうち、とくに政治的コミットメントと詩人としての仕事の関連について検討する。その際、モリスの物語詩『希望の巡礼』(*The Pilgrims of Hope*) を主要なテキストとして取り上げる。これはモリスが設立に関わった社会主義同盟 (The Socialist League) の機関紙『コモンウィール』(*The Commonweal*) に1885年から翌年にかけて随時連載された。1871年のパリ・コミューンに参加したイギリス人青年たちの愛と戦いを描いたこの物語詩は従来さほど注目されてこなかったが、そこには自伝的な要素を含む闘士の苦悩や希いが田園と都市を舞台に語られていて興味深い。これを頼りに、130年前のモリス自身の希望の中身をそのコンテキストとともに浮かび上がらせることができたと思う。

1885年の時代背景をまず見ておこう。イギリスでは1880年からつづいていた第二次グラッドストン内閣がこの年の6月に総辞職し、暫定的にソールズベリーによる保守党内閣に代わったが、年末の総選挙(前年の84

年の第三次選挙法改正が適用された選挙)で自由党が勝利。86年初頭に第三次グラッドストン内閣が組閣された。しかしこれはわずか半年の短命の内閣だった。アイルランド自治法案をめぐる自由党が内部分裂、86年夏の総選挙で自由党は保守党に敗北し、80年代の残りは保守党が(92年7月に第四次グラッドストン内閣になるまで)政権を維持する。

1880年代は70年代以来のイギリス経済の不況のなか、未熟練労働者のみならず、熟練労働者も失業や低賃金の影響を被ったことで、労働運動において社会主義的な言説がかなりの支持を得るようになった。じっさい、ハインドマンの社会民主連盟(The Social Democratic Federation)、モリスらの社会主義同盟、シドニー・ウェッブ(Sidney Webb, 1859-1947)らのフェビアン協会(The Fabian Society)がこの年代に結成されている。

ウィリアム・モリスはこの年51歳。1880年代のモリスは本業の装飾芸術作品の制作において円熟の域に達している。同時期に政治活動に精力を注いでいたことを思い合わせると、これは驚くべきことに思える。彼の前半生は社会改良運動のたぐいには関わっていなかったもので、そのコントラストは非常に印象的だ。モリスの政治的コミットメントは1876年に東方問題に関連して開始された。当初彼は自由党急進派の立場から政治的発言と行動をおこなっていたのだが、1883年にハインドマン(Henry Mayers Hyndman, 1842-1921)の民主連盟(The Democratic Federation)に加入した。それが翌84年に社会民主連盟と改称して社会主義団体としてのカラーをはっきり打ち出したのと軌を一にしてモリスも左傾化する。マルクスの『資本論』第一巻をフランス語版で熟読したのがおそらく1883年春のことだった(デザイン方面では「イチゴ泥棒」の制作年にあたる)。そしてハインドマンの独善的な組織運営に対する反発から1884年暮れに社会民主連盟を脱退、年末に社会主義同盟を立ち上げる。1885年はこの社会主義同盟での活動に本格的に打ち込む。ハマスミスの自宅を含め、ロンドン各地、あるいはイギリス各地での集会スピーチ、講演をおこなった。また社会主義同盟の機関紙『コモンウィール』を創刊、当初は月刊だったが、まもなく週刊とする。モリスはその編集長をつとめ、1890年に辞任するまでの6年間にわたって、政局について論説文を多く寄稿し、またベルフォート・バックス(Belfort Bax, 1854-1926)との社会主義運動史の連載記事、物語

として『ジョン・ボールの夢』(*A Dream of John Ball*, 1886-87)、また『ユートピアだより』(*News from Nowhere*, 1890)を連載することになる。後者はモリスの文学面での仕事として一般にもっとも知られる作品になったし、『ジョン・ボールの夢』も比較的よく知られる。それに対してあまり読まれることのない韻文物語が本稿で取り上げる『希望の巡礼』である。モリスはこれを1885年から翌年にかけて同紙に不定期に連載した。

1. 『希望の巡礼』の連載(1885-86年)

『コモンウィール』の創刊は1885年2月で、『希望の巡礼』は3月号から始まっている。物語の時代設定は1871年のパリ・コミューン、すなわち1871年3月18日から5月28日に至る約2ヵ月間パリに樹立されたコミューン議会の存続中、その運動に共鳴し参加したイギリス人の夫婦(とその友人)の物語である。この物語は断続的に連載された13のパートからなる。初回の「三月の風の言づて」(*The Message of the March Wind*)は連載とは独立した詩として発表しており、当初は連載のつもりはなかったようである。だが4月号に掲載された第二回では「希望の巡礼Ⅱ——橋と街路」(*The Pilgrims of Hope. II.—The Bridge and the Street*)と題され、メインタイトルに付された脚注には「三月の風の言づて」に登場する恋人たちはすでに「民衆の大義への共感にふれており、その二人の運命を辿ってゆくことが著者の意図である」としている。また、第13回の末尾には「次回完結」(*To be concluded*)とあり、この作品が未完であったことがわかる。結局モリスはこれを完成させることはなく、生前には単行本にしなかった。ただし抒情的な「三月の風の言づて」、「母と息子」(*Mother and Son*)、それに「人生の半ばが過ぎて」(*The Half of Life Gone*)の3篇は独立した詩篇として詩集『折ふしの詩』(*Poems by the Way*, 1891)に収録している。『希望の巡礼』が初めて正式にまとまったかたちで再録されたのは1915年刊行のモリス著作集の最終巻(第24巻)においてだった。¹『コモンウィール』掲載の各回をまとめるとこうなる。

I: *The Message of the March Wind* (1885年3月号。『折ふしの詩』に収録)

- II: The Bridge and the Street (1885年4月号)
 III: Sending to the War (1885年5月号)
 IV: Mother and Son (1885年6月号。『折ふしの詩』に収録)
 V: New Birth (1885年8月号)
 VI: The New Proletarian (1885年9月号)
 VII: In Prison—and at Home (1885年11月号)
 VIII: The Half of Life Gone (1886年1月号。『折ふしの詩』に収録)
 IX: A New Friend (1886年3月号)
 X: Ready to Depart (1886年4月号)
 XI: A Glimpse of the Coming Day (1886年5月15日号)
 XII: Meeting the War-Machine (1886年6月5日号)
 XIII: The Story's Ending (1886年7月3日号)

そういう次第で初回は連載の断りはなく、単発の詩として掲載されている。田舎の春の情景と、社会変革への希望が明るく語られた詩作品としてそれなりに完結している（以下、韻文であることを考慮して『希望の巡礼』は原文を引用したあとで筆者による逐語訳を添える）。

Fair now is the springtide, now earth lies beholding
 With the eyes of a lover the face of the sun;
 Long lasteth the daylight, and hope is enfolding
 The green-growing acres with increase begun.

Now sweet, sweet it is through the land to be straying
 Mid the birds and the blossoms and the beasts of the field;
 Love mingles with love, and no evil is weighing
 On thy heart or mine, where all sorrow is healed.

(Pilgrims of Hope I, "The Message of the March Wind," sts. 1-2)

(いまや春たけなわ、いま大地は恋人のまなざしで太陽の容^{かんばせ}をながめつつ横たわる。日は長く、希望は作物の青々と伸びる畑を抱く。／耕作地を通り、小鳥や花や野の獣たちのなかをさすらうのは心楽しい。愛と愛が混ざりあい、いかなる悪事も君の心、わたしの心をひしがず、そこではなべての哀しみが癒やされる。)

It [the March Wind] biddeth us learn all the wisdom it knoweth;

It hath found us and held us, and biddeth us hear:

For it beareth the message: "Rise up on the morrow
And go on your ways toward the doubt and the strife;
Join hope to our hope and blend sorrow with sorrow,
And seek for men's love in the short days of life."

(PH I, "The Message of the March Wind," sts. 16-17)

〔三月の風〕はわれらに告ぐ、風が知るなべての知恵を学べよと。風はわれらを見つけてとらえ、耳を傾けよと言う。／それは言づてを運び来るがゆえ。「明日立ち上がり、疑念と闘争にむけ進みゆけ、希望をわれらの希望に加え、哀しみを哀しみに混ぜ合わせたまえ、して短き命のなかで人びとの愛を求めよ」と)

『コモンウィール』に掲載された詩ということで、想定された読者層はこの機関紙を読む同志たちと、モリスが組織化したいと願う労働者たちであり、モリスが愛したコッツウォルド地方の農村を想起させるのどかな情景のなかで、社会変革にむけて連帯しようという彼らへのメッセージということになる。韻律は弱弱強格 (anapaest) の詩脚を基本とした4詩脚 (tetrameter) になっている (脚韻は abab)。おなじ韻律で書かれた第二回の最後に、初回の「三月の風」の詩を合わせて、『希望の巡礼』の連載となっている旨が注記される。

ここで『希望の巡礼』全体の粗筋を記しておく。主人公のリチャードは田舎の小村で母の手ひとつで育てられた。婚外子で、上流階級出身の父親は子どもができると彼女を捨て去ったが養育費だけは送っていた。リチャードは十代で母と死別するが、実父の援助を引きつづき受けて中等教育を受ける。その後指物師として修行し、職人となる。実父の死後、その遺産を管理している弁護士の不正により経済援助は途絶えた。愛する女性に巡り会い結婚、社会主義運動に関わりたいという願いをもち、故郷を離れて「新たなプロレタリアート」としてロンドンに出る。そこで労働争議の現場で受ける不当な弾圧や失業、貧困の苦難の日々があり、一人の同志アーサーを得て、三人でパリに向かい、コミューンのさなか、バリケードに入って革命闘争に参加するが、敗北を喫する。妻とアーサーはバリケードで絶命し、リチャードは重傷を負うが命を取り留め、故郷の田舎にも

どって遺された息子と生きる。

——ごく大まかにまとめると以上のような筋になる。最初にわたしはこの物語詩を「パリ・コミュニケーションに参加したイギリス人青年たちの愛と戦いた描いた物語詩」と紹介したが、パリ・コミュニケーションそのものはこの連載でなかなか出てこない。ようやく連載の最後の3回で扱われることになる。それまでは、主人公の青年の遍歴と、彼の妻となる女性の（田舎と都市ロンドンでの）希望と苦難の暮らしを描いている。主人公はしばらく名前が与えられぬままで物語が進むが、後のほうになってリチャードという名であることが明かされる。一方妻のほうは、最後まで重要な役割を果たし、第4節と第7節では彼女の一人称の語りになるにもかかわらず、名前は示されない。

その第4節（図1）は母がわが子に語り聞かせるという体裁をとっている。まだ母親の言う言葉がわからぬほどの幼子で、一人語りであるかのようだ。

Now, to thee alone will I tell it that thy mother's body is fair,
In the guise of the country maidens who play with the sun and the air,
Who have stood in the row of the reapers in the August afternoon, [...]
Yea, I am fair, my firstling; if thou couldst but remember me!
The hair that thy small hand clutcheth is a goodly sight to see;
I am true, but my face is a snare; soft and deep are my eyes,
And they seem for men's beguiling fulfilled with the dreams of the wise.
Kind are my lips, and they look as though my soul had learned
Deep things I have never heard of. (PH IV, "Mother and Son," st. 3)

（これはおまえだけに言うのだけれど、お母さんの身体、田舎娘の装いで、太陽と空気と戯れ、八月の午後に収穫する人びとの列に立ったこの身体は美しい。[中略] そう、わたしは美しい、わが初子よ。おまえがこの姿を覚えていられたらいいのに。この小さな手がつかんでいるこの髪は美しい。わたしは正直者であっても、わたしの顔はひとつの罠。目は柔らかく、深く、男たちを惑わすかのよう、賢き者の夢で満たされているかのよう。柔らかいこのくちびるは、わたしが聞いたこともなかったような深い叡智を魂が学んでいるかのように見える。）

44

THE COMMONWEAL

June, 1885.



All literary communications should be addressed to the Editors of THE COMMONWEAL, 27 Farringdon Street, E.C. They must be accompanied by the name and address of the writer, not necessarily for publication.

Rejected MSS. can only be returned if a stamped directed envelope is forwarded with them.

All business communications to be addressed, the Manager of the COMMONWEAL, 27 Farringdon Street, E.C. Business communications must NOT be sent to the Editors. All remittances should be made in Postal Orders or halfpenny stamp.

Subscriptions for THE COMMONWEAL, free by post: for 12 numbers, 1 copy, 1s. 6d.; 8 copies, 4s.; 4 copies, 2s. Parcels of a dozen or a quire, if for distribution, will be sent on special terms.

TO CORRESPONDENTS.

A. MANUSCRIPTS by the Socialist League on the Sudan War has been issued. Copies will be sent to anyone on receipt of stamp for postage.

NOTICE TO MEMBERS.—All papers received by the Secretary have been sent and filed at the office of the League, and are at the disposal of members.

NOTICE TO ALL SOCIALISTIC NEWSPAPERS.—The Commonwealth will be regularly sent to all Socialist Contemporaries, and it is hoped that they on their side will regularly provide the Socialist League with their papers as they may appear.

MANUSCRIPTS friends can purchase this journal and other Socialist literature at the Democratic Publishing Co., 27 Travis Street.

A. J. SMITH.—Yes, an axe belonging to a ship and dropped overboard at sea has value in the economic sense. The refuse from mines as if human labour is involved in it, value in the economic sense. The difficulty—a very natural and very real one at first—is in the ordinary use of the word "value" and its economic use. Parallel cases in common language and in scientific language are, e.g., "selection," "atom," "deposit." Yes, again. The measure of value in the average social time under average social conditions required to perform the labour. With the whole question of the intensification of labour we deal later on.

R. WILKIN.—Your letter and our reply are held over for next number.

APPEAL.

The Socialist League has decided to found a library of books, magazines, pamphlets, periodicals and daily newspapers, treating of and propagating the Socialist cause, for the free use and the education of its members. To this end the League appeals herewith to all members and to all friends and supporters of the great and just cause for which it fights to bestow, for this intended library, on the League as gifts such books and periodicals in their possession as treat on the Socialist Question. All such donations received will be duly acknowledged with the sincerest thanks on behalf of the League by the delegated librarians, in the official journal of the League. The League hopes that in answer to this appeal so many books will be forthcoming that a catalogue comprising numerous works can soon be issued.

London, March 9, 1885.

C. BENSON AND R. THEODORE.

The following additional books and pamphlets have been received for the Library of the League:—Antiquities, from Miller; Portugal, from English; a parcel of books, R. Seymour; a parcel of books, Lane; a parcel of books, W. Ramsey; Bebel's Woman and Gröndlund's Modern Socialism, from Modern Press, for review.

THE PILGRIMS OF HOPE.

IV.—MOTHER AND SON.

Now sleeps the land of houses, and dead night holds the street,
And there thou liest my baby, and sleepest soft and sweet;
My man is away for awhile, but safe and alone we lie,
And none heareth thy breath but thy mother, and the moon
looking down from the sky
On the weary waste of the town, as it looked on the grass-
edged road
Still warm with yesterday's sun, when I left my old abode,
Hand in hand with my love, that night of all nights in the year;
When the river of love o'erflowed and drowned all doubt and
fear,
And we two were alone in the world, and once, if never again,
We knew of the secret of earth and the tale of its labour and
pain.
Lo amidst London I lift thee, and how little and light thou art,
And thou without hope or fear, thou fear and hope of my heart!
Lo here thy body beginning, O son, and thy soul and thy life;
But how will it be if thou livest, and enterest into the strife,
And in love we dwell together when the man is grown in thee,
When thy sweet speech I shall harken, and yet 'twixt thee and me
Shall rise that wall of distance, that round each one doth grow,
And maketh it hard and bitter each other's thought to know.

Now, therefore, while yet thou art little and hast no thought of
thine own,
I will tell thee a word of the world, of the hope whence thou
hast grown,
Of the love that once begat thee, of the sorrow that hath made
Thy little heart of hunger, and thy hands on my bosom laid.
Thy mayst thou remember hereafter, as whiles when people say
All this hath happened before in the life of another day;
So mayst thou dimly remember this tale of thy mother's voice,
As oft in the calm of dawning I have heard the birds rejoice,
As oft I have heard the storm-wind go moaning through the
wood;
And I know that earth was speaking, and the mother's voice
was good.

Now, to thee alone will I tell it that thy mother's body is fair,
In the guise of the country maidens who play with the sun and
the air;
Who have stood in the row of the reapers in the August
afternoon,
Who have sat by the frozen water in the highday of the moon,
When the lights of the Christmas feasting were dead in the
house on the hill,
And the wild geese gone to the salt marsh had left the winter
still.
Yes, I am fair, my firstling; if thou couldst but remember me!
The hair that thy small hand clutcheth is a goodly sight to
see;
I am true, but my face is a snare; soft and deep are my eyes,
And they seem for men's beguiling fulfilled with the dreams of
the wise.
Kind are my lips, and they look as though my soul had learned
Deep things I have never heard of. My face and my hands are
burned
By the lovely sun of the acres; three months of London town
And thy birth-bred have bleached them indeed; "But lo, where
the edge of the gown"
(So said thy father one day) "parteth the wrist white as curd
From the brown of the hands that I love, bright as the wing of
a bird."

Such is thy mother, O husband, yet strong as the maidens of old,
Whose spears and whose swords were the warders of homestead
of field and of fold.
O'er many feet on the highway, often they worried the grass;
From dusk unto dusk of the summer three times in a week
would I pass
To the downs from the house on the river through the waves
of the blossoming corn,
Fair then I lay down in the even, and fresh I arose on the morn,
And scarce in the noon was I weary. Ah son, in the days of
thy strife,
If thy soul could harbour a dream of the blossom of my life!
It would be as sunlit meadows beheld from a tossing sea,
And thy soul should look on a vision of the peace that is to be.

Yet, yet the tears on my cheek! And what is this doth move
My heart to thy heart, beloved, save the flood of yearning love?
For fair and fierce is thy father, and soft and strange are his
eyes.
That look on the days that shall be with the hope of the brave
and the wise.
It was many a day that we laughed as over the meadows we
walked,
And many a day I hearkened and the pictures came as he talked;
It was many a day that we lounged, and we lingered late at eve
Ere speech from speech was sundered, and my hand his hand
could leave.
Then I wept when I was alone, and I longed till the daylight
came;
And down the stairs I stole, and there was our housekeeping dame
(No mother of me, the founding!) kindling the fire betimes
Ere the haymaking folk went forth to the meadows down by the
limes;
All things I saw at a glance; the quickening fire-tongues leapt
Through the crackling heap of sticks, and the sweet smoke up
from it leapt,
And close to the very hearth the low sun flooded the floor,
And the cat and her kittens played in the sun by the open door.
The garden was fair in the morning, and there in the road he
stood
Beyond the crimson daisies and the bush of southwold.
Then side by side together through the grey-walled place we
went,
And O the fear departed, and the rest and sweet content!

図1 『コモンウィール』1885年6月号。モリス『希望の巡礼』第4回「母と息子」を掲載。

この節から韻律は弱弱強格 (anapaest) の6 詩脚 (hexameter) で2 行ずつ脚韻を踏む二行連句 (couplet) の詩型になる。ただし弱弱強格を基本としながら、弱強格 (iamb) が頻繁に混じるし、たまに強弱弱格 (dactyl) も入るので、そのあたり厳格ではない。しばしば6つの詩脚のうち、3つ目の詩脚が終わったところで中間休止点 (caesura) が入る。またいわゆる「女性韻」(feminine rhyme) もかなり使われる。一見したところでは英詩としては1行が長いという印象を受けることだろう。この韻律の問題については後でまたふれたい。

この女性は『ユートピアだより』の未来世界であれば、エレンという日に焼けた身体的にも知的にも活発な女性、主人公のゲストを魅了する女性となったことだろうし、また外見的にはエドワード・バーン＝ジョーンズ (Edward Burne-Jones, 1833-98) の描く女性像を想起させる。(広義の) ラファエル前派的な女性像で、「ファム・ファタール」ともなりうるタイプである。じっさい、物語中の主要な人間関係にこの「ひとつの罫」が作用することになる。社会主義の機関紙の紙面にラファエル前派的タイプが導入されている。ニコラス・サーモンが指摘しているように、ラファエル前派主義と社会主義という異種のソースの同時併用によって複雑かつ曖昧な女性像が提示されているといえるだろう (Salmon 16)。

第9節で、主人公リチャードと妻の二人のロンドンでの貧困生活にもうひとりの男性アーサーが入ってくる。この青年は裕福な家の生まれだが、社会主義の大義に共鳴し、リチャードから理論的な教えを受けてそれを熱心に吸収する。失業中のリチャードに金銭的に手をさしのべてくれる。だが親交が深まり、夫妻のあばら家に招かれて親密となるにつれて、彼はリチャードの妻に対して特別な思いをもつようになる。妻の容貌についてはいま見たとおり。たまたま政治の話をしていた際にリチャードが「裏切り」という語を口にしたとき、アーサーの顔色が変わり、リチャードはその意味を悟る。

As I spoke the word "betrayed," my eyes met his in a glance,
And swiftly he turned away; then back with a steady gaze
He turned on me; and it seemed as when a sword-point plays

Round the sword in a battle's beginning and the coming on of strife.
 For I knew though he looked on me, he saw not me, but my wife:
 And he reddened up to the brow, and the tumult of the blood
 Nigh blinded my eyes for a while, that I scarce saw bad or good,
 Till I knew that he was arisen and had gone without a word.

(PH X, "Ready to Depart," st. 2)

(「裏切られた」という言葉を語ったときに、わたしと彼の目が一瞬合い、それから彼はすぐに目をそらした。それからまたわたしのほうをまじまじと見た。闘いの始まりに、攻撃に際して剣の切っ先を交わすかのようだった。だが彼はわたしを見ているようでいて、じつは妻を見ているのだということがわかった。彼は額まで顔を赤らめた。わたしは頭に血が上り、しばし周りがろくに見えなくなり、善悪の区別もつかなくなった。やがて彼は立ち上がり、一言も発せずに出て行った。)

アーサーが出て行って夫婦二人だけになると、妻が泣きながら彼に近づいてきて、しばらく二人は抱擁するが、ふたたび離ればなれになり、「刺すような激しい痛み」をたがいに感じながら無言で座している。それは「実りなき初夜の床で途方に暮れている、恋人たちのあいだに置かれた剣さながら」(As the sword 'twixt the lovers bewildered in the fruitless marriage bed)であった。

ここはモリスの伝記の多くで、モリスの妻ジェイン (Jane Morris, 1839-1914) と D・G・ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti, 1828-1882) の交際についてモリスが苦悩した間接証拠としてよく引用されるくだりである。² じっさい、パリ・コミューンが起こった1871年というのは、ケルムスコット・マナーをモリスがロセッティと共同で借りた年でもあった。その夏、モリスは妻ジェインと娘二人、それにロセッティをそこに残して、1ヶ月半のアイスランド旅行に出かけてしまう。もっとも、三角関係のテーマは初期詩篇からすでにモリスは取り上げているという事実があるわけで、実体験がそのまま反映していると見るのは単純過ぎるだろう。

それでも、「裏切り」に気付いたりチャードは、アーサーを排除するのではなく、むしろ恋敵とそして妻と相携えて、三人でパリ・コミューンの労働者たちの戦いに参入する。これまたモリス的な解決の道といえようか。パリに入った三人は革命の高揚感を実感する。

So at last from a grey stone building we saw a great flag fly,
 One colour, red and solemn 'gainst the blue of the spring-tide sky,
 And we stopped and turned to each other, and as each at each did we gaze,
 The city's hope enwrapped us with joy and great amaze.

(PH XI, "A Glimpse of the Coming Day," st. 2)

(それで、ついにグレイの石の建物から、大きな旗がはためくのを見た。赤一色で、春の季節の空の青に映えてへんぼんとひるがえっている。われわれは立ち止まり、たがいに向かい合い、たがいを見つめた。この都市の希望が喜びと大いなる驚異をもってわれわれを包んだ。)

しかし、もちろんパリ・コミューンは労働者たちの敗北、ヴェルサイユ政府軍による蜂起者たちの虐殺で終わる。弾圧者たちが使用する近代兵器(「戦争機械」)に対して蜂起者たちはなすすべもない。敵の砲弾が炸裂し、負傷者の介護の仕事でかけまわっていた妻が命を落とす。主人公は負傷で済むが、アーサーも同時にそこで死ぬ。

Both dead on one litter together, then folk who knew not us,
 But were moved by seeing the twain so fair and so piteous,
 Took them for husband and wife who were fated there to die,
 Or, it may be lover and lover indeed—but what know I?

(PH XIII, "The Story's Ending," st. 4)

(死んだ二人がひとつの担架で横たえられていたときに、われわれを知らぬ人びとは、その二人がかくも美しく、かくも哀れであるのを見て心を動かされ、二人をともに死ぬ運命であった夫婦と受け取った。あるいは恋人同士なのかもしれないと——だがわたしに何がわかるだろう。)

死んだ妻と同志アーサーを悼みつつ、苦い、複雑な心情が生き残ったりチャードによって語られている。エンディングでは、このコミューンでの敗北の経験が未来の世代に生かされるであろうという希望をもって結ばれる。

... Yet my soul is seeing the day

When those who are now but children the new generation shall be,
 And e'en in our land of commerce and the workshop over the sea,

Amid them shall spring up the story; yea the very breath of the air
 To the yearning hearts of the workers true tale of it all shall bear.
 Year after year shall men meet with the red flag over head,
 And shall call on the help of the vanquished and the kindness of the dead.

(PH XIII, “The Story’s Ending,” st. 1)

(だがわが魂は来たるべき時代を見ている。いまは子どもたちにすぎないのが、新しい世代となる未来を。そして商業の国、海外の工場であるこの国〔イギリス〕において、彼らのなかで物語が生じるであろう。そう、風の息吹そのものが労働者たちの切望する心にむけて、そのすべての真の物語を広めるだろう。年ごとに人びとは頭上に赤旗を掲げて集うだろう、そして敗北を喫した人びとの助力と死者たちのやさしさを求めることだろう。)

2. 『社会主義者のための歌』(1885年)

以上、順を追って『希望の巡礼』の大筋を追ってみたが、この物語詩をどのように評価できるだろうか。公式のモリス伝の作者マッケイル以来、これを積極的に取り上げているのは少数派といえるが、ジャック・リンジーは、これが非常に急いで書かれているものの、「強い情感が込められており、バイロンの『ドン・ジュアン』以後、19世紀の間に書かれた英国の同時代を扱った物語 (contemporary narrative) のなかで最重要の作品である」(Lindsay 308) と断言している。階級の障壁を打ち破って新たな次元の人間観を得たものとしては英語で書かれた最初の創作であり、ゴーリキーほか社会主義リアリズムの先駆者たちをも先取りしている、とまで称賛している。ジェシー・コクマノーヴァは、モリスに余裕があつてこの連載版に十分な修正を加えて単行本化していたら「英語での最初の〔本格的な〕社会主義的英雄叙事詩」となっていたらと言う (Kocmanová 207)。フェミニズムと社会主義の観点からすぐれたモリス研究をおこなっているフローレンス・ブースは、主人公リチャードの展開を「創造性と革命へのコミットメントの源泉についてのモリスの十全な分析のひとつ」(Boos, “Narrative Design” 147) であると評価し、さらに女性の語りについても積極的に見ている。E・P・トムズンは、『希望の巡礼』の語彙や措辞がロマン主義のイディオムに満ちていることのマイナス面を指摘しつつも、新た

な次元の英雄的価値をこの詩が再発見していること、また女性の個性と感情的アイデンティティに敬意を払っている点でヴィクトリア朝のロマン主義の因習と袂を分かっていると述べている(672)。ニコラス・サーモンは、「三月の風の言づて」、「母と息子」そして「人生の半ばが過ぎて」といった「リアリティに影響されない切望と希望の想像世界に滑り込むことによって」詩作品として成功しているが、その反面、19世紀の労働者が置かれた苛酷な状況をリアルに描き出そうとしたくだりは一貫性に欠け不十分だと述べている(Salmon 24)。牧歌的な田園風景のなかでの希望と都市の汚穢にまみれた労働者の闘争の記録との懸隔が際立っているというのはまあそのとおりではある。

モリス自身は、友人で文学研究者のバクストン・フォーマン(J. Buxton Forman, 1842-1917)から単行本化を進められたものの、大幅な修正を要するという理由で固辞した。³ 主人公リチャードがロンドンに出て社会主義団体の集会に参加するくだりが第5節に出てくるが、その集会の様子はどう見ても1880年代半ばの社会主義同盟のそれであり、またモリスの自画像もそこには出てくる。そのあとリチャードは1871年のパリ・コミュンにおもむく。つまり明らかな時代錯誤が生じてしまうわけであり、この時系列を正すという難題に取り組む必要をモリスは認識していたが、多忙を極めていて、その修正作業に当たる時間が取れなかったのだろう。だがそのような不備があったとはいえ、韻文でパリ・コミュンに向かう「巡礼」たちの希望と不安、それに葛藤が独特なリズムで鮮やかに描き出されているように思われ、フォーマンが単行本化を願ったのも理解できる。

ここで『希望の巡礼』との関連で、モリスが1870年代後半から手がけるようになった新種の詩作について考えてみたい。それは集会や行進で歌われることを目的とした一連の詩である。その第一作となったのが1878年初めに労働者中立示威集会に際して作った「目覚めよ、ロンドンの仲間たち」だった。5連からなるバラッド詩形(普通律)による詩で、第一連はこうなっている。

Wake, London Lads, wake, bold and free!
Arise and fall to work,

Lest England's glory come to be

Bond servant to the Turk! (Qtd. in Thompson 219)

(目覚めよ、ロンドンの仲間たち、目覚めよ、大胆で自由な者たち。立ち上がり仕事にかかれ、イングランドの栄光がトルコの奴隷になり下がらないように。)

この時期モリスは自由党急進派のグループと連携し、東方問題に関してディズレイリ保守党政権の方針(ブルガリアで残虐行為を働いたトルコを支援して、ロシアと開戦する準備をしていた)に反対し、反戦を訴えていた。対ロシア戦争を歓迎する大衆レベルでの好戦的な気分というのがかなり広まっていた、それは当時のミュージック・ホールの流行歌のなかの

We don't want to fight, / But, by Jingo, if we do,

We've got the ships, we've got the men, / we've got the money too.

(俺たちや戦はご免だが、誓って言うぜ、いざとなりゃ、軍艦あるぜ、兵隊も、お宝だって不自由ねえ。)

といった好戦的な(まさに Jingoistic な)歌詞に反映されている(qtd. in Henderson 177)。モリスの詩の趣意はそうした対ロシア強硬策に対して、「ジンゴイズム」に飲み込まれないよう、反戦運動にむけて立ち上がるようにロンドンの人びとに呼びかけている。

東方問題協会の関係者から依頼されてモリスはこの「目覚めよ、ロンドンの仲間たち」を書き、それが1878年1月16日にロンドンのストランド街にあったエクセター・ホールでの集会で3千人の参加者によって斉唱された(Henderson 177-78)。ジョージアーナ・バーン＝ジョーンズによると、モリスは「見事な直感力」を発揮してその歌を「屈強の北欧人の昔の家」(The Hardy Norseman's Home of Yore)の曲に合わせて作った。「一階席にわたしたちが着くと、ホール全体でその新しい詩を刷った白いリーフレットが眼前に点々と広がり、リハーサルなしで、混乱もなく、起立している大勢の人びとによって歌われた。5連からなる詩の一連歌い終わるごとに割れんばかりの拍手喝采がわき起こった」(Burne-Jones 2: 84)。組織者の一人ヘンリー・ブロードハースト(Henry Broadhurst, 1840-1911)によれば、

「燃えるような言葉が大勢の人びとによって轟くような声で斉唱され、電流が走って体がしびれるようだった」(qtd. in MacCarthy 384)。モリス自身も妻ジェインに宛てた手紙のなかで聴衆が上手に斉唱してくれたことを伝え、「その歌声が上がるのを聞いてわたしが相当に興奮したことは君にも想像がつくだろう」(Kelvin 1: 435)と述べている。若い時期からモリスは自作品を友人や家族に朗読して聞かせることを好んだのだが、大勢の人が自分の詩を歌うというのは40代半ばにして初めての経験であった。しかも3千人という大集会での斉唱である。明らかにこの経験は詩人モリスに大きなインパクトを与えた。ひとつの目的(ここでは反戦)に賛同した人びとが一同に会して運動歌を歌う、その集団的声の強烈な響きをもつ独特な力をこの機会にモリスは認識したといえるだろう。それはエリザベス・ヘルシンガーが指摘するように、異質の、組織だっていない個々ばらばらの人間を、ひとつの「秩序だった」組織体にまとめあげる、そういう歌の力についての認識なのだった(Helsing 109)。

しばらく自由党急進派の一員として活動したのち、1880年代に入ってモリスは自由党と袂を分かち、1883年には自身が社会主義者であることを宣言する。詩人としての彼の天分(の一端)が、後半生にいたって初めて、社会主義集会で歌われる(あるいは口ずさまれる)歌の作詞に注がれることになった。「その日は来たる」(The Day Is Coming)、「主人はいらない」(No Master)、「すべて大義のため」(All for Cause)、「労働者たちの行進」(March of the Workers)といった歌がそれである。1883年から書かれた詩の7編が1885年に『社会主義者たちのための歌』と題してパンフレットとして社会主義同盟から刊行された(『希望の巡礼』の初回「五月の風の言づて」も含まれている)(図2)。これらの作詞

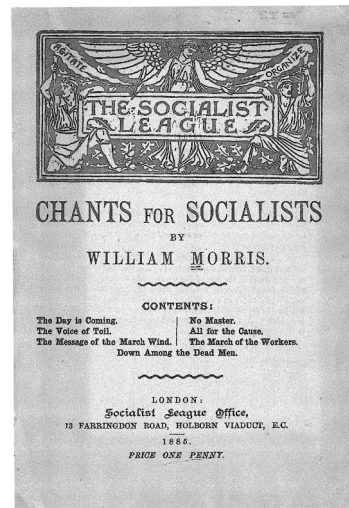


図2 モリス『社会主義者の歌』(1885年)表紙。上部はウォルター・クレイン画。

は従来の評価ではモリスの文学面での仕事としては副次的なものと思われる傾向があったが、20世紀に入ってから長く社会主義の集会や行進で歌われた詩であるという点でもっと注目されてよいように思われる。クリストファー・ウォーターズが指摘しているように、この種の歌はモリスのものが最初というわけではなく、それ以前にチャーティスト運動のなかで生まれた歌があり、それらはバイロンやシェリーらロマン派詩人の影響を多分に有する内容であった。モリスのこの方面の作品もロマン主義的な特徴をもつのではあるが、モリスの詩が描く未来像は他の作者の手になる同種の歌と比べて抽象的なイメージが少なく、労働者たちの暮らしの現状とあるべき未来の対照がより具体的に示されている。エドワード・カーペンター (Edward Carpenter, 1844-1929) 編の『労働歌集』(*Chants of Labour*, 1888) を含む、1880年代から半世紀ほどの期間にわたって刊行された社会主義運動歌のアンソロジーを概観すると、モリスの作品がかなりの頻度で掲載されていて、根強い人気を有していたことがわかる (Waters 132-33)。スペイン市民戦争に参加した英国人闘士を描いたケン・ローチ (Ken Loach, 1936-) 監督の映画『大地と自由』(*Land and Freedom*, 1995) のなかで、モリスの「その日は来たる」のなかの

Come, join in the only battle wherein no man can fail,
Where whoso fadeth and dieth, yet his deed shall still prevail.⁴
(“The Day Is Coming” 終わりから2つめのスタンザ)

(さあ、加わりたまえ、いかなる者も挫折しえぬ唯一の闘いに。そこでは人は死んで消えゆくとしても、その行為はずっと力をもちつづけるだろう。)

という詩句が引用される場面が出てくる。ローチは1930年代半ばにモリスが引用される状況が十分にあったことをふまえている。

3. 『オデュッセイア』韻文訳(1887年)とコミットメント

『希望の巡礼』の第5節で、リチャードは妻とロンドンに移り住み、指物師として働いている。そこで彼が社会主義者の集会に初めて出席した様子

が書かれている。「重苦しい汚れた部屋」に集う30名ほどの人びとは概ね倦怠感を漂わせているので、リチャードは部屋に入るや落胆する。だが議長に指名された「白髪まじりの男の名」が登壇し話を始めるとリチャードはそれに強い感銘を受ける。

He rose, thickset and short, and dressed in shabby blue,
 And even as he began it seemed as though I knew
 The thing he was going to say, though I never heard it before.
 He spoke, were it well, were it ill, as though a message he bore,
 A word that he could not refrain from many a million of men. [. . .]
 Of man without a master, and earth without a strife,
 And every soul rejoicing in the sweet and bitter of life:
 Of peace and good-will he told, and I knew that in faith he spake, [. . .]
 But they sat and made no sign, and two of the glibber kind
 Stood up to jeer and to carp his fiery words to blind. [. . .]
 He answered the sneers and the silence, so hot and eager he grew;
 But my hope full well he answered, and when he called again
 On men to band together lest they live and die in vain,
 In fear lest he should escape me, I rose ere the meeting was done,
 And gave him my name and my faith—and I was the only one.

(PH V, "New Birth," sts. 7-8)

(その男は立ち上がった。ずんぐりとした体つきで、着古した青い服をま
 とっていた。彼が話し始めようとした途端、初めて聞くというのに、何を
 話そうとしているのかわたしにはわかった気がした。その善し悪しはとも
 かく、自分には語るべきことがあるのだ、といった態度で彼は話をした。
 万人を代表して、どうしても言わずにはいられない言葉を彼は語った。〔中
 略〕主人のいない人間について、闘争のない大地について、人生の苦楽を
 万人が楽しんでいる世界について。平和と善意について彼は語った。信念
 をもって語っているのがわかった。〔中略〕だが〔集まっている〕人びとは
 座ったままで何の反応も示さなかった。そして軽口ばかりたたくふうな男
 が二人、立ち上がって文句をこね、彼の燃えるような言葉に水をさそうと
 した。〔中略〕彼は冷笑と沈黙に対して答えた。とても熱がこもってきた。
 だが彼が答えたときにわたしの希望は十分にふくらんだ。無駄に生きて死
 んでしまわぬように連帯しようではないか、と彼が呼びかけたとき、彼を
 つかまえそこなわないようにと、わたしは集会が終わる前に席を立ち、彼
 に名乗り、主義を誓った。——そうしたのはこのわたし一人。)

ここで出てくる青い服を着た人物はモリスその人にほかならず、またこの集会は社会主義同盟の集会を彷彿とさせる。前述のように、パリ・コミューンの時期にはありえない「時代錯誤」の場面として、語りの点では破綻しているわけではあるが、それでもこのくだりは1885年当時の社会主義同盟の集会の雰囲気を伝えるものとして興味深い。青い服の男のアジテーションに感銘を受けて、主人公リチャードは「新たなプロレタリア」として革命後の世界を夢想する。彼にとってロンドンの町並みさえも以前よりも明るく見えてくる。

当時のモリスの日記にも綴られているように、社会主義同盟のスローガンである「教育せよ、掻き立てよ、組織せよ」(Educate, Agitate, Organise)という目標は、まさに言うは易く行うは難しで、モリスは多くの困難に直面した(Boos, *William Morris's Socialist Diary*)。モリスの次女メイ(May Morris, 1862-1938)はつぎのように当時を回想している。

それ〔1884年暮れの社会主義同盟結成〕に続く6年間はまことに語るに長い、講演と旅行と事務仕事と編集作業にあけくれた年月であったが、なかでもいちばん難しかったのは、異なった気質をもつ者たちの間に争いが起こらないようにすることであった。彼らは熱心かつ性急で、その多くは立派な志を持っていたのではあるが、互いを誤解しあう才能にかけては天下一品だったのである。〔中略〕毎週末には、父はロンドンやその周辺部で演説をした。そしてまもなく二、三ヶ月おきの地方遊説の旅を始めた。ロンドンでのおさまりの仕事だけで一週間の父の余暇時間はほとんどふさがってしまった。月曜は社会主義同盟の評議会、水曜は刊行委員会、木曜は政策委員会、金曜はハマスミス支部の会合、といった具合であった。〔中略〕これらの仕事に加えて、「機関紙販売隊」という極めつきの仕事も時々入った——この種の殉教のような仕事に不向きな人には、それは辛く屈辱的でさえある仕事だった。〔中略〕日曜日はといえば、たいてい午前中は街頭集会、夜は講演会だった——遠く離れたイースト・エンドのとあるクラブの一室がしばしば会場として使われたが、そこでは半数ぐらいの者が後方でしゃべったり、酒を飲んだり、玉突きをしたりしていた。〔中略〕『コモンウィール』の告知欄を読み返すだけで、〈ロンドン砂漠〉を汽車や乗合馬車でさまよった不毛な旅の記憶が蘇ってくる。(May Morris 2: 187-89)

メイ・モリスは父親の政治運動にも協力し、集会に参加したり機関紙販売

を手伝ったりしたので、その活動に伴う苦労を実感としてわかっていた。そのときに味わった思いをおよそ半世紀後に回想したのが上記の一文である。『希望の巡礼』のなかで描かれた社会主義集会のある種の「気だるさ」もここに証言されている。「ロンドン砂漠」という表現に、メイの脳裏に刻まれたまさに砂を嚙むような不毛な思いが凝縮されているといえよう。

そうした心痛を伴う社会主義活動のさなかの1886年10月29日にモリスは長女のジェニー (Jenny [Jane Alice] Morris, 1861-1935) 宛の手紙でこう書いている。

残念ながら、色々なことをしすぎてきりきり舞いの状態なので、悪いけれどあまり長く書いていられません。〔中略〕火曜にはランカスター、水曜にはプレストンに行きます。木曜にロンドンにもどり、できれば金曜の晩か土曜の朝にはそちら〔ケルムスコット〕に行きたいのだが、月曜には会議に間に合うように町〔ロンドン〕にもどらなければなりません。今朝は秋晴れの上天気で、とても暖かった。マートン〔アビーの仕事場〕まで歩いて行きたい気がしたが、いかんせん、そうしている暇がない。『オデュッセイア』の第10歌を終わらせたところで、年内には12歌を訳し終わるでしょう。何かものを書く仕事に当たるためには、少しは痛風気味のほうがじつはわたしには都合がいいのです。『希望の巡礼』を一冊にまとめるために手直しを始める予定。ただし追加や変更箇所がたっぷりとなる。(Kelvin 2: 587)

『コモンウィール』での『希望の巡礼』の連載の最後が同年7月3日号であった。それから3ヵ月後の時点でその単行本化のための修正作業を考えていることがわかる。すでに見たように結局これは計画倒れに終わるが、『オデュッセイア』の英語韻文訳のほうは仕上げ、翌87年に全2巻を刊行している (*The Odyssey of Homer*)。この時期のモリスは、社会主義同盟関連の会議や『コモンウィール』誌の編集作業、論説文の執筆、それに全国各地での社会主義講演を数多くこなしていた。確認できるかぎりでは1886年に91回、97年に95回の講演と集会演説をおこなっている (LeMire 251-269)。また本業のデザイン制作と商会運営の仕事もあり、文字どおり多忙をきわめていた。どう見ても生涯で一番忙しいときで、そこにさらにホメロスを翻訳する時間をどうやって作ることができたのか、不思議なくらいだが、

日々のさまざまな仕事の合間に加え、講演のため月に何度もおこなった汽車旅行の車中、あるいは(ダブリン行き折など)船中でもかなりその作業を進めたのだった。

モリスの没後間もなくオフィシャルな伝記を執筆したJ・W・マッケイル(J. W. Mackail, 1859-1945)は本業が古典学者であり、専門家としての立場からモリスの『オデュッセイア』訳についてかなり辛辣な批判をしている。モリスが自身の訳業を「わたしの翻訳はこれまでのところ本物で、他のすべての翻訳のごとく原文を回りくどく訳したものではありません」と述べた友人宛の手紙を引いて、マッケイルは「ホメロスであれほかの大詩人であれ、逐語的に訳そうとすると、原文のなかの翻訳しえぬ性質ゆえにのみ詩的であるくだけで、どうしても平板で凡庸になるきらいがある」(Mackail 2: 181)と述べて、モリスの翻訳に難があることを示唆している。翻訳の韻文形式として6詩脚2行連句を用いたことにもマッケイルは異議を唱えている。「行の長さや動きの速度に関して[『オデュッセイア』原文の形式である]ギリシア詩の6詩脚を再現している点で立派ではあるのだが、その韻律がゆったりして変化をつけやすいという性格じたいに翻訳者は足を取られてしまいかねないのではないか」(Mackail 2: 181)と述べている。⁵ この詩型をモリスはまずアイスランド・サガに基づく自作の叙事詩『ヴォルスング族のシグルズ』(*Sigurd the Volsung*, 1876)で用いており、これについてはマッケイルは「ホメロス以後に書かれたもっともホメロスのな詩」(Mackail 1: 332)として高く評価している。⁶ だがホメロス訳のほうはこの詩型が合わないかと断定しているのである。

オスカー・ワイルド(Oscar Wilde, 1854-1900)のモリス訳『オデュッセイア』評はマッケイルの辛口の評と好対照をなす。第一巻が出た直後にロンドンの夕刊紙『ペル・メル・ガゼット』(*The Pall Mall Gazette*)に寄せた書評のなかでワイルドは「わが現代詩人たちすべてのうちで、ウィリアム・モリス氏はその資質と技量によってオデュッセウスの放浪という驚嘆すべき叙事詩をわれわれのための翻訳する資格をもっともよく備えた詩人である」(Wilde 73)と述べて、モリスの『オデュッセイア』訳から得られる喜びを表明し、その訳業を称賛している。⁷

古典学者であるマッケイルはモリスの訳業が「専門的」な手続きをふま

えてなされていないという点も問題視しているようである。なにしろ車中や船中、あるいは作業場でデザイン制作に当たっている合間などに時間をみつけて翻訳をおこなっていたわけであり、そういう状況からしてアカデミックな翻訳にはなりえない。一時期モリスの秘書をつとめたH・ハリデイ・スパーリング(Henry Halliday Sparling, 1860-1924)による以下の回想はモリスがどのように仕事をしていたのかを垣間見させてくれる。

彼はよく木炭か筆か鉛筆を手にして、イーゼルを前にして立っていたり、スケッチブックを前にして座っていたりしたものだが、そうしている間中、ホメロスのギリシア語をぶつぶつとつぶやきながら(彼の家族の表現では「マルハナバチのようにぶんぶん言いながら」、明快で思い切りのよい筆さばきでデザインを描いていった。それから、つぶやきの調子が変わった。英語の反訳が出てきたのである。このときは『オデュッセイア』を翻訳中だった。部屋をうろうろと歩き回り、ずっと詩句をつぶやきながら、パイプに煙草をつめて火をつけたり、立ち止まって複数あるイーゼルのひとつに一筆二筆描き加えたりしたかと思うと、机に向かって、やおらペンを取り、しばし猛烈な勢いで書きつづけた。20行、50行、100行、あるいはもっと多いこともあった。[中略]書く手の速度が次第に緩やかになって、彼の視線がふとイーゼルか、スケッチブックか、執筆中の何かの原稿のひとつに向けられると、今度はそちらの仕事に移っていった。そんなにたくさんの形式の異なる創作を、楽々と取っかえひっかえして、しかもびたりと前にやめた箇所から取りかかり、けっしてまごつかずに思考の脈略を取りもどすことができる。[中略]そのありさまは、傍らで見ていた青年にとってはおほとんど恐ろしいほどのものだった。(Sparling 37-38)

「ワーカホリック・モリス」と呼びたくなるようなモリスの仕事ぶりであるが、ひとつひとつの仕事に向かう際の彼の集中度がいかに強かったかを印象づける。そしてモリスにとってその仕事が喜びにほかならなかったことが伺える。たとえば北部イングランドのプレストン(ディケンズの『ハード・タイムズ』のモデルとなった産業都市)に向かう汽車のなかでホメロスのギリシア語を「マルハナバチのようにぶんぶん言いながら」(bumble-beeing) 英語韻文に訳しているモリスを思い描くと、傍目には苦吟しているように見えたのかもしれないが、それはどうやら愉悦に満ちた営為で

あったらしいのである。1887年8月25日に(おそらくジョージアーナ・バーン＝ジョーンズ宛に)書いた手紙のなかでモリスはこう書いている。「わたしはいま、取り返しのつかない誤りをおかしてしまいました。なんとオデュッセイア[の翻訳]を終えてしまったのです。あとは少し清書するぐらいしか残っていません。それでかなり悲しく思っているのです」(qtd. in Mackail 2: 187)。冗談めかしつつも、『オデュッセイア』翻訳をこれ以上続けられないのを惜しんでいる。⁸ そもそも苦難にみちた漂流をへて故郷イタケに帰還する英雄オデュッセウスの物語は、社会主義運動の激務に耐える活力をモリスに与えてくれるようなものだったのではないか。

モリスの『オデュッセイア』訳を一箇所だけ見ておこう。第5巻のカリュプソの挿話の部分から。英雄オデュッセウスがオギュギア島に漂着したとき、そこに住む女神カリュプソは彼を救助し、自分の夫として島にとどまるなら不死の身にしてあげようと説得し、しばらくその島で同棲する。だがオデュッセウスは懐郷の情に堪えず、結局ゼウスのとりなしがあって出立が許される。ところが女神はまだ彼に未練があり、こう述べて残るように説く——そなたは帰国を果たすまでに大いに苦しみますよ。それを知っておれば、わたしとこの館にとどまり、不死の身になっていたものを。妻との再会を切望しておるが、姿形はわたしのほうがはるかにすぐれておるではないか。人間の女が容姿で女神にかなうはずもないのだから。それに対するオデュッセウスの返答を、以下、モリスの訳文で引用する(松平千秋訳も添える)。

Therewith all-wise Odysseus this answer forth did send:
 “Be not wroth herewith, great Goddess, for I know full certainly
 That lacking in all beside thee is the wise Penelope,
 Both in comeliness and stature and in all wise to behold;
 For she is of men that perish, and thou deathless and waxing not old.
 Nevertheless e’en so all days daylong do I yearn
 To get me back again homeward and to see my day of return.
 But if some God should wreck me as I wend o’er the wine-dark deep
 I will bear it, for in my breast an enduring heart I keep.
 Many woes and toil abundant in the war, on the wave of the sea,

Have I suffered and done already; and of these let this one be."
 So he spake, and the sun sank under, and the dark drew on apace;
 And they gat them away together in a nook of the hollow place,
 And fulfilled their love and their longing as each by each they lay.

(Morris [trans.], *The Odyssey*, Book V, ll. 214-27; CW 13: 72)

(智謀豊かなオデュッセウスはそれに答えて、「尊い女神よ、どうかそのことでわたしにお腹立ちになりませぬよう。思慮深いペネロペイアといえども、相対して見れば、その容貌も体格もあなたに劣ることは、わたし自身十分に承知しております。こちらは人間の身、あなたは不老不死の神でいらっしゃるのだから。しかしそれでもわたしはこれまでずっと、家へ帰って帰郷の日を迎えたいと思いつづけ、それを願ってきたのです。たとえ葡萄酒色の海のうえて、どなたかの神様によって難破させられようとも、艱難に負けぬ不動の心を持って耐えるつもり、すでにこれまでの波の上、干戈の間で幾多の苦難に遭い、苦しみ抜いてきたわたしです。さらにそのような難儀が重なってきたとて、なんのことがありましょう。」このようにいったが、やがて日は落ち夕闇が訪れてきた。二人はうつろな洞窟の奥へ退^{さが}って互いに寄り添い、愛の喜びに浸った。[ホメロス、上巻、138-39])

カリュプソのもとに逗留して8年目のことなので、オデュッセウスはトロイ戦争にむけてイタケから出帆した際に妻と最後に会って以来少なくとも17年は経っている。妻ペネロペイアはもう30歳代半ばか、あるいは40歳を過ぎているか。永遠の若さを誇る女神との差は広がるばかりであろう。しかも女神は「不死の身」という条件を英雄に提示する。だがその申し出にもかかわらず、オデュッセウスは死すべき人間の世界にもどる意向を女神に表明している。言い換えるなら、ここでオデュッセウスは、不断の変化をとげ、やがて老いて滅んでゆく、神々の観点からすれば「不完全」このうえない人間の生に回帰してゆこうとする意志を告げている。

ここまで書いてみると、これはモリスのロマンス(韻文、散文を含めた彼の物語作品)と重なるモチーフであることに気づかされる。アルゴナウタイの金羊毛の物語のように、あるいはもっと古くは、不死の水を求めるギルガメシュの叙事詩のように、不死への激しい渴望が物語の一定型をなしており、モリスの物語もそれを用いているが、願望充足の話にはけっしてせず、彼の主人公たちは不死への切望と死すべき定め^{きまり}の断念とのあいだ

の葛藤に身を焦がしながらも、ひとつの冒険を果たしたあとで、自身の出発した地点へ、すなわち死すべき同胞たちのコミュニティへと回帰してゆく——『世界のはての泉』(*The Well at the World's End*, 1896) のラルフのように。いま見たカリュプソの挿話は、ホメロスの叙事詩が神話的主題を媒介としながら神話からの解放を図った物語であることを示唆しており、この点でもモリスのロマンスに連なっている。そしてモリスの『オデュッセイア』韻文訳は、この叙事詩的精神(がもたらす解放感)に貫かれていると思われ、いま挙げた同時代の賛否両論で言うなら、わたしはワイルドの評に賛同したい。

おわりに

以上、1880年代半ばのモリスの仕事を『希望の巡礼』を中心として、社会主義運動のなかで歌われるための一連の詩、そして『オデュッセイア』韻文訳と合わせて見てきた。ここで強調しておきたいのは、『希望の巡礼』の大半で用いた詩型と『オデュッセイア』の訳で用いた詩型が同一で、6詩格2行連句で作られているということである。前述のように、1876年刊行の『ヴォルスング族のシングルズ』で最初に用いられた詩型(『シングルズ』韻律)であった。それが東方問題に関連してモリスが生涯で初めて政治にコミットした時期と重なるのは意味深長である。この韻律がモリスの身体的精神的リズムとなって彼のコミットメント開始後の活動パターンを作り出していたと言えるのかもしれない。⁹

ヘルシンガーはモリスの後期作品の韻律について示唆に富む指摘をしている。彼女によれば、モリスの韻律と押韻ミッターライムの使用法は「抗しがたい律動を強調するための構造」としてであり、言語と統語法は明確さを保持しつつ反復しやすい型に配列されている。

愛読した[ウォルター]スコットの例(「最後の吟遊詩人の歌」のような物語詩)にならってモリスはまずリズムを文学形式と口承形式の境界線を再び開放するために用いた。社会主義運動に乗り出す数年前に、彼は叙事詩の語りのために普通律(common measure)を発展させた。それはハーバート・

タッカーが鋭敏に指摘しているように、行の中間と末尾の押韻のあと休止点を入れることで無音の強勢がひとつ加わる。それによって英雄6詩脚〔6詩脚2行対句〕が英国バラッドの韻律（押韻4強勢、4行連）に転じる。韻律において英国バラッドのリズムを偉大な叙事詩の重さと広がりへと溶接することは〔中略〕モリスにとって政治的意味を有していた。それは叙事詩を純然たる民衆文化的な歌の前史の一部をなすものとして回復させることである。（Helsingier 107-108）

伝承バラッドのような「普通律」の発展型として『シゲルズ』、『希望の巡礼』、また『オデュッセイア』訳のリズムがもたらされているという興味深い指摘がここでなされている。

『希望の巡礼』の連載中であった1886年2月にモリスは『ペル・メル・ガゼット』の「良書百選」(the Best Hundred Books)のアンケートに回答を寄せた。そこで彼はホメロス、ヘシオドス、『エッダ』、『ベーオウルフ』、『カレワラ』、『シャー・ナーメ』、『マハーバーラタ』などを挙げたうえで、これらを「マッツィーニが『バイブル』と呼ぶ類の書物群」とであると注記している。

これらは必ずしも文学的基準によって評価できるものではないが、わたしにはいかなる文学よりもはるかに重要なもの。これらは、いかなる意味でも、一個人の作品なのではなく、民衆の心そのものから生まれ出たものなのだ。（CW 22: xiii）

そう述べたうえで、モリスはそうした「バイブル」の本性を分かち持つ書物のなかに、「デンマーク、およびスコットランド・イングランド辺境地方の伝承バラッド」(The Danish and Scotch-English border Ballads)を加えている（CW 22: xix）。「民衆の心そのものから生まれ出た」という一点でホメロスと伝承バラッドが同次元でとらえられている。彼が用いた韻文形式はそうしたモリスの志向の入れ物であったと見ることができるだろう。『社会主義者のための歌』に収録された「その日は来たる」冒頭の

Come hither, lads, and hearken, for a tale there is to tell,
Of the wonderful days a-coming, when all shall be better than well.

(Morris “The Day Is Coming” st. 1)

(さあ、仲間たち、ここに來たりて聞きたまえ、話がある。すべてが見違えるほどよくなる、素晴らしき未来の話だ。)

の対句を例に挙げて、コクマノーヴァが『『シグルズ』韻律を『民衆的』な街頭バラッドに似せたもの』(a “popular,” street ballad-like version of the “Sigurd” metre) と評したのは言い得て妙であった (Kocmanová 189)。そして『希望の巡礼』でもモリスは『『シグルズ』韻律』をバラッドの世界に接続しようと模索していたことが見て取れる。

モリスが1880年代におこなった詩人としての重要な仕事は、確かに「純然たる民衆文化的な歌」の創出にむけて寄与することであったのだろう。『希望の巡礼』はその願いを込めた詩作としてモリスの文学上の仕事のなかで独特かつ重要な位置を占める作品だと評価できる。

- * 本稿は日本ヴィクトリア朝文化研究学会第15回大会(2015年11月21日、於同志社大学今出川キャンパス)での特別講演の原稿に大幅な加筆修正を施したものである。

注

- 1 ちなみに、モリスの文学作品の普及版が没後も1920年ぐらいいまではいくつかの版で流通していた。ラインナップがもっとも豊富だったのはロングマンズ・グリーン社であり、『希望の巡礼』も“Chants for Socialists”他の社会主義的な詩と併せて1915年に2シリングのポケット版で出ていて、比較的よくよく読まれていたことが伺える。上述のようにモリス生前には単行本にまとめられなかったのだが、1915年に著作集最終巻が出たことで、普及版の要請が出て刊行に至った。
- 2 Henderson 291-292を参照。
- 3 ただしフォーマンは連載分を無修正のまままとめて1886年に私家版で刊行している。Forman 125を参照。
- 4 この詩も6詩脚2行連句であることに注意したい。『社会主義者のための歌』に収録された詩のなかでは他に「すべて大義のため」もおなじ詩型で書かれている。
- 5 ホメロスの叙事詩で(またウェルギリウスの『アエネイス』など他の古典叙事詩で)用いられているヘクサメトロンはdactylic hexameter(長短短格6詩脚)

で、長短短格 (dactyl) を基本に長長格 (spondee) を併用したりズムで構成される (最後の第6詩脚のみ長長格か長短格)。通常押韻はしない。古典叙事詩の韻律が音の長短の組み合わせでできているのに対して英詩の韻律は強弱アクセントのパターンに基づくという根本的な相違があるが、英詩のもつ制約のなかでモリスはホメロスのヘクサメトロンを極力「再現」しようとしていたことをここでマッケイルは指摘している。

- 6 6詩脚2行連句 (hexametric couplet) をモリスが初めて用いたのは1876年刊行の『ヴォルスング族のシグルズ』であり、そこから『シグルズ』韻律 (the “Sigurd” meter) という名称も使われているのだが、6詩脚の最初の使用例は1871年のアイスランド旅行の経験を回想した「アイスランドを初めて見て」 (Iceland First Seen) だったと思われる。6連からなるこの詩の初出は1891年刊行の『折ふしの詩』においてだが、この詩の執筆時期は不詳。この詩では1連が7行からなり、ababaccと脚韻を踏む。

「『シグルズ』韻律」について、コクマノーヴァの説明に従ってさらに補足しておくと、これは前述のように弱弱強 (anapaest) のほかに弱強 (iamb)、また強弱弱 (dactyl) なども混在した詩脚からなり、リズムに変化をもたらすための主要な技法として、1行の前半と後半とで (詩脚の最後の音節に強勢を置く) 上昇韻律 (rising rhythm) と (詩脚の第1音節に連続して強勢を置く) 下降韻律 (falling rhythm) を交互に繰り返すやり方が時折用いられる。中間休止点 (caesura) の直前で強勢のない音節過多の詩脚もよく使われる (Kocmanová 137)。グリアソンとスミスは英詩のなかではユニークなこの「足を踏みならして歩くような韻律」 (a trampling measure) を「モリス自身の考案」であるとしたうえで、「これはわれわれの北方の言語 [英語] が可能なかぎり、ホメロスの長短短格6詩脚 (dactylic hexameter) の代用として最善の詩型であるのかもしれない」と述べている (Grierson and Smith 424)。

- 7 ワイルドの書評はさらにこうつづく。「なにしろ [モリス] 氏はチョーサー以来のわれわれの唯一の本物の語り部だからだ。氏が社会主義者だとしても、サガを語れる人物でもある。そして神々や人々の不思議な伝説を、騎士道とロマンスの驚嘆すべき物語をわれわれに語って決して倦むことがなかった時代が氏にはあった。装飾的・叙事的韻文の名人なので、事物の目に見える相におけるギリシア人の喜びのすべてを、繊細で喜ばしい細部へのギリシア人の感覚のすべてを、美しい肌理と霊妙な素材、そして想像力に富む意匠へのギリシア人の喜びのすべてを氏は備えている。さまざまな技法における労働者、職人たち——白い象牙に彩色する絵師や、紫糸や金糸を用いる刺繍師から、織機に向かう職工、染槽に布を浸す染職人、楯や兜をてがける彫金師、木彫・石彫の職人に至る、あらゆる職人たちへのホメロスの称賛について、氏ほど強い共感の念を抱いている人はほかにいない。

- そしてこのすべてに加わるのが、高次のロマンスの真の気質、過去をわれわれにとって現在とおなじようにリアルにする力、情熱を見分ける霊妙な本能、生を描きだすすばやい衝動、これである」(Wilde 73)。
- 8 メイ・モリスによれば、『オデュッセイア』を訳し終えてからモリスは引きつづき『イリアス』を訳す計画ももっていたようだが、200行ほどの粗訳がノートブックに残っているだけで、それ以上は進められなかった(CW 13: xiv)。
- 9 おなじ詩型をモリスは1888年刊行の『ウルフィング族の家物語』(*A Tale of the House of the Wolfings*)でも援用している。これは後期散文ロマンスのひとつに数えられているが、本文中で主要人物のウッド＝サンヤシオドルフらの台詞で韻文が併用されている。さらに古英語の叙事詩『ベオウルフ』(*Beowulf*)の英語韻文訳(1895年)で用いているのもおなじ詩型であった。

引用文献

- Boos, Florence S. "Narrative Design in *The Pilgrims of Hope*." Florence S. Boos and Carole G. Silver, ed. *Socialism and the Literary Artistry of William Morris*. Columbia, Mis.: U of Missouri P, 1990. 147-66.
- , ed. *William Morris's Socialist Diary*. London: Journeyman, 1982.
- Burne-Jones, Georgiana. *Memorials of Edward Burne-Jones*. 2 vols. London: Macmillan, 1904.
- Forman, H. Buxton. *The Books of William Morris*. London: F. Hollings, 1897.
- Grierson, Herbert, and J. C. Smith. *A Critical History of English Poetry*. 2nd ed. London: Chatto & Windus, 1947.
- Helsing, Elizabeth. "Telling Time: Song's Rhythms in Morris's Late Work." Michelle Weinroth and Paul Leduc Browne, ed. *To Build a Shadowy Isle of Bliss: William Morris's Radicalism and the Embodiment of Dreams*. Montreal: McGill-Queen's UP, 2015. 106-23, 309-13.
- Henderson, Philip. *William Morris: His Life, Work and Friends*. London: Thames and Hudson, 1967. [フィリップ・ヘンダースン『ウィリアム・モリス伝』川端康雄ほか訳、晶文社、1990年]
- Kelvin, Norman, ed. *The Collected Letters of William Morris*. 4 vols. Princeton, NJ: Princeton UP, 1984-96.
- Kocmanová, Jessie. *The Poetic Maturing of William Morris: From The Earthly Paradise to The Pilgrims of Hope*. Praha: Státní Pedagogické Nakladatelství, 1964.
- LeMire, Eugene D., ed. *The Unpublished Lectures of William Morris*. Detroit: Wayne State UP, 1969.

- Lindsay, Jack. *William Morris: His Life and Work*. New York: Taplinger, 1979.
- MacCarthy, Fiona. *William Morris: A Life for Our Time*. London: Faber, 1994.
- Mackail, J. W. *The Life of William Morris*. 2 vols. London: Longmans, 1898.
- Morris, May. *William Morris: Artist Writer Socialist*. 2 vols. Oxford: Basil Blackwell, 1936.
- Morris, William. *Chants for Socialists*. London: Socialist League, 1885.
- . *The Collected Works of William Morris*. 24 vols. Ed. May Morris. London: Longmans, 1910-15. [CW]
- . *The Pilgrims of Hope and Chants for Socialists*. London: Longmans, 1915.
- . *Poems by the Way*. London: Reeves and Turner, 1891.
- , trans. *The Odyssey of Homer*. 2 vols. London: Reeves and Turner, 1887.
- Salmon, Nicholas. "The Serialisation of *The Pilgrims of Hope*." *The Journal of the William Morris Society* 12.2 (Spring 1997): 14-25.
- Sparling, H. H. *The Kelmscott Press and William Morris, Master Craftsman*. London: Macmillan, 1924.
- Thompson, E. P. *William Morris: Romantic to Revolutionary*. 2nd ed. New York: Merlin, 1977.
- Wilde, Oscar. "Mr. Morris's Odyssey." *The Artist as Critic: Critical Writings of Oscar Wilde*. Ed. Richard Ellmann. Chicago: U of Chicago P, 1982. 73-76.
- ホメロス『オデュッセイア』上下、松平千秋訳、岩波書店、1994年。

——日本女子大学教授・本学会会長

Summary

The Rhythm of *The Pilgrims of Hope*: William Morris in the 1880s

Yasuo Kawabata

The Pilgrims of Hope (1885-86), an unfinished set of poems by William Morris (1834-96), narrates the story of a young British socialist and his wife, who participate in the Paris Commune of 1871 and, with other Communards, suffer a defeat at the hands of French government troops. It was serialised in *The Commonweal*, the official organ of the Socialist League, of which he was one of the founding members. Being both his first major socialist work, followed by *A Dream of John Ball* (1886-87) and *News from Nowhere* (1890), and his last longer narrative in verse after *Sigurd the Volsung* (1876), it has never been popular among the reading public and, with some exceptions, rarely seriously argued by critics. I maintain, however, that the work is of vital importance in that it marks a distinct stage in Morris's career as a poet, when he sought to make socialist epical and lyrical poems with a flavour of popular ballads.

In evaluating *The Pilgrims of Hope*, I have referred to a series of poems Morris wrote from 1878 onwards to be sung or recited at the political meetings and demonstrations, as well as to his translation of the *Odyssey* (1887). Apparently these two genres—the socialist poetry and the Homeric epic—seem mutually incompatible, but close examination reveals that both bear significant relevance to each other. Quite a few poems of the former, such as “The Day Is Coming” and “All for the Cause” included in *Chants for Socialists* (1886), are written with the same “Sigurd” metre—heroic hexameter couplets—used for his rendition of the *Odyssey*. It is also the metre used in all but the first two

sections (sections 3 to 13) of *The Pilgrims of Hope*. The socialist epic, with lines of six beats in rising rhythm, could be seen as Morris's endeavour in the 1880s to compose poetry linked to the kind of books which, as he wrote in 1886, "are in no sense the work of individuals, but have grown up from the very hearts of the people."

論文

J. S. ミルのイエスと J. H. ニューマンの神 —— ヴィクトリア時代知識人にとっての信仰とは ——¹

有江 大介

I はじめに：科学と信仰の間

ヴィクトリア期の時代精神の基調は科学であり (Dennis & Skilton 1987: 8-10)、それに呼応して「ヴィクトリア時代の大部分に渡って、ミルにおいて最高点に達した功利主義の伝統が中枢の地位を占め続けた」(Chesterton 1913: 38/35 頁)といわれる。しかし同時に、この時期は私たちが想像する以上に宗教的な時代でもあった。ニューマン (J. H. Newman: 1801-1890) ライオンランド国教会の高級聖職者達によるオクスフォード運動 (1833-1845) は国教会に対する信仰復興運動であり、反合理主義としてのロマン主義とともに知識階級に多大な影響を与えた。²

特に、ニューマンのローマ・カトリックへの改宗は、荻野によれば「ヴィクトリア朝のイギリスの思想文化を通観するためには、宗教界ばかりでなくイギリス全土を大激震の渦に巻き込み、計り知れないほどの精神的影響を及ぼした、この天才思想家を無視して通り抜けることは、ほとんど不可能です」(荻野 2005: 135) と言えるほどの“大事件”であった。

本章では、この荻野の評を導きの糸として、当時の知識人達が“科学の時代”であるが故に多大な関心を払った教会の役割や信仰と神の存在の問題を、一見すると相対峙しているかに見えるミル (J. S. Mill: 1806-1873) とニューマンというヴィクトリア時代を代表する2人の知識人の目から探ってみようというものである。

知性史から見ると、ミルやニューマンの時代は、啓示や奇蹟の代わりに

自然科学の新しい知見に基礎をおく自然神学的なキリスト教擁護論が普及したが、³『種の起源』(1859)の登場によってそれも決定的な打撃を受けることになった。そうした知的環境の中でヴィクトリア時代の知識人は、自らの信仰や宗教的立場について何らかの見解を表明することを求められていた。そして、その際の中心主題は、政教分離や教会の必要性という世俗的な問題とともに、なぜ信仰の対象としての神が存在すると言えるのか、それが言えるとしてどのような論理によってなのかという神学的な問題でもあった。では、古い歴史を持つ後者の問題がなぜ改めて採り上げられることになったのか。その背景はもちろん、科学上の新発見が蓄積しその知識が普及していくのに呼応して、知識階級ばかりでなく信仰への「大衆的懷疑」[secular doubts] (Secord 2000: 253) が浸透するという時代状況である。

この科学と信仰の対抗軸は、思想史的には“功利主義 vs. ロマン主義”、方法論的には“経験主義 vs. 直覚主義”[empiricism vs. intuitionism] となって現れ、これらへのスタンスに応じて宗教論的には“無神論－懷疑論－不可知論－有神論”の物差しのどこかに各家は位置づけられることになる。

以上を前提に、当時、科学の側の代表であり「合理主義の聖者」と目された J. S. ミルが、どのようにオクスフォード運動という宗教界の“大事件”を見ていたのかを紹介する所から始めよう。

II ミルから見たオクスフォード運動とミルのイエス像

1 ミルのオクスフォード運動批判

不思議なことに、ニューマンとミルは同時代、同世代の代表的知識人であるにもかかわらず、また、古典的リベラル・アーツを大学教育から排除しようとしているとして大学聖職者たちが功利主義者を敵視していたにもかかわらず、ニューマンからミルへの直接的言及はない。⁴ また、ミルによるニューマンへの言及は、オクスフォード運動全般に言及したギュスターヴ・デシュタル宛手紙(1839年12月27日付: CW XIII: 415-416)と「ピュージー主義」[Puseyism]と題する『モーニング・クロニクル』への2度にわ

たる長文の寄稿(1842年1月1日、13日号: CW XXIV: 811-822)、および、ニューマンの『アポロギア』の書評を書いた J. E. スティーヴン宛の短い手紙(1865年6月18日付: CW XXXII: 154)の数回である。ニューマンは其中で名前が何回か記されているだけである。

とはいえ、1840年前後にこれらに示されたオクスフォード運動全体へのミルの論評は、さすがに同時代人としてその運動の特質を極めて正確に捉えている。

デシュタル宛手紙では、まず、「オクスフォード派は、教皇抜きの新カトリック派である」と喝破した後、①教会の霊的な力は、イエスからの使徒伝承[apostolic succession]に権威を持つ司教によって叙階された聖職者の身体に宿る。②教皇中心主義を打ち出し、プロテスタントとの分離を確定し以後300年のカトリック教会の方向を定めたトリエント公会議(1545-1563)以降のカトリック教会が、本来のイングランド国教会の起源であったはずである。③キリスト教の源泉は『聖書』の記述のみにとどまらず歴史にも存すると、彼らの主たる主張をまとめる。

次により具体的には、①「超プロテスタンティズム」と呼ばれる福音主義に敵意を持っている点を彼らの「最大の特徴」として挙げ、さらに、②信仰の敬虔な感情を、個人の心理的体験としての甚だしい興奮状態[a state of strong excitement; 斜字強調はミル]へと変質させるとして特にメソディズムを批判する。その反面、狂信への傾向を批判する一方で、「19世紀的な議論をもって18世紀に対抗する」彼らは、③「死者のための祈り」を復活させたり諸聖人の日を固守したり聖母崇拜を含むラテン語の賛美歌書を出版したりする事を紹介する。以上を「それ[オクスフォード運動]は、メソディズム、信仰への懐疑、そして合理主義に対するアングリカニズムからの、現在そしてこれまでで最良の反抗である」とまとめ、最後にピュージーとニューマンを二人の指導者として挙げている(CX XIII: 415-416)。

寄稿文「ピュージー主義[1][2]」では、宗教論ではなく極めて現実的、政策的な視点から、政治制度や日々の経済生活などへの彼らの関心の薄さを指摘する(CX XXII: 813)。そして、教会も人々に義務観を教化する一つの世俗的な教育機関と捉えるミルの機能的な視点('Corporation and Church Property'(1833); CW IV: 193-222; CW XXII: 820)が強調される。す

なわち、教会が本来の役割を果たしていない場合には国民から教会に信託された財産が聖職者から回収され得るという立場から、オクスフォード運動の発端となったといわれる教会収入法反対運動の指導者たちに、国教会のあり方の再考を迫っている。ピュージー主義[Puseyism]、ニューマン派[Newmanites]は自らの教会理念から「[教会への]贈与財産[endowments]は我々の権利」であり「贈与財産は国家に由来するものではない」と主張するが、「彼らの宗教的政治的信条は私と異なる」のであって「贈与財産は国家から引き出されていると私は主張する」とミルは言うのである(CW XXII: 817-822)。⁵

では、これらのオクスフォード運動への、ミルの宗教論抜きの極めて現実的で政策的な批判はどこから生じているのであろうか。この段階でのミルは、議論の前提として、信仰と神の存在について1830年代中盤には既に次のような徹底して経験的な認識論からそれらに否定的な立場を表明していた。

「私にとって、創造者の存在は信仰や直覚の問題ではなく、証拠によって証明されるべき命題です。それはある仮説に過ぎず、その諸々の証明は…完全には確かなものにはならないのです。」(トーマス・カーライル宛1834年1月12日手紙; CW XII: 206)

このミルの懐疑論ないし不可知論的見地と上の整理を媒介に、デシュタル宛手紙からミルが取り出したオクスフォード運動のいくつかの方法論的特色を示しておこう。彼らは第一に、国教会に対しては、信仰と教会の權威の根拠を『聖書』の記述とその解釈に求めるより、使徒伝承の形で歴史的にも顕現してきた伝統的な超越性に置いている。つまり、ミルから見れば、オクスフォード派が神と信仰を考える際の出発点は、日常の経験や実験と観察に基づいて獲得された知識ではなく、それらとは区別される超越的で神秘的な認識ということになる。

逆に第二に、福音主義に対しては、それが信仰の担保を人間の慎慮や世界や歴史に対する陶冶された知性の働きを考慮せず、個人の過度に主観的

で内面的な感情的確信に全面的に置いているとオクスフォード派は批判する。彼らから見れば、それでは神への信仰が特殊な心理状態ないし感情に還元されてしまうというわけである。

ミル自身は、「私はもっと詳しい説明をするほどにはまだ彼らを十分検討していない」(CW XIII: 416)、あるいは、「私は、彼らとは個人的にも意見のすべてに渡っても最も疎遠な関係にいるだろう」(CW XXIV: 811) など述べている。こうした宗教的世界への距離によって、むしろオクスフォード運動が持っている二面性をミルは正確に捉えることに成功している。すなわち、世俗性を徹底して排除する姿勢において時代精神としての科学と功利主義に反対し、経験とその理性的認識に対しては超越性をそれらの上位に置くその一方で、ロマン主義が理性に代替して依拠した感情や直観にも懐疑的であることをミルは指摘している。この運動は、上述したヴィクトリア時代の“功利主義 vs. ロマン主義”という思想的対峙におけるいわば両面批判となっていることが示されている。そうであるなら、結果としてオクスフォード派に問われるのは、宗教的信念や知識とは何であるかであり、方法論的には基軸となっている宗教的信念の認識論における直覚主義の妥当性である。

経験論と合理主義のチャンピオンとしてのミルはもちろん、一貫してロックに淵源を持つブリテン 18 世紀啓蒙の知識論を固守している。「人間の知識の源泉に関する根本的な意見の相違」(CW X: 130/40 頁)を自覚していたミルは、コウルリッジのロマン主義に対峙する 1840 年段階では次のように述べている。

「すべて我々の知識は経験に基づく概念からなっている。…我々の五感に立ち現れる色々の事実と、類比によってそれらの事実から推測することのできるような他の事実の他には、我々は何ものも知ることはできない。先験的な知識というものは存在しない。精神の内なる光によって認識されうるいかなる真理もなく、直覚的な上に打ち立てられるいかなる真理も存在しない」(「コウルリッジ論」; CW X: 125/34 頁)

つまり、ミルにとって、直覚主義こそが自らの知的営為にとって克服すべき最大のテーマであったことが推察される。ミル自身は、その直覚主義について、「彼らはすべて、多かれ少なかれ客観的実在とその法則についての知識は、人間によって達成され人間精神の生来の推論によって得られると主張する」(CW XI: 343)と特徴付ける。そして、彼の『論理学大系』(CW VII, VIII: 1843)および後年の大著『ウィリアム・ハミルトン卿の哲学の検討』(CW IX: 1865)に通底するのは経験主義の立場からの直覚主義批判である事はよく知られている。そして実は、こうした批判に有神論者としてどのように対処するのかがニューマンの課題でもあった。

2 ミルの折衷的宗教容認論：“精神の危機”から人間イエスと人類教まで

ところが、ミルは信仰について上のような経験主義の立場を一貫させることはなかった。ミルは当時の教育環境では珍しく、幼児の頃から普通の信仰のあり方に接することがなく(CW I: 45)、福音書を教養として読んでいたがベンサム(Jeremy Bentham: 1748-1832)／グロウト(George Grote: 1794-1871)の『人類の現世の幸福に対する自然宗教の影響についての分析』(1822; 以下『自然宗教論』*Analysis*と略記)に大きく感化され、また、知識人にしては例外的に神学書をほとんど読まなかったと言われる(Bain 1969: 139; Britton 1976: 15)。しかし、コント(Auguste Comte: 1798-1857)の影響を受け人類教[the Religion of Humanity]を提唱し『宗教三論』(*Three Essays on Religion*: 1874)の草稿を書き、最終的には“希望の宗教”[the Religion of Hope]とも呼ばれる境地を吐露している。

ミルのこうした変化は、いわゆる彼の“精神の危機”の克服過程でのコウルリッジ(Samuel Taylor Coleridge: 1772-1834)の思想やワーズワース(William Wordsworth: 1770-1850)の詩との邂逅が大きな契機となっている。すなわち、ベンサムの単純な快苦計算より、詩や音楽のような人間の情操面での陶冶や洗練が人間の精神生活の中で大きな役割を果たしていることの発見である(CW I: 146, 348-349)。つまり、人間の感情の領域にある信念や信仰が、仮に経験的検証に耐えられない事象に基づくものであったとしても、社会生活に独自の意義を持つ場合があることの承認である。ミルは、社会全体にとって有益な結果をもたらしていると認定できる制度、

それがキリスト教の教会制度であっても、消極的ながらそれを認める発言をするようになるのである。

「私は、間近に迫る貴族階級や国教の没落を残念に思っているなどとは申せません。私は、立法機関の中に保守的な勢力が存在していること、コウルリッジが自分の『教会と国家』の中で概観している国立の聖職者制度や知識階級があるべきであることなどが望ましいと、確かに考えております。」
(CW XII: 75)

これはコウルリッジ主義者のスターリング (John Sterling: 1806-1844) に宛てた手紙 (1831 年 10 月 20-21 日付) での発言であり、この中でさらにミルは、想定される聖職者制度は、社会の統治と、それに必要な権利や義務の知識の啓蒙教育などに対して有益な役割を果たすであろうこと、そこにはキリスト教の信者以外も参加できることを述べている。加えて、キリスト教信仰が義務感の担保機能を持つことから、国教会制度の社会的効用を認めている (*Ibid.*: 76)。

ミルの宗教思想の集大成である『宗教三論』(1874)⁶は、執筆時期の異なる「自然」、「宗教の効用」、「有神論」の3つの論考からなっている。第一論文「自然」(1854 年 2 月)では、合理主義の立場から伝統的な自然神学的護教論批判を展開しているが、自然の無慈悲さと全能性を制限された創造者像が導かれることや、仮に護教論に立った場合の論理的に整合的なあり得る議論を提示している所が興味深い。

既に見たように、ミルは26歳の頃にはイングランド国教会やカトリックまで含めて、宗教がある程度社会的に有用である可能性について認識していた。48歳になる直前の1854年3月から4月に執筆したと言われる第二論文「宗教の効用」は、「宗教の現世での効用の探求」が主たる課題であると述べているように (CW X: 406)、その時の見地を踏襲しつつ新たな知見を加えて敷衍したものといえる。ミルはその際、ベンサム『自然宗教論』とコントの人類教を利用すると明記している (*Ibid.*)。

ミルは、既成の啓示宗教も自然宗教も、経験的に検証できない根拠に基

づいていることをもって、現世に対してまったく利益をもたらさないか、むしろ害悪をもたらすと断じた『自然宗教論』から出発している。また一方で、害悪しかもたらさないと見なされているカトリック教会のような制度ですら「人現精神の発達の特定段階では大いに有用であっただけでなく、絶対に不可欠でもあり得たのであり、…唯一の手段でもあり得たという事実」を示すサン・シモン派の歴史把握に賛同もしていた(1829年11月7日付けギュスターヴ・デシュタル宛手紙; CW XII: 41)。後者の見地については、この「宗教の効用」の最初から、「要するに、宗教はそれが知的に維持できるものではなくても道徳的には有用でありうる、ということを想定できる」(CW X: 405)と表明する。結局、上の二つの立場を同時に満たそうとすれば、ミルは啓蒙の科学に基づく合理的な分析の立場と、人間の心理や感情の役割を認める立場との妥協点を求めることになる。

その上でミルは、絶対的な道徳規準を持つかに見える「[啓示的な]宗教のみが人々に何が道徳であるかを教えることができる」(*Ibid.*: 415)という強力な意見に対抗する。経験主義の帰納的立場から啓示宗教や自然宗教を棄却しつつ、人間の自然な感情に基づく道徳的体系を構想するミルとしては、当然、規範となるべき道徳性とは何かを提示する必要があった。その際、ミルが倫理的高みを志向する個人の人格的陶冶を社会改良の出発点と見なした時、『新約聖書』の福音書に記されたイエスに、窮極の人格モデルを見いだすことになる。

「私は以下のことに同意する。『福音書』に記されているいくつかのキリストの教えは——正統信仰の基礎であるパウロ主義をはるかに凌駕するもので——ある種の道徳的善をそれ以前には決して到達し得なかったはるかな高みに押し上げたことを。もっとも、それに特徴的であるとさえ言われるもののうちの多くが、キリスト教とは無関係であると信じられるマルクス・アウレリウス『自省録』と同様であるのだが。…この便益は…人類の財産であって、今や原始の野蛮状態に戻ることで何一つ失ってはいけないものである。」(*Ibid.*: 416)

具体的には、「互いに愛せよ」、弱者と賢者が神に最初に配慮される、善きサマリア人の譬え、自分が為して欲しいと思うことを他人に施せ、など

「ナザレのイエスの確証された言葉の中にある」教えであり、「これらはすべての善き男女の知性と感情とに十二分に調和している」と、ミルは指摘する (*Ibid.*: 416-417; 下線強調は筆者、以下同じ)。見られるように、ここで示されているのは、目標たりうる完全な道徳的人間としてのイエスとその徳目であり、しかも、啓蒙の合理的知性とロマン主義的感情の双方が受容できるものという、ミルの当初の意図に即したものである。

ここでのミルの独自性は何かと言えば、あくまでも啓示や超越性を基軸にせず個人の内面的感情から出発し、しかも一定の卓越性を有する此岸的宗教の可能性を提示したことである。「宗教の個人にとっての価値は、したがって、過去においても現在においても、個人的な満足と高尚な感情の源泉であることにあって、そのことを疑う余地はない」(*Ibid.*: 419-420)とミルが言う時、その宗教なるものは、快樂主義的ではあっても卓越した個々人の心性に依拠することで現世における宗教の効用を実現しようと彼が考える、「人類教」[the Religion of Humanity]なのである (*Ibid.*: 420-422)。

「宗教の本質とは、最も崇高に卓越しすべての利己的な欲求の対象を正しく凌駕していると認知される理想的な目標に、情動と欲求を強力に熱心に向かわせることにある。この条件は、程度が傑出し、高尚な感覚をもつものとしての、また、超越的宗教の最高の現れとさえ同じように、そしてそれらが他のどのような宗教をも遙かに凌駕するものとしての、人類教によって満たされる。」(*Ibid.*: 422)

人類教は、したがって、方法的にはミルの啓蒙的理性の側面と、それへの反作用たる感情の重視の側面との双方の折衷としてある、「人間イエス」を重要な要素として構想されたある種の疑似宗教と言える。実際には社会的にまったく受容されなかったとはいえ、これをヴィクトリア期の時代精神に符合するものとミルは考えたに違いない。⁷

3 第三論文「有神論」における“希望の宗教”

「有神論」は、第二論文「宗教の効用」を書いた1854年から15年近い後の1868年から1870年頃に書かれたと言われている。重要なのは、1858年11

月に妻ハリエット・テイラーが亡くなってから10年の長い孤独の生活を送るとともに、1854年に結核を告知されてからも15年を過ごしていたという、ミルの個人的な状況である。ミルは1873年に丹毒によりアヴィニオンで客死したわけであるから、丹毒が老人に多い習慣性の強い皮膚疾患であることも考慮すれば、最晩年の肉体的に憔悴し精神的にも安まることのない相当に困難な条件の中で、「有神論」は構想され、執筆されたと考えてよからう。

一般に、啓示宗教としてのキリスト教の平信徒にとって、最も重要な教義は「魂の不死性」(靈魂の不滅)である。来世をいかに期待しようとも、自らの靈魂の不滅が伴わなければ何の意味もない。この点について20代のミルは、既に見たカーライルへの手紙の中で、神の存在は信仰でも直覚の問題でもなく「証明しなければならない……仮説にすぎない」し、「証明することは不確実だ」と書いていた(CW XII: 206)。同じ手紙の後方で、靈魂の不滅に関しても同様の立場から、「靈魂が減びると信じる理由がわかりませんし、靈魂が生き続けることを完全に確証する十分な根拠もわかりません。しかし、もし靈魂が生き続けるとしたら、この世の靈魂の状態のような、もう一つ別の状態になって靈魂が存続すると考える十分な理由がある」(Ibid.: 207)と述べていた。これは一見して、蓋然性の持つ二面性、すなわち魂が不死である(つまり来世がある)ことも不死でない(来世がない)ことも、その双方に十分な証拠がないということが議論の前提となっている、第3論文「有神論」の出発点「蓋然性」と相似的である。

「諸々の現象は、我々を支配する大きな力の“ある存在”[a Being]を示している。…また、我々はその存在が善であることの証拠を持っている。ただし、その性質は存在に備わる優勢な属性ではない。そして、我々はその存在がどこまでの力を持ち、どの程度まで善であるかを知らないけれども、もし不死性が真に我々に有益であるならば、力と善性の双方がその不死性を我々に与えるまでに達するかもしれないと、希望する余地がある。」(Ibid.: 466; 強調は原著)。

セルが収集し、紹介しているように(Sell 1997; Sell 2004: 146-153)、彼に

よる不死性への希望の表明は当時のミル賛同者、批判者の双方を驚かせ困惑させている。確かに、第二論文「宗教の効用」の末尾での、人類教が確立して「現世がより幸福になったときには、[肉体の死に伴う]靈魂の死滅より、魂が不死であることの方が負担となる考えとなろう」(CW X: 428)と述べた地点から、不死性と来世への希望という積極的、彼岸的な方向に一步踏み出している。

その一步をミルは、「想像力」[imagination]で果たそうとする。全能ではない神的存在が、自ら作った欠陥のある「機構」[machinery]に善意で時に介入[interposition]するであろう。もちろん、その介入の証拠は証明できないのでそれは「単なる可能性」[a simple possibility]に留まる。しかし、たとえば、「そうした可能性をいつも考えている人々は、人間の普通の力では獲得するのが困難な恵は…人智を越えた、人間を絶えず気にかけている知的存在によってもたらされるものであると信じて救われているのである。死後の生の可能性も同じことである。」(CW X: 482)。その死後の生命は、「人の幸福を祈っている力ある存在が、自分の持つことのできる力で与える恵み」なのだという (*Ibid.*)。当然にも、これらは事実として確証できないわけであるから、結局、「超自然的な存在の領域全体は、信仰の領域から単なる希望の領域へと移される」と宣言する (*Ibid.*)。⁸ 次にミルは、そうした実現しそうにない事柄に対して、「単に想像力の領域の中で希望に耽溺すること」の是非を問う (*Ibid.*: 483)。そして、想像力が適切に働くことによって、知性の正確さを妨げず、行為と意志の正しい方向を維持し、人生の幸福を増進し性格を向上させ、より高度の向上心をもたらすことなどを踏まえて、「安全に自分の目的を追い、人生を楽しむのに全力を尽くすことができる」ようになると結論する (*Ibid.*: 484-485)。上の問いへのミルの答えは、「こうした諸々の原理のもとで、宇宙の支配と死後の人間の運命への希望に耽ることは、希望の他に何の根拠もないことを明瞭な真実と認めるにしても、道理にかなった、哲学的にも弁明できるというのは確かである」というものである (*Ibid.*: 485)。

ミルは、人類教の窮極的道德モデルとしての“人間イエス”に、来世への“希望”とともに蓋然的な「ある存在」としての超越者とが加わったもう一

つの新たな宗教——“希望の宗教”とも名付けられる——を希望する。しかし、こうしたミルの提案、とりわけその「神」概念は、正統信仰の側にとってはもちろんのこと、⁹ 合理主義、懐疑主義の側にとっても当然にも到底受け入れがたいものであったといえよう。ヴィクトリア時代の宗教事情、思想状況からして、保守派も改良派も、ハリエット・テイラーとの死別の影響は付度できても、ミルの『宗教三論』の帰結を驚きの目で見ているのである。

III ニューマンの「神」の探求とその帰結

1 宗教的知識と科学的知識

ニューマンは、宗教の超越性に依拠した反動として特徴づけられる事が多い。¹⁰ そのため時に「科学に無関心」(松永 1996: 203)と評されるが、科学という時代精神と格闘するヴィクトリア期キリスト教の立場からして「無関心」はあり得ない。カーが「信仰と理性との関係が『オクスフォード大学説教集』(OS: 1843)の主題である」と指摘しているように(Ker 1988: 259)、1826年7月2日、20代最初の説教「哲学的性向」から、ニューマンは個人の内面における宗教的信念と外界に関する科学的知識との整合性の問題を採りあげている(*Ibid.*: 258-269)。そして、この内面的信念の視点からニューマンが独自に構成したキリスト教の教理の発展的特質が、13番目の説教「潜在的理性と顕在的理性」(1840)等を通じ、最後の説教「宗教的教理に内在する発展の理論」(1843)に結実する形で説かれている。これらの主題はそのまま、『教義発展論』(1845)、『承認の原理』(GA: 1870)、『大学の理念』(IU: 1873)などのその後の著作に引き継がれているとともに、そこにミルの「有神論」での取り組みとの共通性を見ることができる。

ニューマンは若い時代から、信仰への危機感とともに科学の発展への強い関心を持っていた。ニューマンはオクスフォードでの第1番目の説教で、「科学的知識の拡大を目の当たりにして、羨望を感じ怖れが現れることは科学的知識と啓示の間に不一致があるかもしれないということをほとんど認めることになる」(OS: 16)と正直な表明を行う。そして、社会的に出来た“信仰 vs. 科学”ないし“宗教 vs. 科学”という対峙関係において、啓示

の優位性の主張により信仰を担保するのが自らの役割と自覚していた。

彼は、「自然と恩寵、理性と啓示は同じ神的制作者から生み出されており、その作品の間に矛盾は生じ得ない」(IU: 152) という、トマスの二重真理説的前提から出発し、宗教的知識である神学と世俗的な知識である科学を分離する。ここで、自然的世界の知識をも含む上位にある超自然的知識(神学)は直覚的に認識されるとする一方で、下位の自然的世界の知識は超自然を推論[inference]するための情報となるとする(*Ibid.*)。つまり、ニューマンは同時代の単純なロマン主義者や福音主義者のように直覚主義にのみ依拠するのではない、ある種の妥協的な立場を表明しているのである。出発点を個人的な直覚に置きつつも、その直覚的な認識が自然的な世界の知識からも推断されるという二重の構成になっている。したがって、ニューマンの次の課題は、後者のプロセスを説得的に示すこととなる。そして、その際に契機的な役割を担うのがバトラー司教(Joseph Butler: 1692-1752)の示した蓋然性[probability]である。

2 蓋然性から確実性への「飛躍」の試み

バトラーの『宗教の類比』(*Analogy of Religion*, 1736)は、啓蒙期のキリスト教擁護論に最も有力な議論を提供した。すなわち、世界の創造者の存在は認めるが人格神や人間理性によって把握できない啓示を否定する理神論、理性と信仰の両立可能性を言うロックの議論などを蓋然性[probability]という概念によって一蹴した。人智を越えた神のような存在は人間の理性によっては確実なものとして認識できず、蓋然性としてのみ把握しようという主張で、理神論やロック、あるいはS. クラークなどの過度の理性主義の瑕疵を衝いたのである。¹¹

「その頃[1823年]のことであると思うが、私はバトラー司教の『宗教の類比』を読んだ。この書を研究することは、多くの人々にとっても私にとっても各自の宗教上の見解に一時期を画するものとなった。…もしこの書物から得た最大のものは何かを挙げることができるとすれば、私自身にとってはそれは以下の二点である。それらは…私の大部分の教説にとって基礎となる原理である。第一に、神による個別の様々な業の間の類比というまさにこの観念によってこそ、重要度の低い体系はより重要な体系に摂理

的[economically]、あるいは秘蹟的[sacramentally]に結びついているという結論が導かれるということ。少年時代に私が考えたかった物質的現象の非現実性という理論がその結論の究極の姿なのである。…第二に、蓋然性は人が生きるための指針であるというバトラーの教義は、少なくとも私が数年後に受けることになった教説の下で、信仰の論理的な説得力の問題に私を導いたのであった。これについての私の著述ははなはだ多い。かくして、私の教説中のこの二つの原理はバトラーに由来するものであって、後年、それらによって私は空想的[fancifulness]であると同時に懐疑主義的[scepticism]であるとも非難されることになった。」(AP: 140-141/ 26-27頁)

ニューマンの述懐が本当であるとすれば、先述した神学的知識の包括性、世俗的知識に対する優位性の主張や、直覚だけに頼らない信仰や神の存在の担保という二つの指向は、バトラーからの強い影響の結果と見てよい。¹² しかし、明らかに、自然科学の知識による目的論的な神の存在証明を目指す自然神学的立場を積極的に承認している点で、「それは神学的にはリベラルな所謂『広教主義者』に特有の考え方であった」(小田川 1999: 150)といえる。新興科学の成果と信仰との架橋に腐心するリベラリズム、これはオクスフォード運動の主敵の一つでもあったはずであるが、その神学的背景を成したバトラーの蓋然性論を、逆に、神学的知識の自然的知識からの、信仰の世俗からの断絶に対応させた議論のコンテキストにニューマンは移植しているともいえる。¹³ 絶対者の存在と信仰の擁護を目指すときに、こうした断絶は論理的には一方で直覚への依拠に回帰するか、他方で懐疑論、不可知論、ないし無神論に帰着するかである。ニューマンが上の引用の末尾で、両方の陣営から非難されたとの表明をするのも当然のことである。

にもかかわらず、ニューマンはこれまで見たように、幾分かの直覚と幾分かの理性的推論を同時に満たそうという敢えて難しい道を選んだ。ニューマンは知識の二区分を前提に次のように自らの出発点を述べている。

「私は神学の原理と心理学の原理が同一だとは考えていない。あるいは、人の働きによってできたものから神の業を論ずることも考えていない。これ

はベイリーがやったことであり、ヒュームが批判したことでもある。私はデザイン論という手法を使って神の存在と属性を証明することに我が身を置くつもりはない。私は超越者について何ものをも証明しようとしているわけではなく、逆に、私はその存在を前提している [assuming]。』(IU: 49-50)

「では、神の存在から出発することにしよう(このことは、既に言ったように、私にとっては自らの存在が確実であるのと同様に確実なのである。もっとも、その確実性[certainty]の根拠を論理的に表現しようとすると、自分の気分や言葉の上で満足できるまでにそれを行うことは難しいと自覚している)」(AP: 322/ 下107頁)

この「存在を前提している」という表明は、前段と併せて、超自然的な存在の証明、従って神の存在に相即する道徳的な価値の説明は自然主義的にはおこなわない、ないし不可能であると含意することになる。そして、「確実」な「前提」と断言しうる理由については、ニューマンは現実社会に存在している一定の道徳規則の根拠となっている良心の確からしさに帰着させている。

「よくあるように、もし、良心の声 [the voice of conscience] に背いて責任を感じ、恥じ、怖れを抱くならば、これは当然にも次のことを意味している。我々がそれに対して責任を感じ、その前で恥じ、それが我々に要求することを怖れるような、そうした一者が存在することを。…もし、こうした感情の生ずる原因がこの目に見える世界に属さないのであれば、[良心を聞く] 人の知覚が向けられる対象は超自然的なものであり、神的なものであるに違いない。」(GA: 101)¹⁴

見られるように、ニューマンの説明のこうした枠組みは、予め存在を確信しているものの存在の理由を後から示す、あるいは、自然的なものでは超自然的ないし道徳的なものは説明できないと仮定した上で道徳性の根拠を超自然的なものに帰着させるという、循環論法ないし論点先取に陥っていると言わざるを得ない。おそらくニューマンはそれを承知で、宗教的信念を論理的に承認、正当化することがいかに可能であるかをできる限り示そうとしたのであろう。

既に1841年に『タイムズ』編集者に宛てた「タムワース読書室」第6書簡(DA: 292-306)では、宗教的承認までの階梯のおおよその枠組みを示している。まず、科学がそこから宗教的真実を推測[infer]することになるような前提を提供する。しかし、科学は現象としての事実を我々の前に提示するだけで、宗教的真実の推測には至らない。そのかわり、「我々が諸事実を獲得し、それらに意味を与え、それらから我々のための結論を引き出す。始めに知識、次に見解、そして推論、最後に信念／信仰である。…普通、確信にはそうした推論を通じてではなく、直接的な印象、事物事柄の諸々の証拠、歴史と記述によって惹起された想像力を通じてたどり着くのである」(DA: 293; Short 2011: 389)という。想像力によって“希望の宗教”にたどり着くミルを想起させないだろうか。

チャドウィックはこのニューマンの課題を、「信仰はその対象について確かであるが、証拠の提供する確かさは決して蓋然性以上のものではない。どのようにして宗教的精神はこの蓋然性から確実性への飛躍[leap] (もしそれが飛躍であるなら) をするのであろうか」とまとめている(Chadwick 1983: 34/60 頁)。『アポロギア』において、「私の論証の概略は以下のようなものである。すなわち、我々が自分のものにできた絶対的な確信は、自然神学上の諸々の真理についてであれ、ある啓示の事実についてにせよ一点に集まり収束した蓋然性の集積の結果なのであった。…確信は精神の一習性であり確実性は命題の一性質であって、論理的な確実性に達しない蓋然性も十分に精神的確信となるかもしれない。」(AP: 150/35)とニューマンは述べていた。¹⁵ ここで留意しておくべきは、宗教的確信を最終的に担保するのは何らかの一般的な事象ではなく、自分自身の存在の確からしさの確認や自らの良心の事実性の自覚などの個人における直覚的認識であって、しかもそれを、あくまでも個人の内面における意志的な作用であるとニューマンが見なしている点である。¹⁶

川中(2005: 208)が紹介するように、既に『オクスフォード大学説教集』第13番説教「潜在的理性と顕在的理性」(1840)の中でティロットソンから「信仰とは…神によって啓示されたあるものに対する心の承認であり、そうである以上はすべての承認[assent]は証拠に基礎づけられねばならな

い。」を肯定的に引用している。しかし、これには「何らかの理性的推論による承認を経ない場合、だれも何事をも信じることはできない。というのは、理性的判断抜き的事物についての確信は信仰ではない……」(OS: 260) という引用が続いており、1853年段階の「承認とは命題の真理性の受容であり、承認は推論に続くもので意志の働きである」(川中 2005: 209) とまとめられるニューマン本来の個人の意志性に依拠した「飛躍」を導く承認とは異なっている。もっとも、人間理性の役割を福音派のように極小化することを拒むニューマンは、この第13講のタイトルにあるように、形式的・分析的・意識的な理性としての「顕在的理性」[explicit reason]とは別に、内容的・総合的・無意識的で広く深い理性としての「潜在的理性」[implicit reason]をもって、宗教的な確信への動因と考えるのではある。ニューマンの折衷的な立場がよく現れている。

3 『承認の原理』における「推断的感觉」

そして、その方向での飛躍に至る階梯を跡付けようとしたのが、最も重要な作品と言われる『承認の原理』(1870)である。以下、紙幅の関係でこの書物のエッセンスを記しておく。これまで見たように、ニューマンにとって、蓋然性を基軸に据えることは、まず、宗教的知識そのものは、理性によってはそこに至る懸隔を越えられない超自然的なものであることを含意した。同時にそれに加えて、蓋然性の壁を突破して超越的な信仰に到達するためには、形式的な理性だけではない内面的な個人の意志作用が要請されるということを導くものでもあった。その作用の過程を示すものが『承認の原理』である。

この書物は2部10章構成となっており、第1部「承認と了解」[Assent and Apprehension]と第2部「承認と推論」[Assent and Inference]を通じ、了解から推論を経て信念の承認に至る経緯が巨細に説明されている。これはおおよそ、かつてタムワース読書室の書簡に示された“知識[knowledge] → 見解[view] → 推論[reasoning] → 信念[belief]”という、信仰にたどり着くある種の階梯的構成に対応するものである(DA: 293)。そして、ここで確信に向かう「承認」とは、最終的には「前提の無条件の絶対的受容」[the absolute acceptance of a proposition without any condition] (GA: 32)となる。

こうしたニューマンの『承認の原理』の議論はこれまでの検討から推察されるように、決して読者に理解しやすいものではない。とりわけ非キリスト教世界の信仰を持たない読者にとって、極めて難解で錯綜して飛躍の多い内容と映る。その理由は、直覚的に得られた良心がそのまま無媒介に直覚的な神の存在の確信となってしまうとニューマンが捉える福音派の場合とは異なり、良心の存在の確信を前提にしつつも、あえて推論や了解といった人間の理性的な意志作用を媒介することを通じて、再び良心の確かな実在の確信に間接的・迂回的に回帰させ、しかもそれを神の実在に等値させようという、回帰と飛躍の二重の構成を採る所から生じている。こうした二重の迂回的説明を象徴的に示しているのが、第5章「宗教における直感的了解と同意」である。ここでは、結論先取りの、個人的意志作用の出発点の良心と、到達点である信仰と神の存在の円環的關係について次のように述べる。

「私が直接に目ざしているものは、どのようにして我々が神の姿を獲得し神が存在するという前提を承認するのか、ということである。そして次に、これを遂行するために、私はある第一原理から出発しなければならない。それは、証明を試みる必要のない前提であり、また、それら二つの探求の基礎として利用するもの、すなわち、我々が生来良心を持っているということである。」(GA: 97-98)

見られるように、「[神の存在は]私にとっては自らの存在が確実であるのと同様に確実なのである」(AP: 322/107頁)という確信をもたらすものが、神の声としての良心の存在への確信であったとする『アポロギア』での表明が反芻されている。すなわち、この良心を前提しつつ、推論的推論と名付けるアプリアリな人間の理性的力能を介して信仰の確信に至る過程を経て、神の存在に回帰するという構成となっている。

『承認の原理』の第二部ではこの点について、推論からどのように宗教的確信の承認が、つまり飛躍が導かれるかという形でニューマン独自の説明が示されている。

まず、先の概念的了解に対応する論理的必然性に基づく分析的命題の承

認とは区別された問題として、宗教的確信の承認を捉えている点を基底とする。次に、彼の言う先行的蓋然性にあたる「承認以前の先行する承認」[the antecedents of assent before assenting] (GA: 157-158) を置き、その承認自体がさらに承認を担保するという回帰的、円環的な説明をここでも行う。ニューマンはこの過程全体を推論[inference]とみなす。

「推論という行為は、承認以前に先行的に承認することであるとともに承認後に普通に付随する行為でもある。たとえば、私は我々がインドと呼ぶ国が信頼できる証拠に基づき存在していることを確かであると考えて。そして次に、その同じ根拠に基づき私はそのことを引き続き確信することができる。」(GA: 157-158)

承認への道程を、個人の意志的な行為の過程として考えるニューマンの特色がここに現れている。すなわち、諸々の前提を承認にいたる条件として推論する際に、当初は偏見と区別が付き難い単純な承認の内容が、時間の経過の中で反省と経験を繰り返すことで確認され是正を加えられた概念や形象として承認されると、ニューマンは考える (GA: 161-162)。これは明瞭で熟慮された「承認への承認」[an assent to an assent]であり、いわば承認が繰り返されることで確信[conviction]に至るわけである (GA: 162)。しかも、この信念の確実性[certitude]は同時に現実の個人の経験に担保された確実性でもあり、その状態には充足感、自己満足、知的確信、成功感、達成感、目的意識などの個々人に固有の特別な感情を伴うと考えられた (GA: 168)。

その上で、第8章「推論」の冒頭でニューマンは、「推論とは前提の条件付き受容であり、承認とは無条件の受容である。承認の目標は真理であり、推論の目標は準真理[truth-like]すなわち本当らしいことである」とし、その「条件付」がどのように「無条件」へと導かれるのかという問題を「私は引き受けてきた」と改めて述べる (GA: 209)。出発点の知識の2区分の対応した第一節「形式的推論」と第二節直覚的確信を導く「非形式的推論」とを経て、ニューマンは第9章で「推断の感覚」[The Illative Sense]を導入する。

「具体的な事実についての推論が有効であるか否かの唯一で最終的な判断は、先天的推理能力という個人的行為に委ねられており、その極致ないし力能を私は推斷的感覺と呼んだ」(GA: 271)

これは、これまで見たように、様々に把握される蓋然性の考慮を通じて1つの確実性を確信する人間生来の「先天的推理能力という個人的行為」[the personal action of the ratiocinative faculty] (GA: 271) ないし「推理能力」[the reasoning faculty] (GA: 283) を意味している。ここには二つの特色がある。第一に、ニューマンは章の最初から、「私にとって[信念は]確実であると感じられることで十分である」(GA: 270)、あるいは「確実性とはある心の状態である」と(GA: 271)、徹底して個人性に定位している点である。バトラーの蓋然性の議論が懷疑や便宜や義務といった一般的・哲学的問題を含むのに対して、ニューマンは徹底して議論を真理に向かっての確信を希求する個人の意志作用に限定する。したがって、感覺という言葉の用法を、感覺一般ではなく、「優れた感覺」、「共通感覺」、「美的感覺」という個人に固有の意識に対応した使い方であると主張する(*Ibid.*)。ニューマンにとって、信仰ないし宗教とは抽象や形式ではなく、あくまでも人間心理における具体的な事実なのである。しかし、第二に、感覺ではあっても「推斷的感覺」は推論する理性的な能力でもある。つまり、直覺的であると同時に理性的・反省的であるというニューマンの最初の区分がここでも貫徹していることがわかる。

最終の第10章「宗教的事柄についての推論と承認」では、再び、「宗教についての我々の内面の教師は、…我々の良心である。良心は個人にとっての導き手であり、私はそれを利用している。なぜなら私は私自身を利用せねばならないからである。」(GA: 304) と良心を媒介に出発点に回帰して終わる。

では、ニューマンのこうした自らに課した困難な試みが成功しているのだろうか。「ニューマンは神への承認を、…非概念的に捉え、私の良心と私、そして第一原理において根拠づけようとしているのである」という川中のまとめはその限りでニューマンの企図をよく捉えている(2005: 215)。

しかし、知識論として考察した場合に、既に見たように、論理的には論点先取の循環論であり (Hick 1963: 28/38 頁)、チャドウィックの言う蓋然性から信仰の承認への「飛躍」はなされていない。ニューマンを懐疑論者に分類する評価が現れるのも当然である (Griffin 2008: 980; Williams 1992)。つまり、自然的知識と宗教的知識の間の懸隔は残ったままなのである。しかし、「自己認識はすべての真の宗教的知識の根源にある」(Chadwick 1983: 28/50 頁) と述べ、「信仰は、具体的な事物に結びついており抽象的なものではない。…個人的で人格的なものに密接に結びついている」(GA: 87) と考えるニューマンにとって、最後の担保は信仰に向かう個人の意志に置かれる以外にない。

IV おわりに：ヴィクトリア時代の知的環境におけるミルとニューマン

ニューマンの若い同時代人の一人であるレズリー・スティーヴンは、ミルとニューマンはその知的特質と方法において「相似的である」と評している (Stephen 1877: 685)。ミルについては、その経験論的認識論の立場と啓示宗教との懸隔や論理の折衷性に関して前者の側面にミルの特質を見ているが、セル (Sell 2004) やレイダー (Raeder 2002) らの近年のミル宗教論の評価ではその宗教性に重点を置いた解釈が示されている。

一方、ニューマンの試みについてスティーヴンは「不可知論者の弁明」(1876) で、「自然の人間は決して神的な本質を知ることはできない」という見地から、「彼の良心は神は存在すると言うかもしれないが、彼の目が告げるのは神は存在しないということであろう。…ニューマンの解釈は彼のような直観を持ってなかった人——それが大部分なのだが——には何らの力も持たないのである」(Stephen 1893: 12/65 頁) と認定する。併せて、「ニューマンの主張は理性に導かれた人は不可知論者になるべきだということ…を論証する結果となっている」(Ibid./同上) と極めて的確に、ニューマンの議論の矛盾的な二面性を捉えている。¹⁷ キリスト教の本質としての神的存在の超越性 [transcendence] (Storr 1913: 148) を承認した上で、ニューマンのようなアプローチを採る限り、それは当然の帰結である。ヴィクトリア時代国教会の正統信仰の立場からも、スティーヴンのような

受け止め方となるのは想像に難くない。

では、なぜ、ミルやニューマンたちは神や信仰について一面で折衷的、他面で敢えて困難な道程を辿ることにしたのであるのか。また、そうした試みは現代から見てどのような意味があるのだろうか。

ヴィクトリア時代は、科学の時代、世俗化の時代、大衆の時代の幕開けであり、それは進化論の登場とも相俟って信仰にとって本質的な危機の時代であった。ミルは信仰の外側からあえて“希望”し、ニューマンは内側からその危機に対して、単なる直覚主義では信仰を担保できないことを自覚し、科学的認識の意義を承認しつつその上で信仰の確実性を求めた。というより、求めざるを得なかったと言えよう。その際、ニューマンが念頭に置いていたのは一般人ではなく「知的エリート」であって (Wilson 1957: 226/136 頁)、事実、始めに示したように特に『アポロギア』(1864)、そして『承認の原理』(1870) は賛否の議論を伴って彼ら、特に国教会や信仰を擁護したい知識人層に大きな影響を与えた。実はこの経緯は、ミルが経験論の立場から直覚主義を批判しておきながら、遺作『宗教三論』(1874) の「有神論」で霊魂不滅を希求する“希望の宗教”を披瀝し、反宗教の立場の合理主義的知識人層に衝撃を与えたことと表裏一体を成している。まさしくそこには、理念としての宗教、制度としての教会が力を失い、徹底した世俗的社会に向かう過渡期の最終盤にあったヴィクトリア時代の宗教的時代意識が反映している。¹⁸ 我々が当時の思想や文化を考える際に忘れてはならない知性史の一つの側面である。しかし、歴史的には、産業化、都市化、世俗化が急速に進展したヴィクトリア時代後期には、「時代精神は1880年代には宗教から社会問題に移ってしまった」(Lipkes 1999: 43) のである。

最後に、折衷で悩めるミルではなく、確信するニューマンの現代的意義について簡単に言及しておこう。宗教者から見た場合の多様な評価は川中(2005)第4節、西原(2005)に詳しい。ここでは、「結局の所、人間は理性的動物ではない。人間は見、感じ、考え、行動する動物である」(GA: 90)、「信仰は、…個人的で人格的なものに密接に結びついている」(GA: 87) という、ニューマンの極めて現代的な人間観と、宗教論における自然

主義と個人主義を指摘しておきたい。それらを象徴するのは、‘Sentio ergo sum.’ (Dulles 2002: 49, 61) というニューマンの言葉である。個人の自然で心理的な感覚から出発するニューマンに対しては、既に、「信仰の心理学」(Ferreira 1986: 231) との特徴づけや、「ニューマンの場合、信仰は論理というよりむしろ心理学に依っている」(Alexander 1965: 138) との評がある。これは、感覚的認知に着目する先駆者として現象学の系譜の中にニューマンを位置づけ直す近年の傾向に繋がるとともに (Ekeh 2011)、信仰の個人性の重視をニューマンにおける福音主義的な側面として改めて見出す解釈さえ生み出している (Ramsay 2012)。ニューマン評価をめぐる以上のような状況は、現代社会で教会や宗教が単に日常社会の文化現象の一つと見なされる一方で、途上国先進国を問わず過激で狂信的で不寛容な原理主義が跋扈していることに対応し、宗教とは何か、あるいはキリスト教の位置や役割の変容が広く再考されていることの反映である。ニューマンやミルがそうした考察の先駆者と言えるならば、ヴィクトリア時代は宗教問題についても現代の先駆けなのである。

注

- 1 本論考は紙幅の制約と読者の便宜を考慮し、有江 (2008)、同 (2013) の主要部分にその後の研究の進展を若干付加したものである。本課題の詳細な検討についてはこの2点を参照されたい。なお、『ヴィクトリア朝文化研究』13号 (2015年11月) に短い紹介 (川名雄一郎氏のミル研究サーヴェイ) と光永雅明氏による後者の書評がある。
- 2 一般大衆レベルでの福音主義の拡張についてはここでは触れない。
- 3 こうして醸成された文化全体としての“科学 vs. 信仰”という対抗軸の下、「科学を信仰への通り道として歓迎」(Secord 2000: 259) する立場からは『ブリッヂウォーター論集』(1833-1836) や『創造の痕跡』(1844) などの出版がなされ、中流階級以上の人々に広範に受け入れられた。
- 4 デサン (Dessain 1980: 68) を参照のこと。また、『ニューマンと同時代人』と題する500ページを越えるショートの大著 (Short 2011) には、ミルの名はペンサムや功利主義も同様に索引も含めて一切登場しない。
- 5 ミルのイングランド国教会廃止論については下条 (2013: 191-209) 6章「イギリス国教会廃止論」での政治論からの総括的検討を参照されたい。
- 6 本書は大久保正健訳『宗教をめぐる三つのエッセイ』(勁草書房、2013) として

新訳が刊行された。

- 7 近年のもっとも総括的なミル研究である Rosen (2013) では、ミルの宗教論をこの第2論文までの範囲での「人類教」に限定し、第3論文「有神論」を考察していない。
- 8 ブリトンはこの部分に対して「ミルが単なる希望の領域における宗教と言ったのはどういう意味であろうか」(Britton 1976: 30/60 頁)と設問したことに触発されて「希望の宗教」という表現を使用することにした。小泉 (1988: 296; 1997: 229) はこれを「希望の神学」と名づけているが、社会の利益に結果する個々人の道徳性の涵養を具体的目標とするなどある種の宗教運動まで含意しうる点で、内容的に「神学」というより「宗教」と呼ぶ方がふさわしいと考える。
- 9 『宗教三論』の初の完訳者大久保によれば「キリスト教が超自然主義である限り、…ミルは最後までキリスト教の外に立っていた。ミルが宗教論においてキリスト教に接近したと言えんとすれば、その形跡は奇跡論においてミルが啓示の可能性を希望の対象として承認したという一点のみである」と認定している (2012: 251)
- 10 松永 (1996) ではオクスフォード運動は「本質的には保守的な運動だったため、聖書批判や自然科学の発展を阻害する方向に働いた」(202)と否定的な側面を強調している。ストールも、広教主義の影響やドイツ由来の聖書批判の浸透による教会の権威を弱体化させる傾向を自由主義 [Liberalism] とニューマンが規定し、理性に信仰を対置させることでそれに対決しようとしたことを言う。「従って、運動全体は公然とした反動であった」と (Storr 1913: 279)。
- 11 小田川 (1999: 148-149) が紹介しているように、碩学モスナーは「人間と自然に関する諸事実をありのままに検討し、それによって人間の経験を越えた事物の蓋然性を示す試み」(Mossner 1936: 81) が『類比』の議論の核心であるという。
- 12 ただし、ニューマンが知識の区分を強調しているのに対し、バトラーは「自然の真理と啓示の真理には大きな類似があり」と捉えている点で、ニューマンによる2者の懸隔が強調された知識の2区分とは異なる。また、「聖書が理解されるとすれば、それは自然の知識が理解されるのと同じ仕方であるに違いない。つまり、学問と自由の継続と進歩によってである」(Ibid.)と述べている (Butler 2004: 244)。
- 13 これをモスナーは、「ニューマンは実際はバトラー自身よりヒュームに近い」と評している (Mossner 1936: 208)。
- 14 ニューマン自身は、「良心とは被造物と創造主とを結びつける根源であり、神学的真理は個人の宗教的習慣によって最も確実に獲得される」(GA: 106)と

- 述べている。その良心論の超越論的特質については、竹内 (2005) がその信仰告白的バイアスを割り引いても、東洋的倫理観との対比も含めて有益である。
- 15 ヴィクトリア時代の蓋然性 [probability] と可能性 [possibility] の用法については Richards (1997) が参考になる。
 - 16 信仰の確認に向かう個人内面の指向性を重視するこうした方向について、ロウランドはニューマンを「人格主義」の系譜に位置づけ、同時に、そこにニューマン自身の意図を越えた「霊的エキュメニズム」を読み込んでいる (Rowland 2010: 4, 142)。
 - 17 スティーヴンは 'Newman's Theory of Relief' でこの見地からより詳細にニューマンのロジックを検討している (Stephen 1893: 168-241)。
 - 18 コーンウェルは、『アポロギア』と『承認の原理』が出版された 1860 年代と 1870 年代は、科学と宗教の闘いが最高潮となり喧噪となった時代として刻印された」と言う (Cornwell 2010: 234)。

References

- ・引用・参照した著作や論文に翻訳があれば適宜参照したが、訳文は必ずしも翻訳通りではない。参照した場合には、原著ページ／翻訳書ページ、のように表記した。
- ・使用、言及したミルの著作はトロント大学版の著作集、*The Collected Works of John Stuart Mill*, Toronto: University of Toronto Press/London: Routledge & Kegan Paul, 1963-1991. 本文では以下のように略記。
 CW I: *Autobiography and Literary Essays*, J. Robson and J. Stilling (eds.), 1981.
 CW VII-VIII: *A System of Logic, Ratiocinative and Inductive*, J. Robson (ed.), 1974.
 CW IX: *An Examination of Sir William Hamilton's Philosophy*, J. Robson (ed.), 1979.
 CW X: *Essays on Ethics, Religion, and Society*, J. M. Robson (ed.), 1977.
 CW XII, XIII: *The Earlier Letters of John Stuart Mill 1812-1848*, F. E. Mineka (ed.), 1963.
 CW XXII, XXIII: *Newspaper Writings of John Stuart Mill*, A. Robson and J. Robson (eds.), 1986.
 CW XXVI: *Journals and Debating Speeches*, J. Robson (ed.), 1988.
- ・使用したニューマンの著作の略記は各著作の末尾に示した。
 Newman, John Henry (1906/1843) *Fifteen Sermons preached Before the University of Oxford Between A.D. 1823 and 1843*, London: Longmans, Green, and Co. OS.

- (2008/1865) *Apologia Pro Vita Sua & Six Sermons*, ed. & Introduced by Frank M. Turner, New Haven & London: Yale University Press. AP. 異豊彦訳『アポロギア』上・下、エンデルレ書店、1948-1958年。
- (1979/1870) *An Essay in Aid of a Grammar and Assent*, intro. by Nicholas Lash, Notre Dame (IN): University of Notre Dame Press. GA. (『承認の原理』)
- (2004/1872) *Discussions and Arguments on Various Subjects*, intro. and Notes by Gerard Tracey, Leominster: Gracewing.
- (1996/1873) *The Idea of a University*, New Haven & London: Yale University Press. IU. ピーター・ミルワード編、田中秀人訳『大学で何を学ぶか』大修館書店、1983年。

Alexander, Edward (1965) *Matthew Arnold and John Stuart Mill*, London: Routledge & Kegan Paul.

Bain, Alexander (1969) *John Stuart Mill: A Criticism with Personal Recollections*, (1st ed., 1882), New York: Augustus M. Kelly.

Britton, Karl W. (1976) 'John Stuart Mill on Christianity', in Robson and Laine (1976), 21-34.

Butler, Joseph (2006/ 1736) *The Analogy of Religion, Natural and Revealed, to the Constitution and Course of Nature*, in the Part Four of *The Works of Bishop Butler*, ed. with intro. by David E White, Rochester (NY): University of Rochester Press.

Chadwick, O. (1983) *Newman*, Oxford: Oxford University Press. 川中なほ子訳『ニューマン』教文館、1995年。

Chesterton, G. K. (1913) *The Victorian Age in Literature*, Home University Library ed., Oxford: Oxford University Press. 安西徹雄訳『ヴィクトリア朝の英文学』春秋社、1979年。

Cornwell, John (2010) *Newman's Unquiet Grave: The Reluctant Saint*, London/New York: Continuum.

Craik, Henry (ed.) (1896) *English Prose Selections*, Vol. V, Nineteenth Century, London: Macmillan and Co., Ltd.

Dennis, B. and D. Skilton (eds.) (1987) *Reformand Intellectual Debate in Victorian England*, London: Croom Helm.

Dessain, C. S. (1980) *John Henry Newman*, new ed., Oxford: Oxford University Press.

Dulles, Avery (2002) *John Hery Newman*, London/New York: Continuum.

Ekeh, O. P. (2011) 'Newman's Cogito: John Henry Newman's Phenomenological Meditations on First Phisosophy', in *The Heythrop Journal*, 52, 90-103.

Ferreira, Jamie (1989) *Scepticism and Reasonable Doubt: The British Naturalist*

- Tradition in Wilkins, Hume, Reid, and Newman*, Oxford: Clarendon Press.
- Griffin, John (2008) 'Cardinal Newman and the Origins of Victorian Skepticism', *The Heythrop Journal*, Vol. 49, 980-994.
- Hick, John (1963) *Philosophy of Religion*, Englewood Cliffs (NJ): Prentice-Hall. 間瀬啓充訳『宗教の哲学』培風館、1968年。
- Ker, Ian (1988) *John Henry Newman*, Oxford: Oxford University Press.
- Lightman, Bernard (ed.) (1997) *Victorian Science in Context*, Chicago & London: The University of Chicago Press.
- Lipkes, Jeff (1999) *Politics, Religion and Classical Political Economy in Britain*, New York: St Martin's Press.
- Mossner, E. C. (1936) *Bishop Butler and the Age of Reason*, London: Macmillan.
- Raeder, Linda C. (2002) *John Stuart Mill and the Religion of Humanity*, Columbia (MO): University of Missouri Press.
- Ramsay, Matthew (2012) 'Ex Umbris: Newman's New Evangelization', in *New Blackfriars* 93 (1045), 339-357.
- Richards, Joan L. (1997) 'The Probable and the Possible in Early Victorian England', in Lightman (1997), 51-71.
- Robson, John M. and Michael Laine (eds.) (1973) *James and John Stuart Mill Papers of the Centenary Conference*, Toronto and Buffalo: University of Toronto Press. 杉原四郎他訳『ミル記念論集』木鐸社、1979年。
- Rosen, Frederick (2013) *Mill*, Oxford: Oxford University Press.
- Rowland, Tracy (2010) *Venedict XVI: A Guide for the Perplexed*, New York: T & T Clark Ltd.
- Sell, P. F. Alan (ed.) (1997) *Mill and Religion: Contemporary Responses to Three Essays on Religion*, Bristol: Thommes Press.
- (2004) *Mill on God: The Pervasiveness and Elusiveness of Mill's Religious Thought*, Hampshire: Ashgate Publishing Limited.
- Secord, James A. (2000) *Victorian Sensation: The Extraordinary Publication, Reception, and Secret Authorship of Vestiges of the Natural History of Creation*, Chicago (IN): University of Chicago Press.
- Short, Edward (2011) *Newman and His Contemporaries*, London/New York: Continuum.
- Stephen, Leslie (1877) 'Dr. Newman's Theory of Belief', *Fortnightly Review*, No. 131.
- (1893) *An Agnostic Apology and Other Essays*, London: Smith, Elder & Co. 高橋和子抄訳「不可知論者の弁明」、高橋 (1993) 53-96所収。
- Storr, Vernon F. (1913) *The Development of English Theology in the Nineteenth Century 1800-1860*, London, New York, Bombay, and Calcutta: Longmans,

Green and Co.

Williams, Ieuan (1992) 'Faith and Scepticism: Newman and the Naturalist Tradition', in *Philosophical Investigation*, 15(1), 51-55.

Wilson, Colin (1957) *Religion and the Rebel*, Cambridge(MS): The Riverside Press. 中村保男訳『宗教と反抗人』紀伊國屋書店、1965年。

有江大介 (2008) 「J. S. ミルの宗教論：自然・人類教・“希望の宗教”」、『横浜国際社会科学研究所』12(6)、1-34。

—— (2013) 「J. H. ニューマンの知識論：ヴィクトリア時代の信仰と科学」、有江編『ヴィクトリア時代の思潮とJ. S. ミル：文芸・宗教・倫理・経済』三和書籍、73-95。

大久保正健 (2011) 「訳者解説」、J. S. ミル著、ヘレン・テイラー編『宗教をめぐる三つのエッセイ』勁草書房、215-252。

岡村祥子・川中なほ子編 (2005) 『J. H. ニューマンの現代性を探る』南窓社。

荻野昌利 (2005) 『歴史を〈読む〉——ヴィクトリア朝の思想と文化』英宝社。

小田川大典 (1999) 「『発展』と『蓋然性』：バトラー、ニューマン、アーノルド」、行安茂編『近代イギリス倫理学と宗教：バトラーとシジウィック』晃洋書房、146-167。

川中なほ子 (2005) 「『承認の原理』の問いかけるもの」、岡村・川中編 (2005)、204-232。

小泉 仰 (1988) 『ミルの世界』講談社。

—— (1997) 『J. S. ミル』イギリス思想史叢書10、研究社。

下条慎一 (2013) 『J. S. ミルの市民論』中央大学出版部。

高橋和子 (1993) 『不可知論の世界：T. ハーディをめぐる』創元社。

竹内修一 (2005) 「倫理と霊性の交差点——ニューマンの良心理解への一考察——」、岡村・川中編 (2005)、157-179。

長倉禮子 (2005) 「ニューマンの大学論をめぐる」、岡村・川中編 (2005)、128-156。

西原廉太 (2005) 「エキュメニカル時代におけるニューマン理解の可能性」、岡村・川中編 (2005)、233-248。

松永俊男 (1996) 『ダーウィンの時代——宗教と科学——』名古屋大学出版会。

—— 横浜国立大学名誉教授

Summary

J. S. Mill's Jesus and J. H. Newman's God

Daisuke Arie

Mill and Newman sincerely thought about faith and God in the Victorian age of 'science versus religion'. Mill, a 'Saint of Rationalism', proposed the famous 'Religion of Humanity' as a secular moral system in the second part of his 'Three Essays of Religion'. The idea of 'Human Jesus' he introduced played an essential role in it. He, however, expressed his hope of probable immortality of body and soul in the third part titled 'Theism'. This rather transcendental final stage could be called 'Religion of Hope'. Newman, a leader of the Oxford Movement, tried to establish the logical way to 'leap' toward faith from acknowledged new knowledge of the Victorian science. For justifying the leap, he, like Mill, adopted the concept of probability for introducing his new idea of the 'illative sense' that should make individual faith credible. Leslie Stephen claimed that seemingly opposed two of them arrived at the scepticism in the same way after all, and, in fact, they created a severe earthquake in the intellectual world of the Victorian Era.

Those provide valuable suggestions about the meaning of faith in the present age when massacres are often carried out in the name of God.

論 文

J. プリーストリーと T. H. ハクスリー ——18世紀後期イングランド啓蒙の遺産とヴィクトリア時代知識人——

松本 哲人

1. 問題の所在

本稿の目的は、ヴィクトリア期を代表する科学者であるトマス・ヘンリー・ハクスリー (Thomas Henry Huxley, 1825-1895) のジョゼフ・プリーストリー (Joseph Priestley, 1733-1804) に関する論文を分析することにある。ハクスリーのこの論文は、1874年8月2日、バーミンガム市に寄贈されたプリーストリーの銅像の除幕式典のときに行った記念講演にハクスリー自身が加筆、修正を施し出版したものである。Paradis (1978. 69-70) に従えば、ハクスリーの伝記的著作の中でも、比較的成功していると言われていた論説において、ハクスリーがプリーストリーに肯定的であろうが、否定的であろうが何らかの興味を持っていなかったならばこのような講演をハクスリーが引き受けることはなかったであろう。本論では、イングランド啓蒙を代表する人物であったプリーストリーに対し、ハクスリーがどのような評価を下していたのかについて明らかにしたい。

プリーストリーは18世紀後期イングランド啓蒙を代表する人物であった。この時代のイングランド啓蒙の特徴は、宗教と科学の結合であり、フランス啓蒙や一般的に理解されている啓蒙像、つまり、科学の脱宗教化とは逆の方向性であった。18世紀後期イングランドの科学者たちにとって、科学を宗教とどのように結び付けていくかということが大きな課題であった。事実、松永 (1996) が論じるように、イングランドにおいて科学が宗教から分離し、世俗化し始めるのは19世紀の後半になってからであり、啓蒙からおよそ1世紀後のことであった。その中心にはハクスリーがいた。

しかしながら、ハクスリーがプリーストリーの宗教的側面を肯定的に評価したとはいえない。実際、ハクスリーはバーミンガムでの講演の1ヵ月前に友人宛の手紙において以下のように書いている。

「私はバーミンガムの招待を受けたことを有罪であると認める。…[今回の講演は、私の心の中にある] 邪悪を少し換気する良い機会となるであろう。しかしながら、全く何も深く根付くことのなかった冷淡なかつてのユニテリアンを支持するような宗教的狂信者と私になるだろうとは言えない。だが、私は近代思想の傾向に関する論説を手助けする上で彼らを良き釘にすることができると考えている。」(Huxley 1909. 442)

ハクスリーはユニテリアンを積極的に評価したわけではなかったにもかかわらず、ハクスリーは近代ユニテリアンの代表者であったプリーストリーに関する——簡単なものではあるが——モノグラフを講演し、出版した。ハクスリーはプリーストリーをとりわけ「近代思想の傾向」を理解する恰好の一例として取り上げていたが、実際にどのような側面を評価していたのか。ヴィクトリア朝期を代表する科学者ハクスリーが18世紀後期イングランド啓蒙のチャンピオンであるプリーストリーの遺産をどのように受け継いだのか。ハクスリーの思想は、ヴィクトリア朝期に18世紀後期にイングランドで生じた啓蒙がどの程度引き継がれ、宗教と科学の分離がどのようにしてなされたのかを考察する上で最良の材料を提供していると言えるのである。

そこで本稿では、まず予備的作業として18世紀後期イングランド啓蒙の特徴を主にプリーストリーの思想に即しながら論じる(第2節)。次に、ハクスリーのプリーストリー論の概略を論じ、その特徴を明らかとし(第3節)、そこから析出された自由の概念にとりわけ着目しハクスリーの思想的特徴をプリーストリーとの相違を念頭に置きつつ論じることとしたい(第4節)。最後に本論の結論を論じる(第5節)。

2. 18世紀後期イングランド啓蒙とは何か

18世紀後期イングランド啓蒙とは、アメリカ革命やフランス革命を支

持し、審査・自治体法の撤廃を要求するとともに、産業革命の土台を支え、イングランドの社会経済の改良を目指す運動であった。啓蒙とは、生越(2008, 129-131)が適切に要約しているように、「世俗世界における人間の進歩と改良」の思想であり、近代科学や新たな道徳的規律、経済的發展を目指した。そのような進歩や改良を目指すために、何らかの先進国をモデルケースとし、それにいかにして追いつき、乗り越えていくかが問題であったし、以前の科学的知識をより発展させ、科学そのものやその科学を利用し物質的に豊かになるためにはどうすればよいかが啓蒙の実際的な問題として考えられる必要があった。¹

このような啓蒙思想は、従来、宗教と科学の分離として理解されている。その典型はフランス啓蒙に見ることができる。ヴォルテールやデイドロは人間の理性を尊重し、宗教的側面を科学から排除しようとした。しかしながら、18世紀後期イングランド啓蒙においてそのような側面は見られない。その啓蒙は、宗教と科学をできるかぎり密接に接合し、社会の改良を目指したのであった。例えば、Brooke (1991. 180 / 訳198-200)は、「啓蒙時代の特徴を科学的唯物論と宗教的価値観の対立図式とする構図は、あまり上手な素描ではないのである。フランスで真実らしかったことが必ずしもブリテンには当てはまらない」と指摘している。イングランドにおいては、ジョサイア・タッカーのような国教徒であろうが、プリーストリーのような非国教徒であろうが、宗教を科学から排除するのではなく、その両者を接合しようとしたのであった。²

また、実際にプリーストリーはイングランド社会のモデルを新たに建国されつつあったアメリカに見出した。³ さらに、産業革命期において、新たな産業を支える技術を作り出すための科学的知識と神学は密接な関係をもっていた。プリーストリーはその関係をその時代において追求したもっとも著名かつ多産な科学者であった。Jones (2008. 15)は、産業革命期の啓蒙をとりわけ「産業啓蒙Industrial Enlightenment」と呼び、プリーストリーは「神学における良き実践に対してだけでなく、科学における良き実践に対する表明に疲れ知らずであった」し、産業啓蒙期の「第一人者であり、卓越した人物」と評価を下した。このようにプリーストリーは18世紀後期イングランド啓蒙の代表的人物であった。

そのような活動は、とりわけ当時の聖書を合理的に解釈しようとした合理的非国教徒たち **rational dissenters** によって推進された。⁴ その中でもユニテリアンは非常に大きな役割を担った。ユニテリアンは、プロテスタントの一派であり、聖書の徹底的に合理的な解釈を行おうとした。彼らは三位一体 **Trinity** を聖書のどこにも書いていないとしてその教義を認めなかった。三位一体とは、創造主としての父なる神、贖罪者キリストとして世に現れた子なる神、信仰経験に顕示された神聖なる神の聖霊が唯一なる神の三つのペルソナであるという説を指す。彼らは、神を唯一なりとし、キリストの神性を否定し、キリストを宗教的に偉大なメッセンジャーと見なす教義を信奉する。ユニテリアンという名称は、この三位一体説を拒否し、唯一体 **Unity** 説を信奉したことに由来している。後に見るように、彼らは国家と結びついたイングランド国教会制から排除されており、国家や教会に頼って生活する道を事実上絶たれていた。彼らは自分たちで生計を立てるために知識を追求し、それを応用することで自分たちの生活手段を手に入れていたのであった。その典型的な例の一つはプリーストリーにおいて見られる。彼の二酸化炭素の発見は、それを応用した炭酸水の開発によって、彼に非常に大きな富をもたらした。彼らにとって啓蒙は自らの生活を維持するためにも必要な活動でもあった。

3. 哲学と神学

プリーストリーが科学を推進した目的は、彼の啓蒙がそうであったように、宗教と科学の密接な関係を描き出すことにあった。事実、彼は科学の目的を神の摂理の解明と考えていた。つまり、地球の誕生と同時に神が世界および地上に埋め込んだシステムを発見することが科学のもっとも根本的な目的と見なしたのであった。しかしながら、ハクスリーのプリーストリー評価は異なっていた。ハクスリーは「ユニテリアン神学者プリーストリーではなく、思想と行動における合理的な自由の恐れなき防衛者、つまり哲学的思想家プリーストリーに対する賛意を示す (Huxley 1874. 2-3)」ために今回の記念講演を行うと明示している。また、別のところでも、以下のように論じている。

「プリーストリーの生涯を眺めてみると、とにかく彼は、知識を増進することと、知性の進歩の原因であり同時に結果でもある思想の自由を促進することに、もっとも高い価値を認めていたことは明らかである。」(Huxley 1880. 134-135 / 訳65)

事実、プリーストリーは知識の増進により進歩が導かれ、人々の生活を改善することができると信じていた。彼は次のように書いている。

「知識は、ペーコン卿が観察したように、力であるので、人間の能力は、実際に、[その力を用いることによって]大きくなるであろう。物質と法則を含む自然を、今以上に、私たちの指揮下に置くことができるだろう。[そして、]人は、現世での自分たちの状況をより容易かつ快適にするだろう。」(Priestley 1768 [1771]. 9)

ハクスリーは上述のプリーストリーの一節に言及していないけれども、プリーストリーの考えを良く知っていたし、非常に高く評価していた。ハクスリーの言葉を単純に信じれば、ハクスリーはプリーストリーの政府論に極めて高い評価を与え、宗教的な議論には着目しなかったと考えることができる。

しかしながら、実際には、そのような単純な話ではなかった。ハクスリーはプリーストリーの哲学に非常に大きな関心を払っていたし、哲学と政治の関係性に着目していた。事実、プリーストリーの哲学は彼の神学と密接な関係を持っていたし、ハクスリーは宗教的側面を無視したわけではなかった。Stanley (2015. 169) は、この講演においてハクスリーは「プリーストリーを科学と宗教の両方における自由のアイコンとして用いた」と見なしている。

実際、ハクスリーは、プリーストリーの哲学的考察を以下のように非常に高く評価している。

「プリーストリーの『物質と精神に関する論考』や『哲学的必然論例証』は、英語で存在し、今もお読み価値のある物質論と必然論のもっとも強力で、明確で、断固とした説明の中の一つである (Huxley 1880. 22)。」

プリーストリーは、これらの書において、自由と必然という哲学的な対立軸のもと、自由を否定し、必然を受け入れた。Harris (2005, 168) も指摘している様に、プリーストリーは必然論を原因と結果の考察によって引き出すことができると信じていた。プリーストリーは以下のように書いている。

「すべての自由、より厳密に言えば、力——私は[それを]人がもっていないと言っているが——は、(精神状態や物の見方を含んでいる)すべての以前の状況が正確に同じであったときに、さまざまなことをするそれである。私が論じていることは、同じ精神状態や同じ物の見方を持った彼はしばしば自発的に同じ選択をし、同じ決断を下すだろうということである。例えば、もし私が今日、何らかの特定の選択を行えば、その選択に関する私の精神状態に何ら変化がないとすれば、私は昨日も同じようにしたであろうし、明日も同様にするであろう。

言い換えれば、精神の他の力や自然の構造物における他のあらゆるものと同じように、その意思に関する何らかの固定化された自然の法則があると私は主張する。そして、結果的に、何らかの現実のないし明らかな原因なしに、それと無関係に、つまり、何らかの選択の動機なしに、それは何ら決定されないものであり、動機は私たちに何らかの明確かつ不変の方法で影響を与えるのである。その結果、あらゆる決定ないし選択は、それに先立つものによって永続的に規制され、決定されるのである。そして、それに現わされた動機に照らされた精神のこの永続的な決定が、その哲学的決定論によって私が意味しているすべてである。これが事実であると認められれば、適切な原因と結果において、自然世界におけるのと同じ知的世界においても、過去、現在、将来のすべての事物の間での必然的な関連性が存在するであろう。その結果、人類の大部分がそれを理解することができ、もしくはそれによって動揺させられることがほとんどなかったとしても、規定の自然法則にしたがって、出来事は、それが過去にそうであった、ないし現在そうあるべきものと別の物であることはできないだろうし、それゆえ、過去、現在、未来のすべての事物は、正確に自然の創造主が実際にそれらに対してそうあるべきと意図し、準備したものなのである。」(Priestley 1777 [1782], 461-462)

世界のある現象には必ず因果関係が存在し、人間のある行為は動機を認知できる理性を持つ精神によって導かれるとプリーストリーは考えていたの

であった。プリーストリーの必然論は、神の摂理の解明という彼の科学的探究とこのような点において密接な関係を持っていた。

また、ハクスリーが的確に表現している様に、「彼[プリーストリー]は肉体から分離した魂の存在を否定した。そして、自然的結果として、彼は人の自然的不死を否定した(Huxley 1880. 22)」のであった。魂と肉体の分離論を取らず、すべてを肉体に還元させ、霊的なものを除外したプリーストリーの物質論は、彼の必然論と結びついて科学の探求に対する一つの重要な視点となっている。つまり、霊的存在を認めないがゆえに、プリーストリーの科学的探究は、現実世界における観察と経験によって可能となった。⁵

Stanley (2015. 215) に従えば、ハクスリーは18世紀に展開された必然論や自由意思といった哲学的な問題や魂の存在に関する神学的議論を「本質的にはヴィクトリア時代のそれと同じもの」として議論していた。とりわけ、ハクスリーはそのような議論が「下品なラベルでもって汚名を着せられてきた」として擁護したのであった。ハクスリーは以下のように論じている。

「もしある人が物質主義者であれば、もし彼の主張はその反対であるにもかかわらず、彼はそう[物質主義者]であるし、そうであるに違いないと良き権威が言え、もし彼が人の自然的不死を信じる良き理由を自分自身に見出すことができないとわかれば、立派な人々は、実際のないし潜在的な快樂主義者と同じように彼を一時的な現金保管箱を持つ危険な隣人と見るのである。表面上の見かけにおいて有徳であればあるほど、秘密の『重大な個人的罪』をなるほどたっぷり持つことになる。」(Huxley 1874. 23)

それにもかかわらず、ハクスリーは、「プリーストリーの[神学に基づいた]哲学的視点を防衛も攻撃もしない(Huxley 1874. 26)」と評価を保留している。なぜなら、ハクスリー自身が表明しているように、彼がプリーストリーの視点に興味を払った一番の理由は、プリーストリーの考えの表明を18世紀イングランドの「監督的な当局 episcopal authority (Huxley 1874. 26)」であるイングランド国教会に対する挑戦と見なしていたからであった。このようなプリーストリーの挑戦をハクスリーは積極的に評価し、そ

れがプリーストリーの政治思想によって支えられているとハクスリーは見なした。ハクスリーのプリーストリーに対する、「思想と行動における合理的な自由の恐れなき防衛者、つまり哲学的思想家プリーストリー (Huxley 1874. 2-3)」としての評価はこのような側面から現れるのである。

4. 政府と自由

ハクスリーはプリーストリーの政治思想の基礎をロックに見出した。「『政府の目的は人類の善である』というロックの金言は…プリーストリーによって拡大された (Huxley 1880. 27)」とハクスリーは見なしている。これはプリーストリー自身も自認していたことであり、適切な見解である。⁶「あらゆる国家の構成員、すなわち、大多数の善や幸福は、偉大な基準であり、それによりその国家に関するあらゆるものが最終的には決定されなければならない (Priestley 1768 [1771]. 13)」とプリーストリーが論じたとき、彼がロックの金言を拡大していることは明らかである。その善を追求するためには、個々人の活動の自由が認められなければならない。

しかしながら、ハクスリーは、講演の数年前にあたる 1871 年の著作において、ロックの統治論を評価しつつも、必ずしも納得しなかった。政府の目的についてハクスリーはロック『統治二論』を批判的に考察している。⁷ロックは、「統治の目的は人類の善」と規定し、以下のように論じる。

「そうであるとすれば、人民が専制の際限のない意志にさらされることと、支配者が、その権力を濫用するようになり、それを人民の保全にではなく破壊に用いる際には時として抵抗を受ける場合とでは、どちらが人類にとって最善であろうか。」(Locke 1691. 474 / 訳 375)

このようにロックは、政府の目的は、専制的な統治者を排除し、専制的な権力が人々の自由を奪い、最終的には人々の生活そのものを破壊する可能性を示唆することにその力点が置かれていた。その意味において、ロックが「統治の目的は人類の善である」と論じたとき、その言葉は普遍的な原

理として考えられていた。それに対し、ハクスリーはロックを批判し、「人類の善」は不変ではないので、国家の役割は時代に応じて変更される可能性があると考えていた。⁸ ハクスリーはロックを評価しながら、以下のよう論じる。

「ロックはそのような『政府の機能を定義するような』条文を——私が知っている——もっとも高貴であると同時にもっとも簡潔な政府の目的に関する記述で私たちに与えている。つまり、『統治の目的は人類の善である。』

だが、人類の善は、彼ら[人々]の能力や文明状態がどのようなものであっても、すべての人々にとって完全で固定化されるものではない。」
(Huxley 1871. 278)

ハクスリーにとって、人々の善なるものは、時代やその時代を生きている人々の考えによって変化するものであると考えていた。プリーストリーが国家の少なくとも大多数の構成員によって善や幸福が追求されなければならないと論じたとき、時代や状況に関係なく一元的な善や幸福を考えていたとはその統治論の民主的な性格から見ても難しい。⁹ その意味において、ハクスリーは、ロックを継承し、統治の目的は普遍的な善ではなく、時代に適合した形での善と考えていたプリーストリーの統治論を正確に理解していたと見ることは正しい。

しかしながら、人類の善や幸福について、ハクスリーとプリーストリーの見解は異なっていた。ハクスリーは善と幸福を同一視し、現世における目的と見なしていた。ハクスリーは以下のよう論じている。

「人類の善はあらゆる人々によって——彼[あらゆる人々]が同胞の幸福を減少させることなく享受することができる——すべての幸福の獲得を意味していると私は理解している。

もし私たちがこの定義の下でどのような種類の幸福が生じるかを考察すれば、私たちはその幸福が、安全ないし平和の感覚、商業によって獲得される富ないし商品、芸術——それは建築、彫刻、絵画、音楽、文学のどれかであろう——、知識すなわち科学、最後は同情ないし友情から引き出されると理解するのである。」(Huxley 1871. 281)

ハクスリーにとって人類の善とは現世において獲得される幸福を基準とし、他者の幸福を減らすことなく自己の満足を最大化することであった。また、彼の幸福理解を見れば明らかなように、彼は現世における幸福だけを問題としている。したがって、ハクスリーにとって、幸福とは極めて現世的な意味を持ち、来世を含む宗教的な意味を持ち合わせておらず、幸福となることが現世における目的となっていた。

他方、プリーストリーは幸福な状態を現世だけでなく宗教的な意味においても用いていた。彼にとって、幸福な状態とは最終的には来世における人格の完成を意味しており、現世において幸福な状態が完結するものではなかった。プリーストリーは来世と現世における幸福を明確に区分していたけれども、現世での幸福が来世での幸福を保障するための手段となると考えていた(松本 2009, 13-15 参照)。

このような彼らの幸福に対する手段と目的の立ち位置の差異は、彼らのおかれていた状況の違いでもあった。先に論じたように、プリーストリーは非国教徒であり、審査・自治体法の下、自由は制限されていた。これらの法律の制定、施行の目的は、ローマ・カトリック教徒と反三位一体論者の排除であった(Dickinson 1977, 84/ 訳 82 参照)。審査法 Test Act とは、1672 年、チャールズ 2 世が出した信仰自由宣言などのカトリック宥和政策に議会が反発して制定、1673 年に施行された。それは、三位一体信仰を宣言するよう強制的な審査を課すことによって、イングランド国教徒以外の人物が国家機関の公職に就くことを禁止した法律であり、国教徒による支配体制の強化に役立った。自治体法 Corporation Act とは、1661 年に施行され、国教会以外の人物が地方自治体の官職に就くことを禁止した法律であり、非国教徒の政治的影響力を排除する役割を持っていた。これらの法律は、ともに 1828 年まで維持された。また、審査法はオックスフォードやケンブリッジといった国立大学への非国教徒の入学を禁じた。¹⁰ プリーストリーは、そのような抑圧的な制度を撤廃する必要があると考えていた。ハクスリー自身も以下のように論じている。

「審査・自治体法の影響を受けた非国教徒として、そして寛容法の便益から排除されたユニテリアンとして、プリーストリーが教会制度について非常

に明白な意見を持っているとわかって驚くことではない。」(Huxley 1880. 28-29)

しかしながら、プリーストリーは、審査・自治体法の即時撤廃は要求したが、国家を支配するイングランド国教会の即時撤廃を要求したわけではなかった。ハクスリーはそのようなプリーストリーの態度に驚いた。

「唯一の驚きは、これらの〔教会制度に関するプリーストリーの〕意見が…非常に穏健であったということである。」(Huxley 1880. 29)

事実、ハクスリーも引用しているようにプリーストリーは以下のように論じている。

「教会当局は社会の揺籃状態においては必要であるだろうし、同様の理由から、社会が不完全である限りある程度必要であり続けるだろう。それゆえ、市民政府が完成にほぼ達するまで、完全に捨て去られることはないだろう。したがって、もし私がヨーロッパのすべての教会支配の即時解散に賛成するかどうか尋ねられれば、私は否と答えるだろう…経験をまず改革から作らせよう、もしくは同じことであるが、現在よりもよりよい制度を作らせよう。そして、それらによって多くの本質的な部分を改良させよう。そして、善がそれら〔教会支配〕から作り上げられることはできないという経験によって、それらのことが理解されるまで、〔教会支配を〕完全に放棄しないようにしよう。」(Priestley 1768 [1771]. 94-95)

ハクスリーにとって教会制度は現世での幸福の達成にとって障害にすぎなかった。それゆえ、ハクスリーは教会支配に対して懐疑的であったし、プリーストリーが教会制度の即時撤廃を求めなかったことを不思議に感じたのであった。

このようなハクスリーの態度はスコットランド啓蒙に対しても向けられていた。ハクスリーはとりわけ現世での幸福を実現するための方法としてアダム・スミスによって書かれた『国富論』の中で論じられる商業に対する政府規制の撤廃への言及を高く評価している。

「当時、教会によって非国教徒に対して向けられた銃が発射されていた。その法律は悪と残忍の巣窟であった。アダム・スミスはほとんどの人が関心を向けなかったが新たな予言者であった。商業は政府の側でばかばかしい障害によって妨害され、ましてや理性に反した助けによって破壊されたのであった (Huxley 1880. 32)。」

彼が考える幸福の一要素である「商業によって獲得される富ないし商品」を獲得するために、彼自身が明示的に論じているわけではないが、事実上、市場の働きを重視し、政府の市場への干渉は「理性に反し」ているものとして否定された。ハクスリーにとって、イングランドにおける非国教徒の迫害とスコットランドにおける政府による経済活動の制限は、個々人の自由を抑圧し、人々の幸福の実現を阻害するものにすぎなかった。ハクスリーが啓蒙を高く評価するのはこのような側面からであり、プリーストリーをハクスリーが高く評価したのはこのような非国教徒の制限に対するプリーストリーの態度にあり、政府による個々人への自由の干渉がいかに人々を苦しめ、現世での幸福の実現から遠ざけられているかを暴くためであったのであった。

5. おわりに

本論は、ハクスリーのプリーストリー論から、ハクスリーがどのようにプリーストリーやイングランド啓蒙を評価していたのかを明らかにすることが目的であった。ハクスリーは、当時のヴィクトリア朝における政府の規制に対する反論をプリーストリーの議論から引き出そうとした。イングランド啓蒙は、プリーストリーがその典型であるように、宗教と科学の結合を目指した。宗教が国家により管理、統制されている状況では、科学研究の進展は見込めない。よって、政府の様々な規制を取り払おうとした。実際、18世紀の様々な非国教徒に対する規制は、彼らの自由を奪っていた。ハクスリーはプリーストリーのそのような考え方に共感し、同じように彼が生きた時代に適用しようとした。ハクスリーにとって、個々人に自由が担保されることは、社会生活を営むだけでなく、科学研究において

も重要な側面であったに違いない。彼がプリーストリーをはじめとする18世紀後期イングランドから学んだことは彼にとって極めて重要な示唆を与えるだけでなく、彼の思想の根本的な部分を支えていた一つであったといえることができるだろう。

注

- 1 当然のことながら、啓蒙思想は漸進的改良や輝かしい未来を描くためにいくらか楽観的なものであり、アドルノとホルクハイマーが描いたように啓蒙が悲劇を生み出した事例も存在する。しかしながら、既得権益が蔓延する社会において、その既得権益を打破するために啓蒙思想は必要であったし、現在においてもその精神は必要であるだろう。
- 2 Waterman (2004, ch.2) および松本 (2015b) を参照。
- 3 アメリカ革命後のプリーストリーのアメリカの見解については、Bonwick (1977, 183-184) を参照。また、革命以後のアメリカの経済的条件 (自由な取引や移動など) に関しては、Priestley (1798) を参照。
- 4 非国教徒の定義や彼らの宗教的義務等については、プリーストリーのもっとも初期の著作において明確に論じられており、「合理的非国教徒 rational dissenters」という表現もその著作において見ることができる。Priestley (1769) を参照。また、川分 (1993) にしたがえば、合理的非国教徒は18世紀後半から19世紀前半のイングランドの政治に大きな影響を与えた。
- 5 実際、プリーストリーは、科学研究における仮説の形成に懐疑的であり、観察と経験に非常に重きを置いていた。彼は以下のように論じている。「ア・プリオリな議論に基づいて作り上げられた仮説は、もっとも耐えられるものではない。ここに観察と経験だけが安全な導きとなる。」(Priestley 1803, 35)
- 6 これに加え、プリーストリーはロックの抵抗権の議論を重視した。その背景にはアメリカ植民地の独立問題ならびにフランス革命があったことは言うまでもない。事実、ロックの政府論においても抵抗権の問題は極めて重要であった。愛敬 (2004) もまた、ロックの抵抗権と18世紀イングランドにおけるその受容に関して以下のように論じている。「ロックの『政府解体論』の射程として私が評価したいのは、既存の統治構造の道徳的基礎を根底から問い直すこの論理である。18世紀のウイッグが受容することのできなかったロックのラディカルな含意は、具体的には彼の抵抗権論 (= 政府解体論) に示されていたが、その本質は彼の政治理論の問題設定そのものにあったというべきである。そして、『自然的自由にある自律的個人が、何らかの権

力に服従すべきであるとすれば、その正当な政治権力とはいかなるものか』というロックの問題設定のラディカルな含意が、プライスやペインといった18世紀後半の急進派へと継承されていくのであり、彼らのロック受容は、『名誉革命体制』期のイデオロギーたるロック思想の『曲解』によるものではなくて、まさにロック政治思想の『正当な継承』であったと評価できるように思われる。」このような理解に則したとき、ハクスリーがロックの抵抗権を中心的な概念と見なさなかったことはひとつの象徴的な事象である。つまり、ハクスリーがロックを論じるとき、彼は歴史状況が安定的であり抵抗権を議論する意義を見出さなかったのか、そもそもロックのこのような急進的側面を支持しなかったために抵抗権を議論しなかったのか、ひとつの大きな問題となるように思われる。

- 7 ハクスリーは、1890年に『自然的権利と政治的権利』において、ルソーやケネーを念頭に「自然法から引き出された自然権は単に事実を述べる方法である (Huxley 1890. 349)」から、「ア・プリオリな政治的思索であり有害な方法 (Huxley 1890. 337)」であると批判している (Fujita 2007. 143 も参照)。しかし、ロックに対する明示的な批判は存在しない。
- 8 このようなハクスリーの考えは彼の個人主義的教育論への批判の論理としても利用される。藤田 (2004. 49-50) 参照。
- 9 この点は、トマス・ペインの政治思想と極めて類似している。ペインもまた、それぞれの時代においてそれぞれの主権者による意思決定が重要であると考えていた。「あらゆる時代およびあらゆる世代は、それ以前のあらゆる世代と同様、どのような場合にも、その思う通りにふるまう自由がなければならぬ。墓の中に入っていないが、なおかつこの世を統治しようなどという虚栄心ないし思い上がりは、数ある専制の中でも、それこそ笑うべき傲慢不遜な専制というべきである。」(Paine 1791. 278 / 訳 24) しかしながら、プリーストリーとペインには神学的な相違が見られることに注意が必要であるように思われる。(松本 2015a 参照)
- 10 正確には、イングランド国教会の39か条(聖公会大綱)への署名が義務付けられていたために、その39か条への宣誓拒否者は大学への道が閉ざされることとなる。

参考文献

- Bonwick, Colin 1977. *English Radicals and the American Revolution*, Chapel Hill: The University of North Caroline Press.
- Brooke, John H. 1991. *Science and Religion: Some Historical Perspectives*, Cambridge, Cambridge University Press. 田中靖夫訳『科学と宗教：合理的自然観のパラ

ドクス』工作舎、2005年。

Dickinson, H. T. 1977. *Liberty and Property: Political Ideology in Eighteenth-Century Britain*, Methuen. 田中秀夫監訳、中澤信彦他訳『自由と所有——英国の自由な国制はいかにして創出されたか』ナカニシヤ出版、2006年。

Fujita, Yuh 2007. “Land, Nature and the State: Wallace, Spencer and Huxley on the Land Question,” 『ヨーロッパ研究』6: 135-152.

Harris, James A. 2005. *Of Liberty and Necessity: The free Will Debate in Eighteenth-Century British Philosophy*, Oxford: Clarendon Press.

Huxley, Leonard 1909. *Life and Letters of Thomas Henry Huxley*, in Two Volumes, vol. 1, New York; London: D. Appleton and Company.

Huxley, Thomas H. 1871. “Administrative Nihilism,” in *Collected Essays of T. H. Huxley*, Vol. 1, [London: Macmillan and Co, 1893,] Bristol: Thoemmes Press, 2001.

—— 1874. “Joseph Priestley,” in *Ibid.*, Vol. 3.

—— 1880. “Science and Culture,” in *Ibid.*, Vol. 3. 佐伯正一・栗田修訳『自由教育・科学教育』明治図書出版、1971年。

—— 1890. “Natural Right and political Rights” in *Ibid.*, Vol. 1.

Locke, John 1691. *Two Treatises of Government*, in *The Works of John Locke in Nine Volumes*, (London: Rivington, 1824, 12th ed.). Vol. 4. 2016/6/20. <http://oll.libertyfund.org/titles/763> 加藤節訳『統治二論』岩波書店、2007年。

Paine, Thomas 1791. *Rights on Man*, in *The Writings of Thomas Paine*, Collected and Edited by Moncure Daniel Conway, New York: G. P. Putnam's Sons, 1894. Vol. 2. 西川正身訳『人間の権利』岩波文庫、1971年。

Paradis, James G. 1978. *T. H. Huxley: Man's Place in Nature*, Lincoln; London: University of Nebraska Press.

Priestley, Joseph 1768 [1771]. *An Essay on the First Principles of Government*, in *The Theological and Miscellaneous Works of Joseph Priestley*, ed. with notes by Rutt, J. T., Bristol: Thoemmes Press, 1999, vol. 22.

—— 1769. *A View of the Principles and Conduct of the Protestant Dissenters*, in *Works*, vol. 22.

—— 1777 [1782]. *The Doctrine of philosophical Necessity Illustrated*, in *Works*, vol. 3.

—— 1798 [1801]. “Maxim of Political Arithmetic, Applied to the Case of the United States of America,” in *Letters to The Inhabitants of Northumberland and Its Neighbourhood*, 2nd ed., in *Works*, vol. 25.

—— 1803. *Lectures on History, and General Policy*, in *Works*, vol. 24.

Stanley, Matthew 2015. *Huxley's Church & Maxwell's demon: From Theistic Science to*

Naturalistic Science, Chicago and London: The University of Chicago Press.
 Waterman, Anthony. M. C. 2004. *Political Economy and Christian Theology since the Enlightenment: Essays in Intellectual History*, New York: Palgrave Macmillan.

生越利昭 2008.「勤労の育成——ロックからハチスンまで」田中秀夫編著『啓蒙のエピステーメーと経済学の生誕』京都大学学術出版会。

川分圭子 1993.「十八-十九世紀転換期のウィッグと非国教徒——ホランド・ハウスの人々」『史林』76(3): 1-35。

藤田祐 2004.「自然と人為の対立とその政治的含意——T. H. ハクスリーの進化社会理論」『イギリス哲学研究』27: 39-54。

松永俊男 1996.『ダーウィンの時代——科学と宗教』名古屋大学出版会。

松本哲人 2009.「神学的功利主義の二類型——W. ペイリーと J. プリーストリー」『マルサス学会年報』18: 1-30。

—— 2015a.「プリーストリーのペイン批判——18世紀後期イングランドにおけるユニテリアニズムと理神論」『ピューリタニズム研究』9: 40-50。

—— 2015b.「ジョサイア・タッカー——宗教・経済・政治」佐藤光・中澤信彦編『保守的自由主義の可能性』ナカニシヤ出版。

—— 徳島文理大学短期大学部講師

Summary

Intellectuals of the English Enlightenment and the Victorian Age: Joseph Priestley and Thomas H. Huxley

Akihito Matsumoto

This paper elucidates “Joseph Priestley,” an essay by T. H. Huxley, one of the most eminent scientists in the Victorian age. Priestley was a typical thinker of the late 18th-century English Enlightenment, which was distinct from the French one. In other words, Priestley did not attempt to separate science from religion; instead, he wished to harmonize the two.

Huxley believed the state-church system to be a factor that limited scientific research, and he therefore asked to be liberated from its authority. Priestley had also demanded the same in 18th-century England. As a Unitarian and a rational dissenter, Priestley wanted to interpret the Bible rationally. To do so, he did not want to be restricted by an authority that did not permit individuals to interpret the Bible.

Huxley identified his own assertion with Priestley’s thought, although he did not completely accept Priestley’s theological perspectives. However, he recognized Priestley’s liberal attitudes toward politics and endeavored to adopt them in the Victorian age.

エッセイ「ヴィクトリア朝文化研究の〈場所〉」

索引の旅

富山 太佳夫

この20年程の間に文学の研究は大きく変化してしまい、我々はなんともきつい状況に直面することを強いられてしまったように思えて仕方がない。これも所詮は世紀の転換期につきまとう宿命のひとつと言えなくもないかもしれないが、18～19世紀の英文学の研究にしてもそれを回避してしまうことはできなかったように思われる。その理由のひとつは、20世紀の後半における数多くの新しい批評方法の出現によってもたらされたテキストの読み方そのものの多様化であり、更には実際に手にとって読めるようになった作品の多数化であるだろう。電子メディアの活用も単純な喜びにはつながらないことは、衆知の事実であるだろう。

やまほどの作品と多種多様な読み方——1947年生まれの私がまだ学生であった今から半世紀ほど前には、それはとても予測できないような事態であったことを、私としては今改めて痛感するしかないのだ。しかも、そうした状況の中で、私は研究を続けて行くしかないのである。どうすればいいのだろうか。作品を読む、研究の現状を知る、そして自分なりの研究をまとめあげる——そのためには、何を、どうすればいいのだろうか。誰に相談すればいいのだろうか。

*

ジェイン・オースティンの作品にはハードカバー版からペーパーバック版までいろいろなものがあり、しかも日本語訳もいろいろあるので、入手するのは造作もないことであるのだが、今私の前にあるのはジャネット・

トッドが編集責任者をつとめたケンブリッジ大学版である。その理由というのは簡単なこと、注釈の出来具合がこれまでのものと較べてずっといいということである。私が何よりも興味を引かれたのは、あれこれの作品の注釈本8巻ではなくて、『ジェイン・オースティンのコンテキスト』(*Jane Austen in Context*, 2005)と題された巻であった。この巻の全40章のうちの25章を構成する「歴史と文化のコンテキスト」の部分には、社会史や文化史に関係する見出しがずらりとならんでいるのだ。「農業」、「都市」、「風景」から、「哲学」や「心理学」にいたるまで。そして、「ナショナリズムと帝国」という10頁ほどの論文。ここには、従来から知られている関連コンテキストにオースティンを安置すると同時に、これまでの研究では注目されることの少なかったコンテキストにも結びつけてみようとする志向性も感じとれるだろう。

しかしながら、そうした方向性をあざやかに具体化してみせたのは、つまり、オースティンを囲んでいた歴史の実体の諸相をあざやかに描き出してみせたのは、ロイ＝レズリー・アドキンズの『ジェイン・オースティンのイングランド、ジョージ王朝時代から摂政期の日常生活』(*Jane Austen's England: Daily Life in the Georgian and Regency Periods*, 2013)である。すぐれた歴史学者夫妻の手になるこの本は、その刊行の翌年にはペンギン・ブックス版として刊行されるほどの高い評価を得ているのである。しかも表紙の頁の前の二頁には二人の写真がのせられ、その二頁と裏表紙は、この本を称賛する書評の抜粋でうめつくされているのだ。未知の本を買おうとするときにこうした書評の抜粋が役に立つことは知っているものの、これだけ華やかな列挙はあまり眼にしたことがない。

これまでのオースティン研究とは違う一次資料をふんだんに活用したこの本は、社会文化史の角度からのオースティン像をみごとに提示していると言ってよいだろう。しかもこの本は、ただオースティンの人生と作品について考えるのを助けるだけでなく、この小説家の生きた時代の細部にも眼を向けることをすすめ、かつ要請してくるのだ。この本は『ジェイン・オースティンのコンテキスト』とは別のかたちで、それよりもはるかに具体的に、この小説家を歴史の中に混在させようとしていると評価していいだろう。

*

ともかくジェイン・オースティンという名前には、これと言った明確な理由もなしに、さまざまな場所で出会うことになるのだが、その特異な場所のひとつとして忘れられないのが、デイヴィッド・ダビディーン他編の『オックスフォード・コンパニオン版黒いブリテンの歴史』(*The Oxford Companion to Black British History*, 2007)である。各頁ダブル・コラムで、550頁近くもあるこの事典を購入して開いた瞬間に、私の目の前に *Mansfield Park* の項があったのだ。勿論オースティンの作品は30歳台にすべて読了していたのだが、この小説はまだ私の好奇心を引きつけることはなかったようである。そのような作品についての記述が眼の前に出現し、そこには次のような説明が含まれていたのである。

エドワード・サイードの『文化と帝国主義』が1993年に出版されるまで、パートラムの所有する領地に対するオースティンの言及は、批評家たちからは見逃されていた。……サイードの書いている通りであって、「奴隷売買と砂糖と植民地の農園主階級が存在しなかったならば、パートラム家の者たちは存在しなかったであろう」。

30代の初めに出会って以来——最初は Said という名前をどう発音すればいいのか分からなかったし、まわりのひとたちに訊いてみても分からなかった——ずっと読み続けてきた批評家の名前がそこにあったのだ。その彼の本を今ではすべて持っている。『オリエンタリズム』は大学院の演習のテキストとして使い、学生たちをキリキリ舞いさせたこともある(そのうちの何人もが、今では大学の教授となっているのだ……あァァ)。そんな彼の本をまた読み直ししようかと考えていたのだが、そんな私の背中を押すかのようにこの記述が眼の前に出現したのだ。こんな偶然が、本を読み、あれこれと考えだし、あれこれと調べ、そして場合によっては、エッセイや論文を書き出す契機となることもありうるのだ。考えてみれば、私の場合、研究テーマの設定には必然的なものは何もなかったかもしれない——動機は偶然、そう、偶然以外のなにものもなかったような気がする。

私は誰か特定の作家や、特定のテーマから出発したことはないような気がする。

確かに大学に入った当初にジョージ・エリオットの『サイラス・マーナー』（教科書用の書き直し版）や007シリーズやサマセット・モームの小説を読んだことは記憶しているものの、そうした作品は誰かに勧められたものではなかった。そう、私は図書館の中に入ってあれこれの百科事典をめくっていたのだ。そこには簡潔な説明と参考文献のリストなどがずらりとならんでいた。しかも使う事典を取りかえれば、同じ項目でも説明の内容が違うのだ。この事実気がついたときには、私にとって大学とは図書館で本を読む場所ということになってしまい、教室とはくたびれたときに休憩する場所あるいは仮眠をとる空間という場所ということになってしまった。メモをとるのは講義中に出てくる人名や事項名——そして図書館に戻るということになる。

＊

私の通うその図書館の棚には *The Encyclopedia of Victorian Literature* (Wiley-Blackwell, 2015)、4巻本がならんでいる。私はその中からとりあえず第2巻を取り出して、索引を確認してみることにする。ダブル・コラムで80頁を越えるそこにはAからZまでのおびただしい数の項目があるのだが、orientalismの項があることが明記され、更にEdward Saidの他にRudyard Kipling、colonialism and postcolonialism、colonial and postcolonial literature、concepts and definitions、travel literature、そしてサイードの著作である*Orientalism*そのものを説明している頁数も提示されているのである。更にcolonialism and postcolonialismの項を確認してみると、Africa、Australia、Canada、Caribbean、India、New Zealand、Pacific Islandsなどの説明頁が明記され、Rider HaggardやOlive Schreinerや詩人Tennysonについての記述頁も明記されているのである。

Elizabeth Gaskellの項では合計27の項目で、この作家の関係した人物や問題が説明されていることが分かるようになっている。つまるところ、こうした情報をわけもなく提供してくれるのが、この21世紀の初めに出版

される各分野の各種の事典の特徴だと考えていいのではないだろうか。残念なのは、そうした事情の変化があまり知られておらず、それを活用できる研究者の数もまだ少ないということである。

——立正大学教授・青山学院大学名誉教授

エッセイ「ヴィクトリア朝文化研究の〈場所〉」

ヴィクトリア朝文化研究の一指針

中島 俊郎

文系の学問は役に立たないから廃止してしまえ、と脅迫まがいの言葉を四方八方からぶつけられて、文系の教員はとまどってしまった。いよいよ黙示録の日が到来したかという諦めがつのだけで大学内外からはしかるべき指針もなく、そのあげく成果が曖昧模糊とした学問は教育の名に値するのか、と非難が繰り返され甘んじるしかない日々が続いた。学生からも「イギリス文化史は就職にどれくらい役に立つのですか？」と真顔で詰問され思わず絶句してしまい、まさに前門の虎、後門の狼といった状態である。

こうした現状下で、アリストテレスは知性の追究そのものを尊しとし、それ自体の自足したあり方を「スコレー」と表現しているが、スクールの原義はここにあるのだ、などと学問の大義から説明しようとしても誰も耳を傾けてくれない。そして大学教育の根幹をリベラル・アーツが占めルネサンス期に人間追究がなされ、19世紀初頭にヒューマニティーズへと発展していき、その中に文学、文化研究は含まれているのだ、などと文系こそ学問の王道であるのだと力説してみたところで、「沈滞した」とみなされている現状を打破するにはまったくもって螻蛄の斧でしかなかった。

では、この閉塞した状況を打開するにはどうすればいいのか。文化研究の現場を直視し、どのように発展していったかという歴史的展開を具体的に考えてみることでいくばくかの示唆がえられるのではないか、と思える。本学会の会員の多くが文系に類した機関に所属していると思われるので、ヴィクトリア朝末に生じた英文学研究の黎明期に研究がどのような状態にあったかといった問題を、ひとりの文学研究者を介在させて検討して

みよう。

少なからぬ驚きだが、問題の在り処は過去も現在も何ら変わらない。文学を教える現場では即座にいかに教授するかという困難に直面した。文学という、紙のうえに印刷された想像力の展開をいかにして教えるのか、という点にこそ文学教育が内在する本質的な難しさがあった。どんな工夫をこらしても想像力の躍動を停止せずに教えることは至難をきわめた。文学という鳥を籠のなかに閉じ込めてしまい観察するようなアプローチは、文学の形骸化した姿しかとどめなかった。想像力を試験するとはどういうことなのか。英文学が試験というなかで制度化されたときに、何が起きたのか。

1855年、植民地インドにおいて、またその後すぐにイギリス本国においても公務員採用試験に英文学が教科として導入された。1871年に行われたインドでの公務員採用試験では数学1,250点、自然科学1,000点満点に対して、英文学は500点満点であった。どのような出題であったのであろうか。シェイクスピア、ミルトン、ポープなどの古典作家からスコット、テニソンといった現代作家までの諸作品より40から50もの文章を選び出し、設問として「以下の文章を読んで出典を記し、英語としての特徴的な点を詳述せよ」というような質問が課された。50問中、10問くらい正解すれば十分に合格圏内であったが、45問も正解して試験官を驚かせた志願者がいたという。

今日でもイギリス文学史の試験問題として出題されているような試験だが、こうした試験の傾向と対策として、1860年代には『標準受験英文学』、『公務員採用試験対策英文学』などと銘打った受験参考書が300点以上も出版されていたのである。当然、同じような解答ばかりが並ぶ答案用紙が量産されるようになった。こうした詰込み主義に対して教育者側は手をこまねいていたのだが、学校で英文学を教えることに熱意を少しばかり向け出すようになった。ただ困ったことに教授法は従来のラテン語を教えるのと全く同じような手法が用いられたのである。たとえば、ミルトンの詩句を選んで文法、解釈をほどこすのだが、ミルトンの作品が選ばれたのは、「高いモラルを含んで」いるからであって、決して文学性ゆえではなかったのである。こうした優れていると見なされた特定の作家の文章をもとに、

暗誦、作文が課されたのであった。なぜこのような言語表現をとるのか、といった文学的な側面は一切無視されてしまい、たえず字義にとらわれ文学を解体してしまう教育法が採られた結果、つまりカーライルが論難した、「言語学という堆肥に根を広げた」野菜のごとく文学をみなしてしまったため、英文学教育が目標とした「人格、人間性の涵養」などとはほど遠い無残な帰結をむかえてしまったのであった。

またトマス・アーノルド自身は文学のもつ人文的側面を重視していたにもかかわらず、パブリック・スクールの現場では知性、想像力の啓発よりも、信仰、身体の酷使、道徳面での潔癖性が強調されたため（たとえば『トム・ブラウンの学校生活』で、父が息子を寄宿舎へ送りだすとき、「正直なイギリス人、立派なジェントルマン、信仰の篤いキリスト教徒になって欲しい」と忠言をおくり、学業面に一切ふれていないことを思い起こせば十分であろう）、文学教育は同様な病弊をかくせなかったのである。

こうした硬直した英文学研究の現状をまえにして、「英文学研究は有望な科目で時間も精力も費やされ、注目されているというのに期待された成果は一向に上がっていない。知識が伝えられず、興味をよびさましてもいない現状を教師は感じている」とつつみかくさず吐露した批評家がいた。ジョン・チャートン・コリンズ(1848-1908)である。コリンズと言えば、エドモンド・ゴスの著作を完膚なきまでにこき下ろし、オックスフォード大学教授職に就任するためには手段を選ばないといった悪名の高さばかりが喧伝されてきた。テニソンからは「文学という頭髮に巣くうシラミ」というありがたくない仇名をつけられたりもした。

桂冠詩人から不名誉な称号を奉られてから一世紀以上たった現在、コリンズがテニソンの詩文に下した多くの注釈は、テニソン詩への標準的な解説書になっているクリストファー・リックスの編纂書『テニソンの詩作品』(1969)に多くが採用されている。テニソンの詩句の出典だけにとどめておけばコリンズは難を免れたであろうが、剽窃まがいの評語を弄してしまったがために詩人の逆鱗にふれてしまったのである。今日、公平な目でレズリー・スティーヴンが編集していた『コーンヒル・マガジン』に連載されていたこの注釈作業を検討してみると、つまり周辺で生起していた騒動を一掃すれば、コリンズの正当性があらわになり、逆にテニソンがかくま

でも怒りを爆発させたのも意外と核心をついていたからではあるまいかと思えてくるのである。

さて成人教育運動(The University Extension Movement)は、1873年にケンブリッジ、オックスフォードには1878年に、そして1876年、ロンドンにそれぞれセンターが設置され開始をみた。そして1890-91年、成人教育運動は興隆をさわめ、コース数はオックスフォードで102、ケンブリッジでは135、ロンドンでは130も開講され、20,248名(オックスフォード)、10,947名(ケンブリッジ)、12,923名(ロンドン)もの受講者を獲得していた。

こうした展開のなかでもっとも人気を集めたのが英文学であった。他の教科と比べて、それは準備もそれほど必要なく、人生と直結し、資格試験などにも対応していて、何よりも愛国心を鼓舞したからである。そしてこの英文学の教え手でもっとも注目を集めたのがコリンズであった。「聴講者は集中して耳を傾け、コース修了までほとんど脱落者もなく申し分ない」とコリンズが受講者を賞賛すれば、受講者の方からも、「朗々とした声で、文学の本質をじつに分りやすく教えてくれるすばらしい講師だ」と賛辞を寄せる声があとをたたなかった。

コリンズが成人教育のために作成したシラバスを見るとよく練られていて、英文学を志す者の興味をつなぐように工夫されている。そして、受講者の少なくないコリンズ讃の声からは、コリンズがすぐれた文学の教え手であったことが判明する。実際、受講者数は、教え方の巧拙によって著しく増減した。とかく高名な作家や大学人は名声倒れで、意外に教える方は稚拙であり、受講者からは評判が悪かったようだ。やはり教育は教えるテーマを熟考し、教える熱意をもち、同時に創意工夫を凝らし、挑むしかないようである。

コリンズの教育理念が帰結点を見出すのは、1904年、バーミンガム大学の英文学教授に任命されてからである。大学おける専任職を得たとはいえ、コリンズは何ら変わることなく大学外で、つまり成人教育のために英文学を逝去するまで教えつづけた。1904年以後もおしなべて10コース以外の授業を各学期に担当している。こうしたコリンズの態度は大学内で専門科目として英文学を教える以上に、英文学を広く人々に教え、その魅力

を直接伝えるところに歓びを見出していたからであろう。成人教育を自身の野心実現のために利用した事実はたしかに否めないものがある。だが、二度にわたり、オックスフォード大学から拒絶されても、またバーミンガム大学で職を得ても、成人教育の講師をやめようとしなかったのは、やはり人々に英文学を教えることである種の自己実現をはかっていたと見る方が妥当であろう。

コリンズが世に強く訴えた最後のプロジェクトは、ジャーナリズム学科の設立であった。雑誌 *The Nineteenth Century* にその概要が詳しくコリンズ本人によって説明されているが、ここでもコリンズの成人教育に対する姿勢と同質のものを認めることができるのである。つまりそれは、大学教育と一般社会をたえず連動させて両者を活性化させようとする態度にほかならない。

オックスフォード大学生涯教育センターの資料保存室にはヴィクトリア朝後期から展開した成人教育に関する膨大な資料が収蔵されている。受講者が提出した課題レポートに添削者によるペンの書き込みが生々しく残っている。教育の現場がここにある。文化研究において新しい知見を与えるためには、従来の評価をつねに懐疑の目をもっていどみ、原資料に対して予断を捨て対象を再考し、文化がかもしだす肌理をみずから感知していくしかないようだ。

——甲南大学教授

エッセイ「ヴィクトリア朝文化研究の〈場所〉」

大学の二つの身体

大久保 譲

王の「政治的身体」と「自然的身体」の二重性を精緻に分析してみせたカントーロヴィッチの名著に倣って、大学には二つの身体がある、と考えてみよう。教育や研究、学則やカリキュラムといった制度からなる「理念としての大学」と、それらが具体化する場としての、大学の建物。

言うまでもなく、研究・教育がどのような建物でおこなわれるか、というのは大学にとって決して副次的な問題ではない。大人数相手の講義を可能にするのは大教室をそなえた建物であり、少人数教育を徹底するなら、それにふさわしい小さな部屋が多数必要になる。1990年代以降、何らかの「改革」に関わってきた日本の大学関係者であれば、「理念」の闘争として始まった大学改革が、往々にして建築上の制約につきあたり、あるいはしばしば校舎の新築・改築という物理的な改変を伴うのを見てきたはずだ。新学部・新学科を開設する場合はもちろんのこと、既存のカリキュラムの再編においてさえ——「教室の確保」という“問題”を、どれだけ耳にすることか——建築的配慮は欠かせないのである。

にもかかわらず、大学の理念を語ることに熱心な巷間の「大学論」の多くは、大学のもう一つの身体であるその建築物に関して、奇妙な無関心を示している。

好意的にであれ批判的にであれ、いまだに言及される機会の多い大学論の古典、ジョン・ヘンリー・ニューマンの『大学の理念』（1873）もまた、大学教育の理念を格調高く論じながら、その教育がどのような校舎で行われるべきかについては、何も語ろうとはしない。宗教教育の必須をいうための前提とはいえ、知識が何かに奉仕することを否定し、「知識のための

知識」の意義を主張した——「芸術のための芸術」を唱えたペイターやワイルドがニューマンを讃美したのも頷ける——ニューマンのエッセイを読んで、何より気になるのは、彼が描く大学が、まるでカリキュラムだけで成り立っているようで、具体的な教室や校舎のイメージがまったく欠けている点だ。よく知られているとおり、ニューマンの大学論はもともと、学長職を要請されたアイルランド・カトリック大学の新設を目指す演説（1852）に基づいている。实际的な目的を持つ議論なのだから、その具体的な場としての大学の建築物について触れていないのは、いっそう不思議なことに思えるのだ。

一方、実学・科学教育を重視し、ニューマンとはおよそ対極的な大学教育に関する理念を抱いていたT. H. ハックスリーも、教育の場としての建築にさしたる関心を示さないという点では、『わが生涯の弁明』の著者と径庭がない。なるほど、1876年、ジョンズ・ホプキンス大学の開校式に招かれておこなった「大学教育に関する演説」で、ハックスリーはある程度以上建築について語っている。だが、そこから読み取れるのは、結局のところ建築は大学の教育・研究において本質的な要素ではない、という主張である。

当分のあいだ建築をしないというのは、私にはもっとも賢明な決定のように思えます。教育のための巨額の基金が、すべてを石に変えてしまう建築という泉によって、単なるレンガやモルタルに使われて化石と化し、大学組織を運営するためのお金が残っていない、といった惨状を、これまでさんざん見てきました。……教育基金の管理人たちは、時に壮麗な宮殿を建てて、それを大学と称してきたのです。私は建築の門外漢ですが、あえてアドバイスをするなら、正直なレンガ職人を見つけ、増築のためのスペースはたっぷりとして、いま本当に必要な部屋だけを作らせなさい。一世紀後、ボルティモア・オハイオ鉄道の株価が1000ドル上がって、必要な教授陣をそろえ、必要な実験施設を建て、考えうるかぎり最高の博物館と図書館を作りあげて、それでもなお、どう使っていいかわからない数万ドルの金が余ったら、その時には建築家でも呼んで、ファサードを建てさせればいいでしょう。（Thomas Henry Huxley, “Address on University Education”, *Collected Essays*, Vol. III.）

大学の理念を語りながら、教育・研究の場となる大学の建物については全く触れないニューマンと、否定的な言及にとどまるハックスリー。この二人に限らず、大学の理念をめぐる戦わされた当時の議論のほとんどにおいて、大学建築への配慮は決定的に欠けている。

しかし誰もが知るとおり、ヴィクトリア時代のイギリスでは、大学改革の風潮に従って、少なからぬ大学の建物が新築されていた。それらの建物はしばしば、知識人たちの著作に劣らず「大学の理念」を体現している。ロンドン大学のギリシャ風の柱廊玄関は（ヴィクトリア時代以前の建築だが）、オックスフォード・ケンブリッジに抗した非キリスト教的な教育方針にふさわしいものだったろうし、オックスフォード大学の自然史博物館は、ゴシック建築の構造に剥き出しの鉄を用いて、新しい科学教育の登場を宣言している。そして鉄骨とコンクリートの構造にゴシック風の荘重な外観をまとわせた19世紀後半の市民大学＝赤レンガ大学の建物は、まるで「人文的教養」が「実学」的実体の装飾に使われているようにも見えるのだ。

理念としての大学ではない、ヴィクトリア時代の大学のもう一つの身体、すなわち建築としての大学は、大学論よりも、むしろフィクションの中で鮮明な像を浮かび上がらせている。

トマス・ハーディ『日陰者ジュード』の主人公は、誰よりも理念としての大学に憧れている（彼の愛読書にニューマンの著作が含まれているのは当然と言えよう）。だが、教育制度のアウトサイダーであるジュードにとって、大学は何よりもマテリアルな空間であり、「建物」としてその姿を現す。「来る日も来る日も、学寮のそばを通り過ぎる際、それらの回廊や中庭を彼は折にふれて歩き回るのだった。……いわゆるクライストミンスター『情緒』が、彼の体内にだんだん深く浸み込んできた。そして、とうとう、おそらく学寮の中に住んでいる誰よりも、それらの建物の材質や仕上がり具合や歴史などについて多くを知っているようになった」（川本静子訳、傍点引用者）。それゆえにジュードは、知識や財産や階級によって

ではなく、建造物によって「大学の理念」から遠ざけられていると感じる。「ジュードは、強く憧れた土地に現実に住むようになった今初めて、自分がその熱望の対象から実はいかに遠く離れているかを悟ったのだった。たった一重の壁が彼を、自分と共通の精神生活を分かち持つ幸せな同世代の青年たちから隔てているだけだった。……たった一重の壁——しかし、なんとという越え難い壁だろうか!」(同前)だからこそ、ジュードが学問を諦めるとき、白墨で捨て台詞を書きつけるのは、門の閉ざされたコレッジの塀なのである。

一方、ニューマンが初代学長を務めたカトリック大学の校舎——現在もユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリンのニューマン・ハウスとして残っている——の様子を、同大学の卒業生であるアイルランドの作家は小説の中で次のように描く。

「十一時! もうあの講義にも間に合わない。いったい何曜日だったっけ?……木曜日か。十時から十一時がイギリス文学。十一時から十二時、フランス文学。十二時から一時、物理学。あのイギリス文学の講義を思い浮かべると、こんなに離れているのに、じれったくて、やりきれない気分になる。……[他の学生と違い]彼自身は頭もさげないで、あらぬことばかり考えているが、少人数の教室内を見まわしても、窓から隣接する公園の侘しい眺めに目をやっても、陰気な穴蔵のじめじめした腐朽の臭いばかりが鼻につく」(ジェイムズ・ジョイス『若い芸術家の肖像』大澤正佳訳)。スティーヴン・ディーダラスにとって、ニューマンの「大学の理念」は、あくまで現実の空間と時間の配置の中で具体化されるものだ。そして理念としては普遍的であるはずの「教養」も、例えば「イギリス文学」という形で、アイルランド人青年に対する文化的な圧力として機能する。

問題はむしろ、カリキュラムばかりではない。大学の校舎自体が、19世紀末アイルランドの宗教的・政治的力学の中に置かれているのだ。「階段をのぼってフランス文学の授業に出るには遅すぎる。彼はホールを抜けて左手の廊下を物理学の階段教室に向かった。廊下は暗くて静かだが、何となく気が許せない。……イエズス会の建物は治外法権だから、ここでのぼくは異邦人の間を歩いていることになるからだろうか? トーンやパーネルのアイルランドは空間的にもここから遠ざかってしまったような気がする」

(同前)。

あるいは、ヴィクトリア時代も終わり、赤レンガ大学が次々と認可を得ていた20世紀の初頭に、ケンブリッジ出身の一人の作家は、建物のない大学を想像してみせる。

「人間を集めて講義をするという野蛮な方法は、ずっと前になくなっていた。ヴァシュティも聴衆も自分の部屋から出ることはない。彼女は自分のアームチェアに坐ったまま講義し、聴衆も自分のアームチェアに坐ったまま、彼女の声をかなりよく聞き、彼女の姿をかなりよく見ることができた」(E. M. フォースター「機械が止まる」小池滋訳)。これはMOOCsの先駆けだろうか？けれども、同時代のウェルズなら嬉々として描きそうな光景を、フォースターはディストピアとして提示する。理念としての大学の終焉ではなく(未来世界でも学問・教育は続いている)、教室という空間の消滅が、人類の知性の終わりの予兆となっているのだ。

どこか単調になりがちな「大学の理念」をめぐる言説以上に、「大学の建物」について、ヴィクトリア朝文化研究者が考えるべきことは多い。

——専修大学准教授

書 評

坂本優一郎著『投資社会の勃興
——財政金融革命の波及とイギリス』
(名古屋大学出版会、2015)

高田 実



産業革命の祖国イギリスは、金融国家として生き延びている。この金融国家を支える社会の歴史的な性格を、どのように理解したらよいだろうか。ここで取り上げる書物は、これを端的に「投資社会」と表現する。それは、「証券を売買し、保有し、利子や配当を得る行為が存在する社会」(9頁)と定義されるが、単なる投資利得社会ではなく、時代の枠組みをも規定する「全体性」をもった社会という意味で用いられている。したがって、この社会の勃興こそが、「近代社会の形成にとって欠くことができない前提」(9頁)となる。本書は、18世紀後半の投資社会の勃興を、政治、社会、文化、経済の4つの面から考察することで、その歴史的意義を総体的に把握し、新しい歴史像を提示する。

「序章 『投資社会』論へ向けて」では、イギリス近代史研究において「投資社会」論がいかに重要か、問題提起される。「イングランド財政金融革命」論、「財政＝軍事国家」論、アン・マーフィの議論などの研究史が整理され、時間(18世紀後半)、空間(政治的境界の問い直し)、対象(公債と他の証券の関係)の論点が見え、本書全体の課題と構成が提示される。とくに、国家と投資社会の弁証法的関係に注意が喚起される。

「第I部 投資社会の政治経済学」は、投資社会の土台をなす公信用の生成を政治面から考察する。「第1章 国政・都市政治・国際金融——18世紀中頃のロンドン・シティと公債請負人」では、1757年債の事例研究を通して、限定請負制度による起債の枠組みが確立する過程が示される。公信用の生成は、章題に示される三要素、つまり宮廷派ウィッグ、シティの反宮廷派、コスモポリタンな公債請負人が織り成す関係のもとではじめて

理解されうる。政治のなかで公債制度は動き出すのだ。限定請負制度が定着し、七年戦争期の財政を支えると同時に、公債請負人と中央政界が結びついた「古き腐敗」を批判する急進主義の台頭を示すのが、「第2章 七年戦争・公債請負人・党派抗争」である。公債請負人の国内外にまたがる人脈が辿られ、誰が起債に応じたか詳らかにされる。驚嘆するほど詳細な分析の結果、英国公債を支える国際的ネットワークが明らかにされ、政治的境界を超えて「オランダ、イギリス、フランスが同一の投資社会という空間を共有したこと、また、共有していると当時の人びとが認識していたこと」(85頁)が示される。

「第Ⅱ部 投資社会の形成」では、国際的広がりをもって「公信用を消費する側、つまり証券を取引し、保有し、利用する投資社会の社会的な側面」(115頁)が分析される。「第3章 公債請負人の基層——オランダ人貿易商と近世最末期の投資社会の一断面」では、投資社会の最上層、ファン・ネック商会の活動が検討される。貿易と金融を融合した経済活動に従事するユグノー商家は、投資社会のなかでは文化的閉鎖性を超えて開かれた投資活動を展開する。「第4章 証券投資をする人びとの社会——投資社会の垂直的拡大と公債の社会化」では、証券の投資者、流通経路、投資目的の分析を通じて、中流層、労働者層、女性の証券保有の実態が示される。公債請負人だけでなく、証券ブローカー、新聞広告、遺贈などを通じて証券保有が普及し、所得確保のみならず、投資収益をも狙った投資社会拡大の実態が描かれる。「公債の社会化」が進行する。驚愕すべき精度で証券所有の実態が明らかにされる。

「第Ⅲ部 文化と投資社会」は、投資社会の文化的側面、つまり「主観的な認識基軸の生成と、客観的な科学的な学知の誕生」が論じられる。「第5章 投資の文化史——公信用・投機・投資」は、過熱する投資社会のなかで、「土地」対「貨幣」という二項対立的認識から、次第に「土地」「商業」「証券」の三分法へと認識の構図が変わるとともに、「投機」と「投資」を峻別しつつ投資を促進する議論が登場する様を描く。後者では、トマス・モーティマ『ブローカー入門』(1761年)は非エリートに、またイサーク・ド・ピント『循環・信用論』(1771年)は海外のエリートに、投資を促す。著者はこれらの書物の受容のされ方にまで行き届いた配慮をしている。さらに

証券が年金という形で普及されたことが、投資社会の垂直的拡大につながった。「第6章 年金・科学・投資社会」では、これに伴い複利計算、人口統計学、確率論などの科学が発展し、それがさらなる投資の拡大を招くという投資と科学の「共棲関係」が示される。とりわけ各地に民間トンチンが成立し、これが後の公信用の垂直的および水平的拡大と大きく関係していることが強調される。

「第Ⅳ部 投資社会の拡大と経済」は、投資社会の経済的側面を検討する。「第7章 もうひとつの財政金融革命——社会基盤整備と投資社会」は、18世紀後半から19世紀初頭にかけての、都市改良、道路建設、港湾改良などの社会基盤の整備と投資社会がいかに密接に関係していたかを描出する。中央政府、地方政府、改良委員会、信託委員会などの事業主体は、税と各種利用料収入を利払い原資とした債券発行、株式発行によって資金調達を行った。この仕組みに信頼を与えていたのは議会制定法であった。「第8章 投資社会空間の拡大——アイルランド・ロンドン・ジュネーブ」では、1770年代のアイルランド財政はトンチンによって維持されたが、そこに資金を提供したのは、ロンドンを結節点としたヨーロッパ規模の投資社会であったことが示される。財政革命は、より広く投資社会のなかに位置づけられなければならないと主張される。「第9章 投資社会と国際金融」は、投資社会の水平的広がりを、債券市場における公債の発行、引き受けの数量的把握に基づき具体的に検証する。とりわけ、公債引受人の人的ネットワークを媒介とした、アムステルダム市場とロンドン市場との連携が証明される。市場・投資社会・国家の関連の重要性が指摘される。

「終章 投資社会とは何か」では、これまでの分析を踏まえて、投資社会の全体像が示される。戦争のための財源確保を起点として整備される公債制度に対応して、公債請負人を媒介としつつ水平的、垂直的に拡大しつづけた投資社会とは、政治、社会、文化、経済の4局面が組み合わさった「人びとが自発的にモネタリな関係で結合された社会」(384頁)であり、それが「動的な秩序を基調とする近代への移行を支えた」(385頁)ことが強調される。投資社会の全体性は、図終—1(381頁)に見事に図示されている。

さて、本書の意義はどこにあるか。何よりも、本書は投資社会を「全体社会」と捉えることで、画期的な近世・近代社会論を骨太に提示している。

これまでも、公債や財政制度の整備の意義を論じた研究はあったが、本書はそうした制度を成り立たせている社会の側に身を寄せながら、研究の手薄であった18世紀後半を対象にして、新しい視点から政治、経済、社会、文化を融合し、国家論もそのなかに埋め込んだ独自の全体史を描いている。社会とは、本来そうした全体構造を指し示す言葉であったし、社会史も本来であれば新たな全体史でなければならなかった。単に投資行動の事例の寄せ集めだけであれば、本書の魅力は半減していたであろうが、著者一流の構成力が、他の追隨を許さないオリジナリティの高い「全体社会」の構築を可能としている。〈政治→社会→文化→経済〉という全体構成の論理の序列には、異論もありうるだろうが、投資社会の歴史実態を表示するためには、この方法がベストであるという対象に即した著者なりの判断がある。それは、歴史の方法としては十分に成り立ちうる。この方法論も含め、何よりも「全体社会」としての投資社会という本書の肝をめぐって、議論が展開されるべきである。

著者が、魅力的な投資社会論を描きえたのは、なぜか。一方では、投資社会に身をおく「人びと」とその結びつきに、他方ではカネの流れに、いずれも徹底してこだわり、投資の実態を驚くべき精度で数量的に明らかにしているからである。誰が、何の目的で、どれくらいの金額を、どのように投資し、公債引受人はいかなる人脈を用いて資金を集めているのか。制度と結果の積み木細工に満足せず、人の動きに即して論を再構成しようとするこだわりが、投資社会の垂直的、水平的拡大の実像を見事に浮かび上がらせる。公債請負人の国境を越えた人的結合の解明はもちろんのこと、トンチンと女性投資家の持つ意味を説得的に議論している点は画期的である。中下層の人びとが、いかに生きようとしていたかという視点から、投資を見直すことで、投資社会に巻き込まれる大衆の姿がよくわかるのだ。個人的には、トンチンがここまでの広がりをもっていたことは驚きであった。とても勉強になった。また、各章にさりげなく配置されている図表は貴重な成果であるが、その背後には一次資料を探り当て、妥協せずに細かな数字を積み上げていく膨大な努力の跡が隠されている。この成果は今後の研究にとっても大変有益であるし、著者の忍耐強い調査にただただ敬意を表したい。

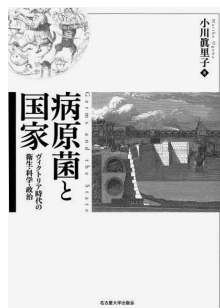
最後に1点だけ、論点を提示しておきたい。きわめて魅力的な投資社会論であるが、そこに内在する矛盾、対立、葛藤をどう組み込むかという点ではさらに研究の余地があるだろう。たとえば、当時は産業革命期でもあるが、モノづくりへの投資をどのように組み込むか。産業投資と公債・海外投資の乖離は、19世紀イギリス金融史の特徴であるが、18世紀の投資社会でこの両者はどのような関係にあったのか。限られた資金をめぐって競争はなかったのか。人とカネをめぐる説得的な議論を展開する投資社会論だけに、もうひとつの要素モノをめぐる社会の動きをどのように組み込むだろうか。鍵となるのは、産業と金融を媒介する「商業」がもつ社会的機能のような気がする。マーチャント・バンキングの勃興とも合わせて、投資社会の全体性を豊富化する視点から、このことを著者に尋ねてみたい。

膨大な研究史があり、近年最も活発な議論がなされている時代をめぐって新しい歴史像を提示することには大きな困難が伴うが、徹底した調査を基盤にそれに立ち向かい、今日的な関心にも応える魅力的な歴史像を提示する本書は、名著の名にふさわしい1冊である。必読の書である。

——甲南大学教授

書 評

小川眞里子著『病原菌と国家
——ヴィクトリア時代の衛生・科学・政治』
(名古屋大学出版会、2016)



鈴木 晃仁

疾病は、人間の文化と社会の根本に深い影響を与えてきた。ことに、19世紀から20世紀にかけて、コレラ、梅毒、結核、精神疾患などの疾病に対する公衆衛生が、世界各国の文化と社会に深い影響を与えた。これらの疾病を軸にして、ヨーロッパとアメリカ、そしてその影響を受けることを選んだ日本などの国家において、大きな意味を持つ場が作られた。これは、それぞれの疾患がより多くの死者や患者を出したかという数字上の問題よりも、そこに与えられた意味の問題であった。いかなるメカニズムで罹患が広まるのか、どのような行政的・社会的な仕組みでそれぞれの疾病に対応すべきなのか、それを通じて社会の何が守られるのか、といった根本的な議論が、世界各国で進行し、それぞれの国の議論が相互に影響を与える国際的な実践と言説の空間になっていた。そのなかで、もっとも大きな影響を与えた国家がイギリスであった。小川眞里子による本書は、このイギリスの公衆衛生、ことにコレラを中心とした公衆衛生の歴史を、詳細で水準が高いリサーチに基づいて記したものである。

小川の書物は、日本とイギリスの二つの学術の世界をすり合わせるという、ユニークで興味深い仕掛けを持っている。すなわち、書物のある側面は日本の読者に向けて、別の側面はイギリスの読者に向けて書かれている。書物全体の枠組みとしては、日本の研究者や学術的な読者が念頭に置かれている。小川が示している研究の状況と、それを改善する仕方は、日本の研究者からみたときの状況であり、学術を進展させる方法である。一方で、内部の具体的な議論はイギリスの研究者に対応しており、*Bulletin of the History of Medicine* や *Ambix* といった国際的な医学史の一流学術誌に掲

載された英語論文から組み込まれている。すなわち、全体としては日本の学術的な読者に向かって構成され、個々の部分はイギリスの研究者にとって新しい内容の議論を部品としている。このような形で、日本仕様と英語仕様を組み合わせた書物は、現在の日本の人文社会科学の世界が直面しているグローバルな発信とローカルな深化をどのように共存させるのかという問いに答える一つの形であろう。特に、イギリスの文学、社会、科学、医学などを主題として扱った仕事を日本語で発表するときに、英語圏の研究者に向かって語り掛けるのか、日本語圏の研究者や学術的な読者に対して発信するのかという難しい問題を、一つの仕方で解決している。

このような構成を取ったことは、本書に長所と短所の双方を与えた。長所としては、著者が英語圏で行った水準が高い研究に日本語で触れることができることが大きい。小川の研究は、イギリスの議会文書という行政関連の基本的な史料、イギリスの医学書や医学雑誌といった医学史の基本的な史料はもちろん、イギリスとドイツのさまざまな文書館などの史料へのリサーチを含み、水準が高い研究が使うべき史料の範例を提示している。ことに、本書第六章「コレラとスエズ運河」と第七章「病原菌と帝国」は、エジプトのコレラ流行をめぐる国際的な対立と葛藤を描いている優れた章であるが、この章の基盤となったのは、著者の小川がイギリスの議会文書から初めて発見した史料である。この新発見の史料を詳細・着実に分析して、エジプトのコレラに関するイギリスの解釈が、どのような影響をイギリスと世界に与えたかを明らかにすることができた。イギリスに関する新資料の発見と新しい解釈の提示という歴史学の一つの範例を、英語だけでなく日本語でも読むことができる世界を本書は示している。ことに、英語の研究文献を読み進めるのがまだ難しい学部生へのアサインメントとして非常に優れている。

付言すると、このエジプトのコレラは、世界的な流行のうち5番目の流行と呼ばれているものである。イギリス、フランス、アメリカの本国にとっては大きな流行ではなかったが、ロシア、日本、イタリアといった国家はもちろん、細菌学の先進国であったドイツですら、いまだにコレラが大被害を出していた。ロシアや日本ではコレラは半ば常在化して、それぞれ数十万人の死者が出ていた。1884年にイタリアのナポリを襲ったコレラ

は7,000人の死者を、1892年のドイツのハンブルクのコレラの流行では約8,000人の死者を出している。この時期に、日本では北里柴三郎が、ドイツでは本書でも触れられているパッテンコーファーらが、それぞれ興味深い実験をしており、小川の書物や論文は、5番目の流行を契機とした細菌学と公衆衛生の国際比較研究の重要な布石になるだろう。

また、もう一つの長所として、第四章「病原菌理論の時代」のような、現代の思想と運動と連結させた科学史の分析を示したことが掲げられる。第四章は、進化論という生物学的な議論と、イギリスでは1876年に法律化された動物の生体解剖反対という倫理的な立場が、どのように19世紀の病原体研究に関与したかを分析したものである。進化論と動物の権利の問題は、小川自身が「終章」で示唆するように、現在においても根本的な問題の一つであり、19世紀を現在とつなぐ可能性を鮮やかに示した章となっている。

一方で、書物全体が日本の学術の世界に向けて書かれていることは、この書物においては、短所として目立つ結果になってしまっている。もちろん、日本の学者や学術的な書物の読者の集団においては、19世紀イギリスの公衆衛生、衛生学、細菌学の歴史の研究の最新の状況にある程度把握している研究者がごく少ないことは事実であるし、日本の読者に日本語で書く場合には、そのような配慮をするべきである。しかし、イギリスの医学史における衛生研究について一定の知識を持っている研究者からすると、本書の記述には違和感を持つことが多い。たとえば、冒頭の序章で、この書物が解こうとしている歴史記述的な問題を指摘する場面で、「医学史の一般史に対するコミットの欠落、イギリス19世紀後半の医学史の空白」(6ページ)という時に、それは日本で行われているイギリスに関する医学史における欠落であり空白であるだろうという意識を評者は強く持つ。イギリスにおいては、過去30年ほどの期間にわたって、巨大な規模の研究助成と、歴史の世界の最先端を走る史料の利用性を背景にして、そしてフーコー、ラトウール、新左翼、フェミニズム、歴史人口学など、当時の多様な思想的・方法的なイノヴェーションを用いて、医学史研究は劇的に進歩した。¹ その状況において、一般史と接続していないだとか、19世紀後半が研究されていないという指摘は、イギリスの現状にはまったく

合っていないし、また、日本の医学史研究も、全体として言えば同じ方向に向かって、状況はかなり改善している。²また、医学史研究でイギリスの微生物学が研究されていないという指摘も、どの地域で何が問題だと批判しようとしているのか混乱している。その論拠の一つとして挙げられているポール・ド・クライフ『微生物の狩人』の12本の章が取り上げている人物は、ドイツ3人、フランス3人、イギリス2人、アメリカ2人、イタリア2人、オランダ1人であり、あえて取り上げるほどイギリスが少ないとは評者は思わない。

小川の手書が示していることは、一つはイギリス向けのゲームをすることの成功であり、もう一つは、それを含めた成果を日本にむけて発信するゲームの難しさである。イギリスに関する主題の成果を、イギリスの学界で通用する水準や仕方ですに問うことは、小川自身を含めた多くの研究者が示すように、成功例が積み上げられている。この方向の進展は、日本のイギリス関係の学会が継続して重視するべきであろう。それと同時に、そのような成果を、どうやって日本に根付かせるのかという問題が、まだ応えられていない。人文社会科学は、それぞれのローカルな地域に根付いてこそ現代世界で意味がある中で、どのようにイギリス仕込みの学問を日本語で発信するのか。この雑誌の読者の多くが経験しており、それを解こうとしている問題であるだろう。その中で、小川の手書は、研究者たちに一つの里程碑を与える業績になり、同時に、そこからどのように進めばいいのかを議論するときの重要な素材になるだろう。

注

- 1 ことに、日本の研究者向けにいうと、ウェブ上でオリジナルの史料を検索し通読することができるシステムは、大きな意味を持っている。たとえば、ロンドンのウェルカム図書館は、医療と疾病関連のさまざまな史料や画像を公開し、19世紀から20世紀のロンドンの医療衛生官 Medical Officer of Health の全報告や、19世紀のいくつかの精神病院の史料、ことにすべての症例誌の画像閲覧、あるいは19世紀の性や調理などに関する手書の閲覧など、数多くの史料を利用できるようにしている。<http://wellcomelibrary.org/collections/>

- 2 拙稿「医学史の過去・現在・未来」『科学史研究』no.269, 2014: 27-35.

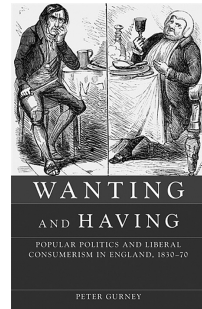
——慶應義塾大学教授

書 評

Peter Gurney, *Wanting and Having:
Popular Politics and Liberal Consumerism
in England, 1830-70*

(Manchester: Manchester University Press, 2015)

眞嶋 史叙



ピーター・ガーニー著『欠乏と充足——イギリスにおける民衆政治運動と自由主義消費者運動——1830年～1870年』（原題：*Wanting and Having: Popular Politics and Liberal Consumerism in England, 1830-70*）は、19世紀中葉に大きな盛り上がりを見せた民衆政治運動（＝チャーチスト運動）と自由主義消費者運動（＝反穀物法同盟）の対立と共通点を明らかにして、近代的な消費者像がいかにつくりだされ、政治的に利用されてきたかを論じた本である。エセックス大学でイギリス社会史を講じるガーニーは1996年に『イギリスにおける協同組合文化と消費者政治運動——1870年～1930年』（原題：*Co-operative Culture and the Politics of Consumption in England, 1870-1930*）を刊行している。本書はその前段階の時代を扱っており、消費者協同組合運動へ関心が2冊に通底している。本書では、協同組合運動やオーウェン主義者の活動に触れつつ、広くチャーチスト運動と反穀物法同盟の両端、また根源的には新救貧法を巡る論争へと行きつ戻りつしながら、ディケンズやグラッドストンの言説も含め、19世紀イギリスにおける広範な思想の広がりを射程に入れて、それぞれの異なる政治的立場のなかで、消費者の扱われ方にいかなる違いがあったかを検討をしている。かつて「労働」の言葉が、19世紀の社会変革を論じる上で重要な概念であったが、いまや「消費」の言葉がその役割を担う時代になった。19世紀の労働運動にまつわる思想を消費者の観点から読み直すことが本書の目的であるといえる。

本書は8章立てになっている。それに前書きとエピローグがつく。第1章は、1846年7月の穀物法廃止が宣言された場面から始まる。マンチェス

ター公会堂の500人を超える聴衆を前に、反穀物法同盟のリチャード・コブデンは穀物法廃止の歴史的意義を唱え、ジョン・ブライトは「新秩序の始まりだ」と訴えた。この自由市場主義的な「新秩序の始まり」が、第1章のタイトルとなっている。この動きに対抗したチャーチストらは、市場の法則に基づく自由貿易ユートピア的な秩序を受入れず、政府やコミュニティにより保護される「真の政治経済」あるいは「モラル・エコノミー」を求めたが、商品の自由な取引自体に反対だったわけではない。本書では、18世紀に消費者として浮上した中産階級に続き、19世紀労働者階級の政治的アイデンティティと混交させながら新たな消費者像を浮かび上がらせていく。第1章では、本書の構成と全8章の概略を示し、研究対象として第一回選挙法改正から第二回選挙法改正までの期間を扱うことを明らかにする。選挙権の拡大が模索されるなかで「消費者」がいかに重要になっていったか——「消費者としての市民」(citizen consumer)が浮かび上がってくる。

第2章は、1842年から1843年にかけての不作の冬に発せられた「パンがないのならばジャガイモに喜びを感じればよい」というオクスフォード大学教授の言葉にはじまる。この教授は保護貿易推進派であった。「ジャガイモに喜びを感じる」という言葉は1843年2月発行の反穀物法同盟の新聞 *The Struggle* にこの大学教授を揶揄した風刺画のタイトルとして登場する。1842年のゼネスト(点火栓抜き暴動)を皮切りに、チャーチストのみならず、反穀物法同盟も「飢えた労働者」のイメージを多用し始めた。政治的な解決を模索したチャーチストとは違い、自由貿易で商品が自由に流通するようになれば、消費者としての労働者も恩恵を受けるだろうと主張する。しかし、このように「モラル」と「経済」との間に線引きをすることは、「貧民」を自己アイデンティティとするチャーチストには受入れられないものであった。

第3章では、1834年の新救貧法の成立へと戻り、いかにしてこの法が人間として最低限の生活の保障を切り崩し、政治的アイデンティティとしての「貧民」をつくり出したかに迫る。章タイトル「アンドーヴァー救貧院の共食い」は、骨粉肥料を製造していた救貧院に収容されていた貧民が、材料の骨を奪い合っただけでかじっていたという事件に由来する。新救貧法

のもと、救貧法委員会を中央官庁として救貧行政が行われるようになったが、その事務局のエドウィン・チャドウィックは、「最下級の労働者以下の待遇」を示す院内救済の食事内容6案を考案する。〔私の計算によれば、全国各地の状況に対応すべく考案された6案の間には一日1600kcalから2200kcalまで開きがある。〕事件が発覚したアンドーヴァー救貧院は公式には最上位の案を採用していたのも関わらず、傲慢な看守が適正な配給を行っていなかった。このスキャンダルは衝撃的であったものの、発覚した1845年にはチャーチスト運動の新聞 *Northern Star* などあまり注目しなくなっていた。追い込まれた貧民の野蛮性と慈悲の必要性を訴えるような運動から、貧しい消費者による自主的なガヴァナンスあるいは「真の民主主義」を求める運動へと進化していたからである。

第4章は「民主主義の大義のために」と題するが、この言葉は暴動派チャーチストのサミュエル・ホルベリーの葬式で5万人の参列者を前に埋葬された真鍮板に彫られた文字であった。民主主義がいかにも広く暴動派、急進派、理性派までもを束ねる概念として利用されるようになっていったか。特に際立つのは、一方で反穀物法同盟があまりにも非民主的で、少数の指導者の独断で運動が進められていたという点である。チャーチスト運動の指導者らが掲げる民主主義の信念は、ディケンズや諷刺画家ジョージ・クルックシャンクに揶揄され、あるいはコブデンら中産階級の政治指導者に懐疑的に捉えられようとも、全ヨーロッパ的な革命運動の広がりにも勇気づけられ、強固に深化していった。1848年にチャーチスト運動が瓦解したあと、その大半が民主主義の代わりに消費者主義を掲げた自由主義運動にすんなりと吸収されたと解釈するのは誤りであるとガーニーは主張する。

第5章では、チャーチスト運動のなかで、早い段階から独自の急進的な消費者運動が拡大していった経緯を叙述している。実践的な戦略として用いられたのが、「排他的取引」(exclusive dealing)である。生産者の実践的な「安息月(=ゼネスト)」戦略と対になるものであった。民主主義の大義を支持する商店以外をボイコットしていくという「排他的取引」が運動全体のなかで占める位置を確認することは、消費者運動としてチャーチズムを読み直す作業のなかで重要である。その意味で第5章は本書の中核を

なす章である。排他的取引は1820年代にアイルランドの宗教対立で戦略的に用いられたが、その後イングランドにももちこまれて、1838年にはチャーチスト指導者ファergus・オコナーが演説で戦略の有用性を説いている。その後自分たちで協同組合方式の商店を運営するという戦略へと移っていく。1844年のロッチデール先駆者協同組合店舗の設立は、社会変革運動のなかで政治的なものと経済的なものを区別することに繋がり、その後チャーチスト運動の脱政治化を進めたとして批判を受けたが、競争を排除して経済的な民主化を進めるという戦略的な期待を、チャーチストらの間に扇動することに繋がった意味は大きかったとガーニーは考える。

第6章は、ヴィクトリア朝における消費者像の変容の具体例として、ディケンズ小説をもちい、オリヴァー・ツイストが「もう少しください」とお粥 (Gruel) を請う場面からはじまる。新救貧法制度への鋭い批判を繰り出し、通常、人道主義的、社会主義的と思われたディケンズの貧困へのまなざしは、その後変化する。『クリスマスキャロル』や『チャイム』などのクリスマス本は、*Northern Star* 紙に「貧困の詩人」として絶賛されるが、ガーニーが問題視するのはそこに描かれる自由貿易主義的な豊穡のユートピアとしてのクリスマス像である。『チャイム』はディケンズ小説のなかで最も政治的プロパガンダに接近した作品だという。その後、鉄道ブームの最中に出版された『ドンビー父子』など自由市場主義のもつ倫理的問題点に踏み込んだ作品もあるが、中産階級の読者は主にディケンズの自由主義的な人道的センチメンタリズムの側面にのみ、表面的に共感していたとみるべきであろう。

第7章では、中産階級の消費者がいかにして自由貿易主義の思想を受入れていったか、具体的には反穀物法同盟が1845年にコヴェント・ガーデンで開催した全国物産展 (National Anti-Corn Law League Bazaar) を例に挙げて検討している。この物産展では、全国46都市とロンドン12地区の商品をブースで販売し、17日間の開催期間中に17万人の買い物客を呼び込んで、入場料やグッズ販売 (反穀物法同盟ロゴ入りハンカチなど) から2万5千ポンドの収益を上げた。同盟の資金集めの方法として有用だっただけでなく、自由貿易主義のもたらす豊穡な未来像の一端を垣間見せることで、選挙権のない女性たちを消費者として動かし、中産階級の購買力を政

治的な力に転換させるのに効果があった。それが本書冒頭の1846年の穀物法廃止へと繋がった。1851年の万国博覧会がこの路線での自由貿易主義の人気拡大に貢献したことはいうまでもない。

最終章である第8章は、1862年から1863年にかけて発生した「綿花飢饉」(Cotton Famine)に言及して、労働者階級の消費者像を浮き彫りにする。1859年時点で40万人もの労働者を雇っていたランカシャー綿業地帯が、過剰生産とアメリカ南北戦争による綿花不足が影響して、深刻な恐慌に見舞われた。問題はこの恐慌に対する緊急支援のあり方である。1840年代のアイルランドの大飢饉の際にも緊急支援で20万ポンドが集められたが、ランカシャーの綿花飢饉は合計でその10倍の200万ポンドもの支援金を集めることに成功している。数年前に200万人もの餓死者を出したインドの飢饉ではなく、一人も餓死者がでていないランカシャーの飢饉にこれだけの支援が集まったのは、綿業の繁栄で中産階級に匹敵する生活水準に迫りつつあった労働者家庭が、急に家具や衣類を売り払わなければならないほどの一文無しになってしまったからであった。終盤に暴動も発生したが、支援物資配給所から略奪をする程度にとどまり、制御不能になった市場主義を非難する政治運動へ拡大していくことはなかった。

以上、ガーニーは本書を通じて、いかにヴィクトリア朝のイギリスにおいて近代的な消費者像が生み出されてきたかを論じているが、その分析対象が消費者の消費行動そのものではなく、かつて労働運動の物語として語られてきた政治行動と、それを叙述し宣伝した新聞や批評文、諷刺画にあるところが、読者の期待を超えて興味深い。本書には随所に合計20もの、新聞挿絵や諷刺画が挿入されていて、消費者像を理解するのに役立つ。19世紀の消費を考える上で、メディアとマーケティング、消費の諷刺と礼賛が果たした役割が大きかったことは言うまでもない。

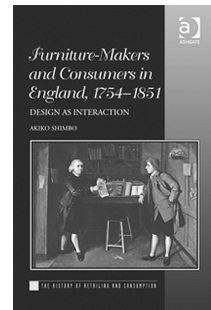
——学習院大学教授

書 評

Akiko Shimbo, *Furniture-Makers and Consumers in England, 1754-1851: Design as Interaction*

(Farnham, Surrey: Ashgate Publishing, 2015)

土方 史織



いつのまにか歴史学のメインストリームになった「消費する側の歴史」。経営史的観点、ミクロ・マクロ両方の経済史的観点、都市史的観点、家族史的観点、女性史的観点などから消費経済の実態、消費行動、消費の意味などの研究が蓄積されている。まとめて「消費文化史」と呼ぶことに説明の必要はないだろう。本書はこの「消費文化」に家具製造というキーワードから迫るものである。

題名と副題が示すように、本書は18世紀後半から19世紀半ばのイングランドにおける家具メーカーおよび小売業者と、消費者との相互的な関係を論じる。産業革命が進行する18世紀後半、綿工業を中心に工業化が進む中、家具製造の世界では未だ職人の手作業による注文製作が健在であった。家具のデザインはデザイン図鑑のようなパターンブックを元に決められ、注文客の要望を踏まえつつ職人が製作した。いわゆる「あつらえもの」(bespoke furniture) なため、家具メーカー (craftspeople)、仲介業者 (retailers)、注文主 (customers)、家具 (objects) の間には、相互作用 (interactions) が生まれる。

本書は家具を取り巻く人々の力関係(ダイナミズム)ではなく、複雑で重層的な関係性、パターンブックを中心とする職人同士の情報ネットワーク、ショールームでの家具メーカーと消費者のコミュニケーションの取り方、家具のアフターケアにおける注文主と家具メーカーの関係などを描くものである。著者は「コミュニケーション」(communication)、「対話」(dialogue)、「議論」(discussion)、「交換」(exchange)、「関係」(relationship)、「交渉」(negotiation)、「参加」(participation)などの語句を用いながら幾度

もこの点を強調する。著者のそもそもの問題関心に歴史家R. サミュエルが提起した「なぜイングランドでは19世紀後半になっても職人的手仕事(craft)が残ることができたのか」がある。著者はその理由として「作り手側」(production)と「使い手側」(consumption)の双方が対話と交渉を重ねていたからだ、と述べる。対話から生まれる信頼関係は結果的に機械ではなく手仕事を生き残らせることに繋がるのではないかと著者は家具製造での対話と交渉の重要性を強調するのである。

以下に本論にあたる章の要旨を示していきたい。

第2章 ‘Furniture Design: Sharing Knowledge among Craftspeople’ではまずパターンブック82冊を史料論として包括的に論じ、それが果たした役割を明らかにしている。図版の多いパターンブックは、これまで主に視覚史料として利用されてきた。しかし著者は序文や解説文の重要性を強調する。序文や解説文からはパターンブックの著者たちの業界全体の発展向上に向けた知識共有の意図が感じられるという。パターンブックの著者はデザインを一方的に伝えるだけでなく、示されたデザインを元に受注者と発注者が対話と交渉を重ねる中で、互いの見識を深めることを期待していた。デザインを柔軟に変化させ、応用することが推奨されただけでなく、結果のフィードバックも求められていた。著者はそこから生まれるデザインはパターンブックを媒介とした「共同作業」(collaborative work)であったと分析する。東京五輪2020のロゴ騒動にみられるように、現代的なデザイン理解の前提には「オリジナル」か「コピー」かの二分法がある。当時の家具デザインはそれとは異なる価値観に基づいていたものだと言えるだろう。

続く第3章 ‘Pattern Books: Communicating between Producers and Consumers’ではパターンブックが職人以外にも読まれたことに着目し、「読書の歴史」の理論を応用して読者層分析をおこなっている。その際、読者を「想定された」(intended)、「購入可能な」(possible)、「実際の」(real)に分類する。題名や序文に示された「想定された」読者は地方に住む職人や初学者であった。一方価格やサイズを踏まえた場合、「大判装飾多め」なものと「ポケットサイズで安価」なものでは「購入可能な」読者層は異なっただけだとまとめている。最後に定期購読者リストから「実際の」読者の

社会階級や職業、居住地などを明らかにする。なかには Sir や Esq. の称号をもつ人物もあり、ほとんどは男性だが女性も名を連ねていた。リストは「顧客になり得る」(prospective client) 読者の存在も示しているのである。柔軟なデザイン選択の余地を残すパターンブックは注文主の要求に合わせやすい。現在の我々のように、商品カタログのようにパターンブックを眺め、家具デザインのイメージを高めていた読者が想起される。

第4章 ‘Forming Taste and Style: Consumers’ Needs and Participation’ ではデザイン決定のプロセスを紹介している。史料には女性注文主も登場し、彼女たちが要求する「心地よさ」と「使い勝手の良さ」を職人が尊重し、ときに互いに「妥協」しながらデザインが決められていった事例は興味深い。まず注文主であるレディ・ナッチブルと家具職人チッペンデルとの攻防。次に女性注文主を意識し過ぎて便利なのか疑問になる家具職人シェラトンによってデザインされた女性向け多機能家具。あるいは家具職人と女性注文主の手紙での交渉は価格やサイズ、デザインと多岐に及び、女性が決定権をもつ場合もあった。価格やサイズも含めたデザイン決定の決め手になったのは「テイスト」である。「テイスト」は単なる個人的好みではなく、注文主が属する社会階層で「容認」されるものであった。ゆえに注文主たちの「口コミ」は情報取得の意味でも「テイスト」の「容認」基準を判定する上でも重要で、似たような階層に属する人々は似たようなデザインを注文する傾向にあったという。職人も注文主の要求がその階層に「ふさわしい」(appropriate) デザインかを意識し、「適した」(suitable) ものを提供した。「ふさわしさ」の根拠は希薄で「テイスト」は流動的なため、パターンブックはそれにも対応しなければならなかった。職人と注文主、「テイスト」の間の緊張関係は、対話と交渉でデザインが成立していたことを明らかにしている。

第5章 ‘The Showroom as Mediator’ では家具販売に特化したショールームが注文客と職人、家具の物理的接点になり得たことを論じている。まず家具メーカーはトレードカード(業務紹介広告)を配り、ショールームには魅力的な家具があることをアピールする。ショールームでは実物が置かれ、即売もおこなった。幅広い品を取りそろえ、ときにはカーペットや壁紙、他のインテリアも扱った。室内のトータルコーディネートが展示され、客

は実物に触れ「心地よさ」を実感し、家具メーカーと交渉をはじめた。その状況は想像しやすいだろう。しかし実態はどうだったか。著者はギロウ・ロンドン・ショールームの会計簿から顧客の名前や住所、注文品、価格などを明らかにする。顧客はロンドンに住むジェントルマンが多いが、レディや地方在住者も含まれていた。商品のレンタルもおこない、家具だけでなくインテリア全体の設営まで手がけた。ジェントルマンの社交生活はなにかと物入りだ。資金不足や一時的に必要なだけの場合にも、ショールームはよき相談場所として機能したのであろう。

第6章 ‘Furniture Repairs and Services: Building a Clientele’ では家具メーカーのアフターケア（修理や「お直し」）も含めた幅広いサービスについて論じている。それは室内装飾全般、家具の評価、改築、引っ越し、住宅貸し出し、また遺産目録の作成や葬儀業まで多岐に及んでいた。家具製作に比べてサービス事業からの利益は多くない。しかし家具を納入した後でも細かなサービスを提供することで顧客との関係を維持しようとする。家具メーカーは顧客の私生活に深く関わり、なんでも相談できる信頼関係を構築していた。ときには苦情に対処したり、古いものを化粧直しして使うことを勧めたりと顧客との関係がずっと続くように仕向けていくのだ。

第7章 ‘Taste, State and the Market: Changing Relations between Producers and Consumers’ では、それまでの対話や交渉を通した「作り手」と「使い手」との関係が薄れていく過程を論じている。重要なのは「テイスト」理解の変化と専門職としてのデザイナーの誕生である。1830年代ごろから、政府内ではイングランドの「テイスト」はフランスに劣っているからデザイン教育を制度化すべきという議論が起こる。それまで「テイスト」自体の優劣が論じられることはなかった。職人と注文主に合意形成があれば良かったからだ。しかし国際競争に勝たねばならないという議論が持ち込まれ、「テイスト」は向上すべき存在となった。製作過程でデザインは専門化し、注文客との交渉の余地は減っていった。顔の見える関係は次第に薄れていき、既製品が多く出回るようになった。とはいえ1850年代になっても「品質」と「職人技」を売りにする家具メーカーは「老舗」として生き延びる。たとえデザインがパターブックを介した共同制作ではなくデザイン学校を卒業した専門家によるものとなり、消費者がショールームに足繁く通う注

文主ではなくなったとしても、家具製作における相互作用の伝統は引き継がれていったと著者は論じる。

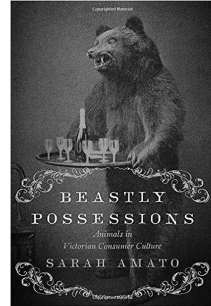
以上、本書は家具を中心に広範な分野から詳細な事例報告を積み重ね18世紀後半から19世紀半ばまでのイングランド消費文化を明らかにしている。個別の事例研究ではありながら文脈の捉え方で他分野との結節点にもなり得ている。例えば家具メーカー史料が女性消費者の動向を示し得る点は女性史研究者の関心を寄せるだろう。また歴史学の問題関心に「長い18世紀論」がある。著者は結論で若干言及し、家具メーカーと注文主との濃密な関係から発生する柔軟性や融通性を18世紀イングランド社会の複合性や多様性という枠組みに繋げている。どこまでも誠実に問いに対処する著者である。

——駒澤大学非常勤講師

書 評

Sarah Amato, *Beastly Possessions: Animals in Victorian Consumer Culture*

(Toronto: University of Toronto Press, 2015)



伊東 剛史

イギリスの動物史 (animal history)、あるいは人と動物の関係史にとって、今や古典と見なされるようになったキース・トマス『人間と自然界』(1983年)とハリエット・リトヴォ『階級としての動物』(1989年)が出版されてから約30年が経った。この間に研究は着実に進展し、とくに近年は新たな研究成果が相次いで発表されている。本書は、こうした動物史研究の活性化を反映した作品である。

著者のSarah Amatoは、ヴィクトリア期の動物を消費社会における商品と捉え、ミドルクラスの日常生活やライフサイクルにとっての動物の意味を探求する。ヴィクトリア期には、ペットを飼うこと、動物園に通うこと、自宅に剥製を飾ることが消費の様式となり、動物に関わる消費行動が社会的地位を表わすようになった。その過程には、人間と動物、文明と野蛮、男性と女性とを差別化し、序列化したヴィクトリア期のイデオロギーが反映されている。このことを定期刊行物などの多様なメディアを史料として考察するのが、本書の主旨である。

本書は従来の研究にはない、包括的で一貫した分析の枠組みを提示する。例えば、トマスやリトヴォ、あるいはヒルダ・キーン(『動物の権利』[1998]の著者)は、人間が動物と正面から対峙する歴史を描いてきた。それは、産業革命期を通して動物を支配する力を得た人間が、19世紀には動物保護の理念を発展させ、それを実現すべく社会運動を展開したというストーリーを前提としている。それに対して本書は、消費文化というヴィクトリア期の社会全体を覆う大きな参照枠を用意することで、人間と動物とを媒介するいくつかの経路を辿りつつ、人間社会の広範な領域に動物を

再定位しようとする。動物保護を目指した特定の活動家ではなく、何気なく動物と接した不特定多数の消費者が本書の主人公なのである。

第1章は、ペットを扱う。一口にペットと言っても、ヴィクトリア期にペットにされた動物は、犬猫だけでなく、ロバ、ヤギ、ニワトリ、カナリア、ハトからマウスやラット、モルモットまで多岐にわたる。従来の研究は、室内飼いのペットが家族的愛情の対象になったと指摘してきたが、本書は繁殖、愛玩、食用などの用途や目的による種類の区別は、それほど明確ではなかったと指摘する。たしかにこの指摘は正しいが、本書はウマやヒツジなどの家畜(経済動物)を議論から除外し、イヌやウサギの実験動物としての側面には言及しない。そのため本書が選んだ動物とその用途について、著者の選択基準に多少の疑問が残る。一方、ペットの馴致は飼主の徳性を示すという考え方が定着し、ペット訓練に必要なモノ(鳥籠、首輪、口輪など)が商品として流通したという議論には、十分な説得力がある。動物愛好家がクラブを作り、品評会を繰り広げたことは、ペットが消費社会とアソシエーション文化の結節点になったことの証左である。

第2章は、ペット飼育とジェンダーの関係を分析する。具体的には、いわゆる男女の分離領域(*separate spheres*)などのヴィクトリア期のジェンダー規範、とくに女性参政権をめぐる論争との関係が考察される。たとえば、猫には貞節と性的放縦、従属性と独立心、無垢と強欲との両極端の属性が与えられたが、この両義性は女性に対して抱かれたものと同じだった。したがって、女性の愛猫家は猫のリスpekタビリティだけでなく、飼主たる自分自身のリスpekタビリティを確立しなければならなかったと著者は説く。一方、忠誠心やヒロイズムの属性を付与された犬は、伝統的なマスキュリニティの表象だったため、女性が男性の支配するブリーダーの世界に進出することには、参政権と同様にジェンダーの壁が立ちはだかったという。

第3章は、ロンドンの一大行楽地だったロンドン動物園へと議論が移行する。この章で強調されるのは、動物だけでなく見物客もまた動物園の展示物だったという点である。つまり、ロンドン動物園は帝国から収集された動物を馴致する場であると同時に、人びとを社会秩序に組み込む場でもあった。とはいえ、馴致・規律の場としての動物園は、その通り機能

したわけではない。動物は常に人間の意図通りに行動するわけではなかったし、人間の側も動物を挑発し危険を招くことがあった。そして、檻に閉じ込められた動物と園内を闊歩する人間とのコントラストは、やがて人間もまた動物園展示の一部だという省察をもたらした。このことを著者は、ガーネット『動物園に入った男』(1924年)をもとに分析する。この作品が出版された頃には、動物園という語に人間の(無秩序な)集合という意味が加わっていた。

第4章は、1884年にロンドン動物園で展示された白象に焦点をあて、ホワイトネスをめぐる言説を分析する。タイで崇められると伝えられた白象は、白人の人種としての優位性を示す動物と考えられ、多くの関心を集めた。しかし、実際の白象は「白い」とは言いがたく、見物客やメディアに失望をもたらした。白象は、まさにこの言葉の比喩の意味である「無用の長物」として展示されたのである。ここで著者は、この頃現れた石鹸の宣伝広告に目を向ける。象の体を石鹸で洗ってみると、洗った場所が白くなったという広告がある。黒人の子供を石鹸で洗うと肌が白人のように白くなったという広告がある。こうした広告からは、ホワイトネスは劣化しかねないもの、それゆえ(石鹸で洗うという)維持の努力が必要だという不安が読み取られるという。

結論を兼ねる第5章は、剥製というテーマに沿って議論を展開しつつ、本書の内容を総括している。著者によれば、ベンサムが説いた自己標本(オート・アイコン)の有用性は、身体の不可侵性を信じる同時代人には受け入れ難かったが、魂の存在が疑わしい動物の場合は、剥製にすることが心理的抵抗を生むことは少なかった。剥製となった飼猫は死後も飼主の寵愛を受け続け、仔象から作られた椅子や、サルの燭台はインテリアを異国情緒豊かに飾った。博物館では、動物の剥製は当時流行したジオラマ展示に不可欠の存在だった。剥製は動物の擬人化表現を広める一方、文脈に応じて意味や価値が付与されるモノだったのである。こうして動物の剥製は、帝国、階級、ジェンダー、消費文化によって彩られたヴィクトリア期の世界観を照射した。本書に収められた現存する剥製の写真は、その生々しい物質性を読者の眼前に蘇らせ、人と動物とモノの境界はどこにあるのかと問いかける。

本書の優れた点は、ヴィクトリア期の文化を理解するうえで要となるテーマ——階級、ジェンダー、人種、帝国、マテリアル・カルチャー——を消費文化という大きく広げられた傘の下に配置し、分析ツールとしてバランス良く活用するところである。その特徴は、やや概観的な1章から3章よりも、白象という具体例を掘り下げた4章に現れている。動物の剥製を分析するヒントをベンサムの自己標本に求めた5章の行論も、果たして標本 (specimen) と剥製 (taxidermy) とをイコールで結んで良いのかという疑問を残すが、刺激的な魅力があった。方法論という面では、1章冒頭でペットに纏わる小話を並列した手法が印象深い。そこでは文学(虚構)と歴史(事実)との曖昧な境界を逆手にとって、人と動物とのインターアクションをリアルに再現しようとする著者の目論見が明かされる。人のようにには史料を残すことのない動物のエージェンシーをどう捉えるかという課題に対し、本書は想像力を介した書き手と読み手との協働関係を築くことで、活路を見出そうとする。

しかし、この手法は解釈と叙述を混乱させることがある。たとえば、白象をモデルにした石鹸広告の分析において、筆者は広告制作の事実、広告製作者の意図、消費者の広告への反応、そして自分自身の広告の解釈を、ほとんど同列に扱っている。このような一元的な史料の読み方は、ロンドン動物園の建築様式の解釈にも見られる。著者によれば、ロンドン動物園の動物舎は、後発のベルリン動物園やアムステルダム動物園とは異なり、異国情緒よりも住居という要素が強調され、馴致や序列化というロンドン動物園の意義を示したという。しかし、実際にロンドン動物園の成立過程に関する史料を丹念に調査すれば、そうした建築様式になったのは、動物や人間の教化という意図からではなく、敷地貸与に関わった大蔵省との交渉の積み重ねの結果だったことがわかる。また、メディアの反応や、個人的な動物園体験記を調べれば、風景式庭園の文法から逸脱して多彩な要素を取り込んだ動物園は、同時代の見物客にとって十分エキゾチックな空間を提供したこともわかる。

以上のように、本書には史料の実証的分析よりも、恣意的解釈が優先される箇所がいくつか見られたが、全体としては、汎用性の高い社会理論を動物史に応用した成功例と言えるだろう。文章は平易で読みやすく、やや

冗長に感じられる部分はあったものの、個々のエピソードの面白さに読者を引き込む筆力があつた。動物史の格好の導入書として、評者は早速本書を当該講義のリーディングリストに加えた。関連テーマに興味のある研究者や大学院生だけでなく、意欲的な学部生にも勧めたい本である。

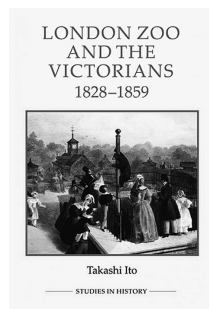
——東京外国語大学准教授

書 評

Takashi Ito, *London Zoo and the Victorians* 1828-1859

(Martlesham: The Boydell Press, 2014)

岩間 俊彦



本書は、伊東剛史氏(以下、著者)が、ロンドン大学に提出した博士論文を基礎としている。すでに、ロンドン大学歴史研究所のHPの歴史書に関する書評(*Reviews in History*)や、英語圏の『歴史』『ヴィクトリア朝文化誌』『文化社会史』『イギリス研究誌』等々の学術雑誌に、本書の書評が掲載されたことが示すように、¹ 本書は、英語圏の学界から高い関心を得てきた。本評では、上記の状況をふまえて、書籍の特徴や内容を紹介したうえで、若干の所見を述べたい。

まず、本書は、美しいカラー装丁のもと、29点の図版(一部はカラーである)と6つの表が掲載されており、前者が魅力的かつ本文の記述と結びついて効果的な存在であることについて、特記しておきたい。目次は以下のとおりである。

- Introduction: the zoo in history
- 1 The site of animal spectacle
- 2 Collecting and displaying
- 3 The question of access
- 4 Between science and commerce
- 5 Illusionary empire
- Conclusion: the Darwinian moment
- Appendix
- Bibliography

序論において、著者は、現在の動物の権利や福利から19世紀のロンドン動物園を考察する方法や、動物園と帝国を所与の関係として把握し研究する視点について再考する。そして、19世紀のロンドン動物園について、博物館や美術館といった新たな公的領域における文化や娯楽に関する政治、商業化された社会における公的な（あるいは公開の）科学と関連する専門化や拡大、成長する都市社会における動物の意味を問うような動物史といった視点から、研究を進めることを提起する。続く1章から5章まで、目次からは想像しにくい、ほぼ編年の構成のもと、約30年間のロンドン動物園の設置・展開・背景について、上記の注目点に基づきながら記述が展開する。

1章では、ロンドン動物園の建立をめぐる論争や建設の過程について、ロンドン動物学協会の設立(1826年)から約10年間の時期について検討する。シンガポールの植民地建設に尽力したトマス・スタンフォード・ラッフルズを中心に、ロンドン動物学協会によって1828年にリージェンツ・パークで開園したロンドン動物園は、政府側や近隣者の反対や動物園への懐疑的な意見にもかかわらず、人間と動物の相互関係をあらわすような協調的なイメージを創出しつつ、科学的知見に基づく動物園の展示方針によって、運営されていた。また、同章は、同時代の絵画、日記等々の分析を通じて、ロンドン動物園における賑わいだけでなく、人間、動物、建物の調和的な空間の形成を描き、ロンドンのアメニティとしてロンドン動物園を位置づけた。

2章では、1830年代半ばにおける動物園の運営や動物の収集・展示について、アフリカからキリンを送り展示する過程について焦点をあてながら、考察する。同時代の様々な史料を相互に参照しながら、本章では、ロンドン動物園におけるキリンの展示とその表象の形成は、帝国という要因だけでなく、英国内や帝国内の関係網の形成、英国内の文化の形成、個々の創造や欲求といった要因が絡み合って成立していたことを明らかにした。

3章では、1828年から1847年のロンドン動物園に関する入場や公的な機関としての位置について、考察する。すなわち、開園当時の原則として、ロンドン動物学協会会員とそれらの家族や友人が入場できたロンドン動物園が、同時代の公的な文化として、いかに貢献し運用されたのか、といっ

た点について、本章は検討する。例えば、同時代の日記や出版物や定期刊行物を参照して、上層社会の人びとが、ロンドン動物園や他の公的機関や催しといかに関わり活用したのかといったこと、日曜開園や入場料・入場者の規定に関する文化的論争、そして、ロンドン動物園が英国博物館と共に公的文化機関として政治的領域で検討されるようになったこと等について、興味深い叙述が提供される。

4章では、ロンドン動物園をめぐる科学と商売のせめぎあいについて、1847年にロンドン動物園が一般に公開される過程に焦点をあてて、検討する。著者によれば、一般公開を前後に挟んだ約20年間のロンドン動物園史は、注目・人気や収入が下方の螺旋の流れにあった1837年から1847年の時期と、再構成と復興の1847年から1859年の時期に分けることができる。そして、一次史料分析に基づいて、ロンドン動物学協会に関する職員数や給与、動物の数や展示数、付録にある動物学協会の収入と支出、ロンドン動物園や英国博物館等の来場者数を示しながら、都市での楽しみ方が多様化し、公衆に合理的娯楽を提供する商業部門が成長する中で、ロンドン動物園は、目を引く見世物を展開する空間としてだけでなく公衆が物語る装置として、ヴォランタリな科学の理想をあらわす面と商業や娯楽を提供する面の間で揺れ動く存在であったことが、描かれる。

5章では、ロンドン動物園を通じて、幻想としての帝国があらわれる過程について、1856年におけるヒマラヤの狩猟鳥の収集と順化 (acclimatisation) の計画に関する事例研究から、考察している。科学の知見に基づいてロンドン動物学協会は、順化の試みとしてヒマラヤの狩猟鳥の収集を試みたが、現地の東インド会社との連携は十分に機能しなかった。この過程を検討しながら、著者は、帝国の建設と科学的営みが、常に相互補完的な活動としての順化を遂行する「帝國的な動物園」像について、再考する必要性がある、と主張している。

結論では、序論で示した文化に関する政治、公的な科学、動物史という視点から、明らかとなったことを整理する。文化的な領域では、ロンドン動物園の来場者が想像上のまとまりを有するとともに、彼ら彼女たちの活動が多様であったことを明らかにしたり、科学に関する専門家の世界と非専門家の世界といった二分法ではなく、公的な空間における科学の消費

や活動としてロンドン動物園を描いたり、ロンドン動物園における人間と動物の相互関係だけでなく動物園の展示が、帝国という概念のみでは理解できないことを明らかにしたりすることによって、本書の意義を示している。

本書の貢献は、第一に、一次史料に基づくロンドン動物園の事例研究の魅力を示したことである。既存の研究成果をふまえ、著者独自の問題意識から、ロンドン動物園の記録だけでなく、同時代の日記・書簡・案内書・その他の出版物を相互に参照しながら考察して描いた文化や公的空間としてのロンドン動物園史30年を対象とした本書は、史実、特に、同動物園の運営や経営に関するもの、の発掘だけでなく、動物園をめぐる文化や公的な科学に関して示唆に富む歴史記述を提供した。本書からは、既存の研究を批判的に読みながら、史料を収集し読解して、多様な証言を相互に参照したり結び付けたりしながら、意欲的に自らの見解を組み立てようとした著者の姿が、想像できる。

また、本書が、特定の用語や事象(本書では、帝国)を安易に、あるいは、無頓着な追隨者として、歴史研究の説明の要因として用いる姿勢に対して、史料分析に基づいた豊富な証言と注意深い記述を示すことによって反論している点について、評者は共感した。このような著者の姿勢や研究史批判の記述スタイルは、他の読者にとって参考となろう。

他方で、注記した書評も指摘しているように、本書において、帝国と動物園を単純に結びつけたとして批判された諸研究の評価や同時代の動物の位置づけが一面的であるという問題だけでなく、² ロンドン動物園の運営者や来場者に関する階級やジェンダーの分析の深化、ロンドンという都市の活動における動物園の位置づけ、といった点について、著者は、今後の研究で答えてゆくのだろうか。また、ロンドン動物園と同時代のイギリスの他の動物園(サリー動物学庭園、ブリストル動物園)との比較史や諸施設の関係史だけでなく、他地域・他国の動物を展示したり鑑賞したりすることは、ロンドン以外の諸都市や諸地域でいかなる展開があったのか、ということも、著者の今後の研究で明らかになることを期待したい。評者が、本評を担当する際に想起したことは、21世紀初めに訪れたスコットランドのニュー・ラナークの工場村における教室の展示であった。19世紀

の理想の工場村として知られるニュー・ラナークに再現された教室には、動物の剥製等は展示されていなかったが、キリン、ゾウ、ライオン等が描かれた絵画が展示されており、19世紀の工業労働者の子弟が、このような動物のイメージを見て教育を受けてきたことが想像できた。このようなイギリスの地方における動物のイメージや学びは、ロンドン動物園のような機関や活動といかに関わってきたのか考察することによって、本書が提起した公的空間における動物や動物園の地位に関する知見は、より豊かになるのではないだろうか。

なお、他の書評でも指摘されたことからわかるように、近年、本書の研究対象であるロンドン動物園あるいは19世紀イギリスの動物に関する研究が、「増殖」し、数多くの成果が刊行されている。³ これらの著者たちは、お互いに参照する機会がなかった、あるいは限定されていたと思われるが、今後、「動物史」の転回として、相互に見解を交換しながら発展することになろう。

以上、要約と所見を記したが、誤解や誤読が含まれていた場合はご寛恕を乞う次第である。本書は、著者の研究の重要な業績であると共に、出発点であると思われる。今後、著者による、19世紀あるいはその前後の時代を含めたイギリスにおける動物観、科学、社会文化の結社、都市空間に関する研究について待望しつつ、本評を終えたい。

注

- 1 *Reviews in History*, no. 1653, Reviewer: Andrew J. P. Flack, <http://www.history.ac.uk/reviews> (2016年10月3日確認); *History*, 100 (2015), Reviewer: Helen Cowie; *Journal of Interdisciplinary History*, 45 (2015), Reviewer: Nigel Rothfels; *Journal of Victorian Culture*, 20 (2015), Reviewer: Harriet Ritvo; *Cultural & Social History*, 12 (2015), Reviewer: John Miller; *Isis*, 106 (2015), Reviewer: J. F. M. Clark; *British Journal for the History of Science*, 49 (2016), Reviewer: Oliver Hochadel; *Journal of British Studies* 55 (2016), Reviewer: Deborah Denenholz Morse.
- 2 Flack, Rothfels, Ritvo, Miller, Clark, Hochadelの書評を参照。また、著者も原著を参照しており、本書の書評者の一人でもあるハリエット・リトヴォ、三好みゆき訳『階級としての動物——ヴィクトリア時代の英国人

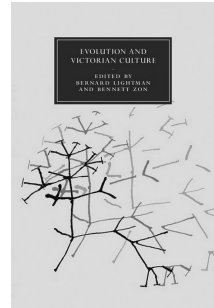
と動物たち』国文社、2001年（原著1987年）も比較参照。なお、*Reviews in History*の書評に、著者は応答している。

- 3 注1の書評は、近年の研究を取り上げている。*British Journal for the History of Science*の書評は、本書の書評者の一人の著作 Helen Cowie, *Exhibiting Animals in Nineteenth-century Britain: Empathy, Education, Entertainment* (Palgrave Macmillan, 2014)を同時に論評している。また、Sarah Amato, *Beastly Possessions: Animals in Victorian Consumer Culture* (University of Toronto Press, 2015)も出版された。

——首都大学東京教授

書 評

Bernard Lightman and Bennett Zon, eds.,
Evolution and Victorian Culture
 (Cambridge: Cambridge University Press, 2014)



藤田 祐

ヴィクトリア時代の科学を対象とした様々な業績を残している科学史研究者の Bernard Lightman と 19 世紀イギリスの音楽史を研究している Bennett Zon が編集した *Evolution and Victorian Culture* は、タイトルの通り、進化という概念とヴィクトリア時代の文化との関係を考察する論文集である。進化との関係で取り上げられているのは、小説 (第1章)、詩 (第2章)、写真 (第3章)、映画 (第4章)、美術 (第5章)、舞台芸術 (第6章)、ダンス (第7章)、音楽 (第8章)、建築 (第9章)、博覧会や博物館の展示 (第10章)、一般民衆への普及 (第11章) であり、様々な領域に渡る。序論にも書かれている通り、本書を貫くテーマは、第一に、進化論と文化との関係を一方的な影響関係ではなく相互作用として捉えるという観点であり、第二に、この数十年間にわたる進化論の歴史研究がもたらした成果を踏まえて両者の関係を考察することである。

一点目については、科学と文化が共通の場を占めたり共通性に根ざしたりすることによる相互浸透が考察されている。例えば、舞台芸術を取り上げている第6章では、舞台芸術に取り上げられる進化だけではなく、科学と舞台芸術の共通性が考察されている。例として、ダーウィン進化論を擁護した T・H・ハクスリーなどの科学者による講義が、演劇的な営みであることが示唆されている。時には一般の聴衆向けに科学実験という演出を取り入れつつ行われたからである。また、擬態などが、『種の起源』における自然史の語りにおいて、演技に準えられていることにも触れられている。自然を演出するという観点は、註でも挙げられている O'Connor の *The Earth on Show* でも考察されている通り (Ralph O'Connor, *The Earth*

on Show: Fossils and the Poetics of Popular Science, 1802-1856, Chicago: University of Chicago Press, 2007)、チャールズ・ダーウィンが自らの進化論を公表するより前に地質学で展開されたものである。このような観点は、博覧会や博物館における展示に焦点を合わせた第10章のテーマとも通底する。さらに、芸術と進化との関係に焦点を合わせた第5章では、科学者と芸術家が協働する地質学や植物学が、科学と芸術が相互作用する場とみなされている。同じような場に、第3章で取り上げられている写真や第4章で取り上げられている映画も含まれるかもしれない。さらに、第10章で分析されている自然史博物館の建設をめぐる対立も、科学と文化が相互作用する一例と捉えることができるだろう。このような観点が、本書全体を貫くテーマの一つとなっており、有益な視座だと評価できる。

本書全体を貫くもう一つのテーマは、この数十年にわたる進化学理論の歴史研究で見直された進化概念との関係で、ヴィクトリア時代の文化を考察するという視点である。ダーウィンに焦点を合わせることでダーウィン進化学理論が果たした役割を過大評価する結果となった先行研究に対して、1980年代前後からは、ヴィクトリア時代の進化論におけるダーウィン進化学理論の位置づけが再検討され、当時展開されていた多様な進化論に目が向けられることになった。その成果の一つと言える、Peter J. Bowlerによる *Non-Darwinian Revolution* が、序論を初めとしていくつかの論文で引照されている (Peter J. Bowler, *The Non-Darwinian Revolution: Reinterpreting a Historical Myth*, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1988 [ピーター・J・ボウラー『ダーウィン革命の神話』松永俊男訳 朝日新聞社 1992年])。Bowlerによれば、19世紀後半のイギリスで人々に受け入れられたのは、進歩する世界という考え方に基づく「非ダーウィンの」な進化であり、ダーウィン進化学理論の帰結である特定の方向性を持たず偶然に左右される進化ではなかった。ランダムな変異のうち特定の環境において有利な形質が選択されて次世代に受け継がれるという自然選択メカニズムは受け入れられなかったのである。さらに、高次な状態への進歩という進化概念と結びついたものとして本書で言及されているのが、低次なものから高次のものへと連なる「存在の大きな連鎖」という観念と、同じように生物の序列と結びついていた、個体の発生過程が進化の系統を辿るという反復説で

ある。このような進歩の思想に基づく進化理論がヴィクトリア時代に受容されていく過程で、本書でも触れられている James A. Secord の *Victorian Sensation* が明らかにしたように (James A. Secord, *Victorian Sensation: The Extraordinary Publication, Reception, and Secret Authorship of Vestiges of the Natural History of Creation*, Chicago: University of Chicago Press, 2000)、1844年に匿名で出版された『創造の自然史の痕跡』が大きな役割を果たしたと考えられている。また、ラマルク進化理論やダーウィン進化理論に影響を受けつつ生物界だけでなく人間社会も含めた全宇宙を貫く進化を体系化しようとしたハーバート・スペンサーは、進歩と進化を同一視する進化論を展開した代表的な人物であり、ヴィクトリア時代の文化にとって大きな存在であった。

ダーウィン進化理論に限定されないヴィクトリア時代の多様な進化理論を明らかにした歴史研究を前提にして、本書の各論文ではヴィクトリア時代の進化理論と文化との関係を考察している。この観点が最も明確に表されているのが、編者の一人である Zon が音楽を取り上げた第8章である。19世紀後半に隆盛した「非ダーウィンの」な進化論を「anti-Darwinism」と「pseudo-Darwinism」に分けた Bowler を受けて、Zon はヴィクトリア時代後期にまとめられた音楽の進化史を「a-Darwinism」と「Pick-'n'-mix Darwinism」に分けている。前者は、1850年代に最初に発表されて展開されていったスペンサーの音楽論に基づくもので、ダーウィンの進化理論に基づく音楽起源論という要素が「欠如」しているものである。音楽の起源を「情熱のほとばしる発話」と考えたスペンサーは、単純なリズムから複雑なオーケストラまで「音楽存在の大きな連鎖」に沿う音楽の進化を理論化し、前者だけでなく後者の潮流も含めた音楽の歴史記述に圧倒的な影響を及ぼした。後者に分類される音楽の歴史においても、性選択理論に基づいて音楽の起源を説明するダーウィンの理論が部分的に取り入れられているものの、人種の序列に沿って未開社会の単純なものから文明社会の複雑な音楽まで進化してきたとする進歩史観に基づく歴史記述から逃れられてはいない。このような進歩史観に基づき、音楽の進化史が生物の序列に基づく系統樹と同じように樹木のイメージによって表されることになる。第9章でも、建築の歴史が、ヨーロッパ建築を幹とする系統樹モデルで表

され、偶然に左右されるゴールなきダーウィン進化論ではなく、進歩という枠組みで語られがちであったことが示されている。

このような進歩史観に基づいて理解される文化という観点からスペンサーとともに取り上げられているのが、E・B・タイラーからJ・G・フレイザーへと至る、進化という観念と結びついた人類学の流れである。ダンスを取り上げている第7章では、スペンサーとダーウィンの進化理論でダンスに触れられている部分に加えて、ダンスと原始宗教を結びつけるタイラーとフレイザーの進化人類学を概観した後に、Edward ScottとLilly Groveによる二種類のダンス論を考察している。スペンサーの影響を受けた前者のダンス論では、人種の序列や男女の差異が前提とされ、ダンスが未開人種や女性と結びけられる場合にはネガティブな意味が付与される。ほどなくフレイザーと結婚する後者のダンス論では、タイラーを受けてヨーロッパのフォークダンスが未開の名残りだと捉えられ、ダンスの起源を「共感呪術」を発動させる未開人の動作に求める『金枝篇』の議論が引かれている。ここでも、「非ダーウィン」的な進化論に基づいて、ダンス論が展開されているのである。

これまで見てきたように、ヴィクトリア時代における進化と文化との関係を考察する際には、ダーウィン進化論だけに焦点を合わせるのではなく、「非ダーウィンの」な進化という枠組みでも考察する必要がある。このような本書の観点には説得力がある。しかしながら、このような進化概念の再解釈とともに見直されてきた社会ダーウィニズム概念については、残念なことに突っ込んだ再解釈が行われていない。序論でも、「ダーウィンの進化原理を社会に適用する」という従来の定義がスペンサーと結びつけられ、続いてスペンサーとダーウィンの違いを説明するというお決まりの展開となっている。第3章で社会ダーウィニズムの多様性に目が向けられているものの、第3章を初めとして言及の見られる論文では、大文字を用いて表記されている「社会ダーウィニズム」や「社会ダーウィニスト」がアイデンティティとまとまりをもって実在していたという印象を受ける。本書が依拠している *Non-Darwinian Revolution* において社会ダーウィニズム概念を見直そうとした、Bowlerの挑戦を受け止める必要がある。本書の各論文で取り上げられている「非ダーウィンの」な進化に対する考え方と「社

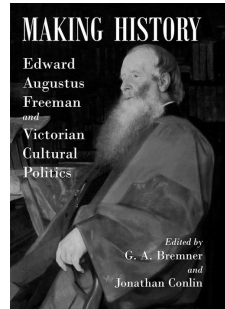
会ダーウィニズム」はどれくらい重なるのか。重なるとすれば、「社会ダーウィニズム」という呼称との齟齬はないのかという問題もある。さらに、本書で議論されている「存在の大いなる連鎖」や反復説、人種の序列や進歩の思想など、進化理論と結びつきつつも区別しうる潮流が「社会ダーウィニズム」とどのような関係にあるのかについても考察する必要がある。「社会ダーウィニズム」が学術的な分析概念としては使えないという私個人の意見は差し引いても、これらの論点も含めた社会ダーウィニズム概念の再解釈は不十分と言わざるをえない。しかしながら、人類と類人猿とをつなぐ「失われた環」の問題性、人間と動物が写真や映画でどのように類比されていたのかという問題、専門家の科学が一般民衆の科学にどのように伝播していったのかという高級文化と大衆文化の関係ともつながる論点、他にも言語と進化の関係性など、取り上げきれないほどの幅広い論点と幅広い文化ジャンルが取り上げられているという点に本書の価値がある。この点と上述した二点の特質を考えると、ヴィクトリア時代における進化と文化の関係という論点に対して意義深い示唆を与える論文集だと言える。

——釧路公立大学准教授

書 評

G. A. Bremner and Jonathan Conlin, eds., *Making History: Edward Augustus Freeman and Victorian Cultural Politics*, Proceedings of the British Academy 202 (Oxford: Oxford University Press, 2015)

舟川 一彦



タイトルに個人名を掲げた本を減多に書評対象として採り上げることがない本誌の編集委員会がこの本を選択し、それを歴史学の専門家でない私に割り当てたのは、この本の内容が様々な文脈の中に置かれて文化研究の名にふさわしい多様な方向に発展する可能性を秘めていると判断されたからだろう。しかし、任務を与えられた身としては、少々困ってしまった。書評者としての足場をどこに置くべきか見当がつかないのだ。そもそも、歴史家フリーマン (E. A. Freeman) という存在が日本の歴史研究者の間でどの程度知られているのか、知られているとすればその人物像と仕事はこれまでどのように評価されてきたのか。彼の主著『ノルマン征服史』(1867-76) は英国史研究者にとって今でも古典あるいは必読書と見なされているのだろうか。「歴史は過去の政治、政治は現在の歴史」という彼の格言風の一文は標準的引用句として定着しているのだろうか。こういうことについて、恥ずかしながら、私は判断のすべをもっていない。フリーマンについて事前にもっていたのは、19世紀中葉から後半のオクスフォードを彩る偏屈で悪口好きの奇人という表層的なイメージに過ぎなかった。

この本は、2012年7月にハーデンとマンチェスターで開催された「E・A・フリーマンの生涯と時代」をめぐる学術会議で発表された16篇の論文を収めている。したがって、通常の単著研究書と違って一貫した論旨の流れがあるわけではなく、最初に挙げた理由とも相まって、まとまりのある書評論文を書くことはなおさら難しいと言わなければならない。とはいえ、泣き言を言っても仕方がない。書評者の最低限の義務として、まずは(単調かつ冗長になることを覚悟して)各論文に何が書かれているのかを

一通り紹介することから始めてみよう。

第一論文は二人の編者 (G. A. Bremner and Jonathan Conlin) による導入的な序論で、以下に続く各論文の背景となる前提的な事実を確認することにあてられている。フリーマンの歴史記述について、客観的・科学的な歴史学を標榜しながら(現代的規準からすれば)到底科学の規準に合致しない部分があることが指摘されるほか、少年期と学生時代に受けた様々な——特にトラクト運動やトマス・アーノルドの——影響や彼の歴史観の基礎をなす進化論的「発達」の概念と人種観の概略が紹介される。

続いて、第二部として彼の歴史研究に反映する宗教・政治的信条を扱った3篇の論文が置かれる。James Kirbyは、フリーマンがトリニティ・カレッジ在学時に受けたトラクト運動なかんづくハレル・フルードからの影響を論じる。フリーマン成熟期のリベラルな民主政治志向の立場を若い頃のトーリー／高教会主義からの路線変更の結果と見なす従来の定説に反して、フルードから学んだ政治観(特に反エラストゥス主義の信条)こそが彼の後年のグラッドストンのリベラリズムを基礎づけており、彼の立場は基本的に一貫しているのだと結論する。次のColm Ó Siochrúの論文もまた、フリーマンの宗教・政治的立場が終生一貫していることを、ローマに象徴される帝国と教皇権の理念との対峙というモチーフに着目しつつ論証しようとする。Michael Ledger-Lomasの論文は、世襲のホイッグであり国家と教会の一体性を主張して国教制度を擁護するA・P・スタンリーとの比較を通して、国教会についてのフリーマンの態度を明らかにするという触れ込みのようだが、論文の大部分がスタンリーの立場を解説することにあてられている上に、論者のシンパシーも明らかにスタンリーの側にあり、フリーマンが主役であるはずのこの論文集の中で異彩を放つ一篇となっている。

第三部には、フリーマンにおける歴史と地理の密接な関係を扱う3篇の論文が配置されている。出来事の現場を訪ねて観察する「歴史巡礼(旅行)」がフリーマンにとって歴史研究の必須の一部であったことを強調するWilliam M. Airdは、アドリア海沿岸諸国への旅行記を例にとって、彼のアプローチが「空間論的転回」という点でアナール学派の発想を先取りしているとともに、現代——彼にとっての現代——の国際政治の状況に関わ

る偏見をも露呈していることを示す。アナール学派へのこの言及は、この本の中でフリーマンの歴史記述を現代——我々にとっての現代——の歴史学の営みと関連づけているほとんど唯一の箇所と言ってもよい。Jonathan Conlin は、フリーマンが1881年から翌年にかけて行なったアメリカへの講演旅行の経緯と内容を裏事情を含めて紹介し、アメリカを第三の故郷とする特権的なテュートン民族という彼の理論を検証している。William Kelly は、「東方問題」へのフリーマンの強い関心が、彼の主たる研究主題であるギリシア—ローマ—テュートンと引き継がれるヨーロッパの主流史への関心と表裏一体であり、西と東の今も続く対立関係こそが世界史を貫く主問題だとするとともに、フリーマンを含むヴィクトリア朝人特有の〈過去と現在の時間意識の融合〉が見られると結論する。

続いて第四部では、建築論にあらわれるフリーマンの歴史意識を3人の論者が検討している。Chris Miele は、ゴシック建築復興にフリーマンが果たした功績の背景に彼がトマス・アーノルドから学んだ歴史観があると指摘し、彼の『建築史』(1849)は、建築様式の発展をその基礎をなす歴史状況の変化との相関関係において体系的に説明しようとした最初の建築論だと言う。Christine Dade-Robertson は、ウォルサム・アビーの時代測定をめぐるフリーマンと『ジェントルマンズ・マガジン』の書評家との論争、および前者の敗北の経緯を通じて、実証できる厳密な真実への志向とロマンスへの志向が彼の中で奇妙に同居していた事実を描き出している。G. A. Bremner は、フリーマンがゴシックの理念をめぐる現場の建築家G・G・スコットに与えた影響力の消長をたどり、二人の共感関係や目的意識の微妙なズレを観察することにより、建築界の主流に地歩を築くことができなかった理論家としてフリーマンを位置づける。

第五部は、人種と帝国主義というおそらく最も重い問題に対するフリーマンの態度を扱った2篇の論文から成る。Theodore Koditschek は、フリーマンにおける歴史学と現実政治の関係について、歴史が政治に先行したとする通説を裏返して、彼の特殊なりベラリズムに基づく政治的アジェンダが彼の歴史研究を方向づけ色づけした——Koditschekの論文のタイトルに使われた語でいえば「人種にかかわる伝統を創作(invent)」した——のだと言う。現代におけるオスマン帝国とトルコ人への嫌悪が、テュートン族の

始祖と現代イギリス人の連続性とその優越性という（今となってはレイシズムと呼ぶしかない）信念を生み出した。そしてそれを政治形態の観点から「説明」するために書かれたのが彼の数々の歴史研究書だったというのだ。Duncan Bellもまた、テュートン系民族（特にイギリス人）の他民族に対する優越性に基づく反帝国主義と、英米にまたがるイギリス人を中心とする世界秩序の構築というヴィジョンをフリーマンに見出している。

第六部では、フリーマンにおける歴史学の理念を3人の論者が論じる。まずJudith A. Greenが、主著『ノルマン征服史』全5巻にあらわれた歴史学および歴史家についての彼の見解を整理し、5つの項目にまとめた上で各項目について評価を下している。総括的な評価としてGreenは、フリーマンが学問的レベルにおいて同時代の中世史研究の先端から取り残されているのが最大の問題だと言明する。Ian Heskethの論文は、1870年代オクスフォードで一種のエンターテインメントの様相を呈したフリーマンとJ・A・フルードの諍いを、従来とは若干違った面に光をあてて解釈している。通常、客観的科学としての歴史学と文学的・物語的な歴史記述の争いという観点から説明されてきたこの対立関係を、Heskethは宗教と教会をめぐる高教会派（フリーマン）と世俗主義者（フルード）の対立として捉え直すのだ。「歴史的方法 (historical methods)」というフレーズの意味を分析したHerman Paulの論文は、フリーマンの考える歴史学の学としての性質に重要な光をあててくれる。ドイツ起源（ランケ流）の精緻な史料批判の方法論が（例えばアクトン卿の著作を通じて）定着し始める時代にあって、彼が「歴史的方法」と呼んだものは、ある種の「思考と研究の習性」から得られる「感受性」であり、過ぎ去った時代の本質を「直観的」に把握する能力にほかならない。この意味で、科学的歴史研究を標榜しながら彼の歴史学はその後の歴史学研究を支配することになる細分化された特定の時代に集中する専門科学精神と相容れない。上に見たように、この本の序論で二人の編者はフリーマンの歴史記述が結果的に科学の規準を満たしていない場合があることを指摘したのだが、Paulはさらに根本的に、科学からの逸脱は結果だけではなく彼の歴史家としての方針に属することを明らかにしたと言えるだろう。

最後に、結論と銘打った第七部に、歴史学の専門家としての立場と

ジャーナリズムを通して一般読者に語りかける知識人としての立場の兼ね合いを論じた H. S. Jones の論文が単独で置かれている。

私の力不足のせいではっきりするほど平板な要約になってしまったが、言うまでもなく、きちんと通読すれば大変勉強になる本であることは間違いない。また、個々の論文の中には、例えば結論の部に置かれた Jones 論文のように、インターディシプリナリーな文化研究に材料を与えてくれるものもある。しかし、全体としてみればこれは史学史という専門分野に属する専門書、しかもかなり専門性の高い専門書であるように思われる。そして、専門書にふさわしくきわめて禁欲的で、それぞれの論者は自分が設定した主題から決してはみ出ずまいと心がけながら書いているかのような印象を受けるのだ。Aird の論考を紹介するついでに触れたように、現代 (20 世紀や 21 世紀) の歴史学との関係やフリーマンの現代的意義への言及は、「フリーマンの生涯と時代」という会議のテーマに慮ってか、慎重に (?) 避けられている。視野を 19 世紀の範囲に限定しても、個々の論者はその時代の歴史学の全般的見取り図や、世紀全体を通じての歴史学の発展の通時的マップを提供しようとしないので、こうした情報については例えば Ian Hesketh, *The Science of History in Victorian Britain* (2011) (本誌第 9 号に村岡健次氏による書評あり) のような本から補わなければならないだろう。

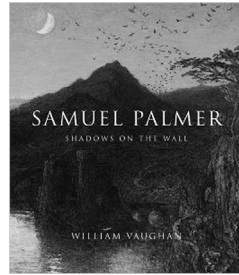
禁欲的になるあまりにこの本では誰も言及していないけれども、関連させて考えた方がいいと思われるものが、あと二点ある。それは、ヴィーコおよびニーブールの名前と、1850 年に新設されたオクスフォード大学の「法学および近代史」学位試験コースに対するフリーマンの反応である。この論文集に展開される 16 篇の議論を総合した時に見えてくるのは、フリーマンの歴史研究は古代から現代までのあらゆる文明を視野に入れて人類の進歩の一般法則を把握しようとするすぐれてヴィクトリア朝的な態度に発するものにほかならず、事実の厳格な実証を重んじる 20 世紀歴史学よりはむしろ大きな物語を求める夢想と発想を共有しているということだ。その意味では、現代の目から見て彼を頑固で気むずかしい変人と特徴づけるのはあながち誤りとも言えなかったわけである。オクスフォードの古典人文学学位試験は、この偏屈な態度の具現化にほかならなかった。1850 年

の試験制度改革は、世紀前半のオクスフォードの教育体制に対する世間からの批判へのひとつの対応策で、古典人文学(古典文学、古代哲学、古代史)への過度の集中を和らげ、カリキュラムの拡幅と専門分化・選択制度を導入することで大学教育を近代化する第一歩として提案されたものだった。のちに欽定近代史教授の座に就くことになるフリーマンが、この時、古典から独立した近代史コースの設立に誰よりも激しく反対したのは注目すべきことである。その時彼は、ヴィーコとニーブールを後ろ盾として古代史研究の意義を裏づけたトマス・アーノルドの名をヒーローとして挙げ、改革以前の制度を正当化したのだった(*Report of the Oxford University Commission* (1852), Evidence, pp. 138–39を見よ)。この事実は、歴史学への基本的なアプローチに関して彼がよりどころとしたのが19世紀前半の古典教育の基盤にあった歴史観であり、その点で、当時の知的状況の中で彼がゆるぎない保守派として分類されるべきことを示している。こうした点に言及すれば、上に紹介したPaulの論文などはさらに説得力を増したのではないだろうか。

——上智大学教授

書 評

William Vaughan,
Samuel Palmer: Shadows on the Wall
 (New Haven: Yale University Press, 2015)



高橋 裕子

サミュエル・パーマー (Samuel Palmer, 1805～81) の活動期は確かに「ヴィクトリア朝」に収まっているのだが、彼の研究書が『ヴィクトリア朝文化研究』に取り上げられるというのはやや意外の感がある。パーマーがウィリアム・ブレイクの影響下に神秘的で輝かしい作品を生み出したのは、ヴィクトリアが王位に就く直前の1820年代半ばから30年代半ばにかけてだった。一方で、パーマーの芸術がジョン・パイパー、グレアム・サザランド、ポール・ナッシュらを刮目させ、「ネオ・ロマンティズム」の興隆を生んだのは、20世紀に入ってからのことなのである。彼は生活のため、有閑階級の人々に水彩や素描を教えたが、典型的にヴィクトリア朝的なのは、この暮らしぶりだったかもしれない。

著者ウィリアム・ヴォーン (William Vaughan, 1943～) は、ロンドン大学バークベック・コレッジの名誉教授 (美術史学) で、ヴィクトリア朝の専門家というよりも、18世紀後半から19世紀にかけての西欧のロマン主義の時代が守備範囲であり、この広い関心のあり方は、本書にも明らかである。本書は大判で400ページを超える大著で、収録された図版は大小合わせて300枚余りである。もともとモノクロームの版画や素描を別とすれば、図版の多くがカラーで、随所に全ページ大・断ち落としの部分図があることも、本書の魅力を高めている。

序章においてヴォーンは、パーマーを可能な限り後世の解釈から解放し、彼が生きた時代の社会的・政治的文脈に戻して理解することを目標に掲げる。その結果、後述するように、個人的な靈感の衰退に見えるものが、より大きな背景を持っていたことが見えてくる。

パーマーは1826年に祖父の遺産を得て、ロンドンからケント州ショールムに移住すると、遺産の続く限り、自由に創作に没頭する日々を送った。ウィリアム・ブレイクへの敬意によって結びついた若い画家仲間（エドワード・カルヴァート、ジョージ・リッチモンドら）がパーマーを訪れ、彼らは‘The Ancients’を名乗る。近代化によって失われつつある価値を取り戻すことが彼らの理想だった。こうしたグループとしては、すでにドイツ語圏で19世紀初頭に「ナザレ派」が発足していたが、英国では「エインシェンツ」が、より有名な「ラファエル前派」に20年ほど先立っている。つまり、パーマーと仲間たちは、当時の社会に対するオルタナティヴを求めた点で、逆説的だがまさに19世紀前半の社会の中にとりこまれていたことになる。

本書の副題 *Shadows on the Wall* の意味も序章で明らかにされる。これは、昇る月によって楡の木が壁に映し出されたのを見たという、パーマーの幼児期の思い出に遡る。一緒にいた乳母は、人生が影のように儚いものであるという、ヨブ記に基づく詩句を引用して、幼いパーマーに忘れ難い印象を与えた。また、パーマーは、絵画が壁に映る影の輪郭を辿ることから生まれたという古代の逸話も知っていた。プリニウスが伝えるこの逸話は、18世紀末から19世紀初頭にかけて、西欧諸国でしばしば絵画化されただけでなく、パーマーは古典文学に強い関心を持っていたからである。古代の思想としては、現世で我々が見るものの姿は真の実在の影に過ぎないという、プラトンのイデア論もある。これら、ユダヤ・キリスト教と古典古代文化における三つの影の概念が、副題の *Shadows* ということになる。

パーマーの時代は英国における風景画の全盛期だが、パーマーはターナーの劇的表現もカンスタブルのナチュラリズムも模倣しなかった。そのかわり彼は、風変わりで強烈な雰囲気を持った何ものかを提示した。「彼は内的生の画家だった。彼の野心は、自然界の外観を文字通りに記録することではなく、それに対する我々の感情や想像力の反応を探求することに向けられていた。これは風景画では新しいことだが、詩における風景への反応としては珍しいことではない。」(p. 1)。パーマーは古今の詩に親しんでおり、詩人で画家のウィリアム・ブレイクから最大の影響を受けた。

今日、典型的なパーマーと見なされている風変わりで強烈な雰囲気の作

品は、『魔法の林檎の木』(1830年頃、水彩とグアッシュ、ケンブリッジ、フィッツウィリアム美術館)のように、ショールームでの約8年間に生み出されている。これらの初期作品は、1926年にヴィクトリア&アルバート博物館で大規模な回顧展が開かれるまで、家族や親しい友人にしか知られていなかった。いったん公開されると、その「近代性」によって20世紀英国の画壇に多大な影響を及ぼしたのは前述の通りである。しかし、パーマー自身は、自作が近代性の象徴として評価されたと知ったら、困惑したことだろうと著者は言う。彼は近代の都市生活に不信の念を抱いていたからだ。しかし、羊飼いと羊たちを描いたパーマーの風景画は、一見そう見えるほど素朴で牧歌的な世界を描いているわけではない。どこかしら暗いものが潜んでいるからである。

序章以降は時系列で5部に分かれている。第1部 始まり(1805～1822)／第2部 「プリミティヴ」の発見(1822～1826)／第3部 ショールーム(1826～1835)／第4部 「現実」の暮らし、ロンドンでのキャリア(1835～1861)／第5部 隠棲と復活(1861～1881)。第5部には、ネオ・ロマンティズムをはじめ、パーマー没後の種々の影響も述べられている。そして最後に、「サミュエル・パーマーの猫」というテイルピースがある。

パーマーの画業を論じた先行研究では、ショールーム時代のみが特筆され、その後はほとんど無視される傾向があったが、ショールーム以後の作品(パーマーは「オールド・ウォーターカラー・ソサエティ」の重鎮として作品を発表し続けていた)も、その質の高さを正當に評価すべきだというのが著者の主張である。

パーマーは、当時には珍しく、ロイヤル・アカデミー美術学校などで正統的な美術教育を受けることなく画家となった。水彩による風景画の部門ではそれが可能であり、パーマーは14歳の時に最初の風景画をアカデミー展に出品している。しかし、人物を描くにはアカデミックな修業が必要で、収入源になる肖像画を描くにせよ、格の高い歴史画を描くにせよ、アカデミーでの研鑽の不足が不利に働いたことは否めない。だが、彼の異様なまでの「新しさ」が、通常美術教育を受けず、ブレイクやフューズリの影響下に、デューラーの版画をはじめとする「プリミティヴ」作品を手本としたことに由来するとすれば、それは遺憾とすべきことではなかった。

1832年の選挙法改正法案成立をめぐってショールーム界隈に政治的・経済的動乱が起こると、パーマーは次第にロンドンに生活の拠点を移す。その後、つまり中期のパーマーは、穏やかで写実的な風景画を描き、そうした水彩画をアマチュアに教えて生計を立てた。パーマーが「ヴィジョンの谷」と呼んだショールーム時代の靈感は失われたように見える。しかし、神の摂理のもとに人と自然が調和した村落共同体のイメージは、引き続き描かれた。ただ、ショールームを舞台とした後期の絵(《落ち穂拾い》、1833年頃、テイト・ブリテン、本書図版171)では、前期の絵に見られるような「熱烈で原初的なものは影を潜め、情景にはもの悲しさやノスタルジーが付きまとっている」(p. 201)。

後期には、エッチングの技法を習得することによって、モノクロームの世界にはほのかな光を点し、新たな詩情に満ちた作品を造り出した。パーマーに熱狂した20世紀の美術家たちは、ショールーム以後の彼の水彩には関心を示さなかったが、晩年の版画には注目した。

テイルピースの「サミュエル・パーマーの猫」というのは、2ページのテキストとルース・ブラウンという画家の猫の絵(2010年、個人蔵)である。草むらにトラ猫がうずくまっており、遙か遠くの背景には丘があって、サミュエル・パーマー風の大きな月がその上に昇っている。パーマーは猫が好きだった。9歳の時に書かれた現存する最初の手紙にも愛猫ウォッチの名が出てくるといふ。ヴォーンは2005年に大英博物館で大規模なパーマーの回顧展を組織し、その折にパーマーが生まれたロンドンのサリー・スクエアを訪れた。ジョージアンなテラスハウスの一部をなすパーマーの旧宅は保存されており、その戸口の階段上には大きな雄のトラ猫がいて、満足そうに秋の日差しを浴びていた。ヴォーンが撫でると盛大に喉を鳴らす。パーマーの生まれ変わりかもしれないと思ったが、ウォッチの数多い子孫の1匹が今日に生き延びていると見るのが妥当だろうということで、自分を納得させた、と言う。

「蛇足」のようだが、本書の末尾を飾る記述としては正鵠を得ている。ヴォーンは、パーマーの靈感源として、旧約聖書、プラトンの哲学、古代の説話や牧歌に遡る長い伝統をたどり、中世末期のファン・エイクやデューラーへの関心を指摘する。さらに、ブレイクやフューズリから受け

た影響にも読者の注意を促す。西欧全体のロマン主義の詩と絵画がパーマーに関連した現象として挙げられる。顕著な例はドイツのC. D. フリードリヒの芸術で、パーマーがこの画家を知っていたとは思われないが、風景に霊的なものを求めるアプローチには非常に近いものがあるという。一般社会のそれとは異なるオルタナティブな価値を追求するグループの形成という点では、パーマーを中心とする「エインシェンツ」は「ナザレ派」と「ラファエル前派」を仲介する。また、「ラファエル前派」のD. G. ロセッティが大英博物館古代彫刻展示室の守衛からブレイクの手稿を入手したという話があるが、この守衛はサミュエル・パーマーの弟にあたる人物だった。20世紀に入ってからネオ・ロマンティシズムの画家たちのパーマーへの強い共感についてはすでに述べた通りである。パーマーの芸術をその重要な一部とする長い系譜を、ヴォーンは「ウォッチの子孫」を登場させることで印象的に語っているのである。

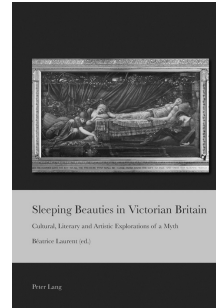
水彩や素描や版画という小品を専ら制作したサミュエル・パーマーが、実はヨーロッパのロマン主義絵画の中心的存在の一人だったというヴォーンの主張には十分な説得力がある。高品質の図版多数（パーマーだけでなく、カルバートやリッチモンドの作品なども含む）も、本書の意義を高めている。猫をめぐるテイルピースから察するに、著者も猫好きであるのは間違いない。私はその点にも好感を持った。

——学習院大学教授

書 評

Béatrice Laurent, ed., *Sleeping Beauties in Victorian Britain: Cultural, Literary and Artistic Explorations of a Myth*
(Bern: Peter Lang, 2015)

山口 恵里子



「いかにして、いつ、なぜ眠り姫が19世紀後半にこんなにも人気を得たのか」。この問いに答える10本の論文から編まれた本書は、ヴィクトリア朝の医学、文学、美術の分野における眠り姫への熱狂を追跡する。ヴィクトリア朝美術・文学に頻出する受動的に無力に横たわる女性像、その女の身体に向けられた性的な視線についてはプラム・ダイクストラの代表的な研究 *Idols of Perversity* (1986) があるが、本書はこの眠る女の「受動性」を問い直している。眠る女たちの身体は発動している。彼女たちの眠る身体は何を表示するのか。

Muriel Adrien の“*What Did Victorian Sleeping Beauties Dream of?: About the Great Number of Representations of Sleep in the Late Nineteenth Century*”は、19世紀における睡眠習慣の変化と眠り姫ブームとの関連を指摘する。19世紀初頭まで人びとは“*watch*”と呼ばれる夜半の活動時間を挟んで2回に分けて睡眠をとっていたが、ガス灯などの普及によって夜遅くまで起きることが可能となると7時間ほど連続して眠ることが求められるようになった。個人的で多様だった睡眠の習慣が、産業化された社会で「標準化」されたのだ。この「標準」から逸脱した睡眠は、睡眠障害とみなされる。Béatrice Laurent の“*The Strange Case of the Victorian Sleeping Maid*”は、長時間眠り続ける人(とりわけ少女)が医学の症例となる過程に焦点を当てる。多くの医者が眠り続ける少女たちを診断し、彼女たちの眠る身体は医学書や雑誌を通して広く人びとに知られ、読まれる対象になってゆく。

『ピックウィック・ペーパーズ』(1836, 1837)に日中眠気に襲われる少年ジョーを登場させたディケンズも、こうした症例を知っていたら

う。Laurence Talairach-Vielmas の“The ‘ghastly waxwork at the fair’: Charles Dickens’s *Sleeping Beauty* in *Great Expectations*”によると、ディケンズは『大いなる遺産』(1861)で花嫁衣装を着続けるミス・ハヴィシャムを、マダム・タッソーの蠟人形、自動人形、解剖学の人体モデルとして造形した。彼女は、無垢な眠り姫ではなく、埃のなかで生きながら死んでいる「陰鬱な眠り姫」である。この眠り姫の周囲に張り巡らされた死、犯罪、仮面といった蠟人形と関連する多様なモチーフは「秘密」と結ばれる。ディケンズの、蠟人形のように心を閉ざした眠り姫は、感情を抑制し秘密にしたヴィクトリア朝の人びとの化身である。

アン・サッカレー・リッチは *Five Old Friends and A Young Prince* (1866) で、おとぎ話を大人の読者向けにリライトし、当時の社会、とりわけ伝統的女性観を批判する「温厚な革命」を試みた (Manuela D’amore, “Engendering Creative Negativity: Anne Thackeray Ritchie’s *The Sleeping Beauty in the Wood* (1866)”). ヴィクトリア朝の眠り姫セシリアは、未婚女性を社会から切り離して結婚に備えさせる当時の教育方針に基づき、館に閉じ込められている。語り手はこの教育に異を唱える。セシリアは、館のなかで家族に「眠らされている」(E. シクスー) のだ。この「比喩的な眠り」の間、セシリアも感情を露わにすることがない。ある夜、彼女は、結婚をしないと宣言する。この決断は、父権制が期待する女性役割に反対したかのように見える。だが、セシリアは「美しい蠟人形」のように立って、ある青年と会うと、涙が溢れ出す。彼女は痛々しく「目覚めた」のである。館から出て結婚しなければならないと。リッチは「おとぎ話は長続きしない」と書き、「温厚な革命」をこれ以上推し進めようとはしない。

Stefania Arcara の“Sleep and Liberation: The Opiate World of Elizabeth Siddal”は、ラファエル前派のモデルとなったエリザベス・シダルの詩を論じる(家族が用いた姓の綴りは Siddall である)。シダルは D. G. ロセッティと 1860 年に結婚するが、2 年後ローダナム(アヘン剤)の過剰摂取で亡くなった。自殺とも言われる。ロセッティが妻を追悼して描いた《ベアータ・ベアトリクス》では、天国に向かうシダルの手に鳩が罌粟の花を届ける。眠り・死を象徴する罌粟は、彼女がアヘン中毒だったことも表しているという。原因不明の病に苦しんだ彼女は、鎮痛剤としてアヘンを常用してい

たのだった。著者は、物憂げに椅子に坐りあるいは眠る「受動的な」シダルを描いたロセッティの素描と彼女の「主体的な」詩を比較するが、私たちはロセッティが芸術家としてのシダルも描いていたことも忘れてはならないだろう。著者によれば、シダルが自身の詩に記した眠りは、「慰めと隔離と抵抗の場所である」。その場所で、彼女は「女性の愛の犠牲者としての慣習的役割」を拒んだ。シダルは、眠り姫の受動性を意識的に自己疎外的手段として用い、眠り・死を自己保持の、最終的には解放的手段としたのだった。思うに、リッチが眠り姫の受動的「目覚め」を能動的「目覚め」に変えたとすれば、シダルは受動的な「眠り」のなかで能動的、主体的な生を詩に探したのである。

他方、ロセッティは不眠症に苦しんだが、眠りは、彼に、不安とともに詩のヴィジョンももたらした (Laurence Roussillon-Constanty, “Immortal and Deadly Icons: Dante Gabriel Rossetti’s Sleeping Beauties”). 1848年、ロセッティは詩 “Jenny” に着手する (本論は着手の年を 1846年としている。またロセッティは 1846年9月の書簡でペローのおとぎ話集の購入を弟に知らせたとあるが、その書簡は 1844年12月17日付の書簡と思われる)。ジュニーは語り手の膝に頭を乗せてぐっすり眠る売春婦である。無意識状態にあるジュニーの官能性は男には安全である。だが、ロセッティの詩集『生命の家』(1870/81)では、眠る女の官能性が強度を増し、女と抱擁しあう眠りのなかで男も半ば意識を失う。ロセッティの眠る女たちは、ヴィクトリア朝の受動的な女性像とはかけ離れた、成熟したパワフルな女たちである。彼女たちに「王子」は不要である。

ロセッティを通じて 1856年に出会ったラスキンとバーン＝ジョーンズは、1871年にミケランジェロへの評価をめぐる友情にひびが入ったと言われてきた。だがそれは表面上のことで、実は眠り姫が彼らの心を繋ぎとめていたことを、Cristina Pascu-Tulbure の “Aesthetics of Desire: Ruskin, Burne-Jones and Their Sleeping Beauties” は明らかにする。ラスキンは、結婚を待ち望んだ 29歳下のローズ・ラ・トーシュに眠り姫のイメージを重ねるが、そのイメージはカルパッチョが描いた聖ウルスラのイメージにとって代わる。1876年のローズの死後、聖ウルスラの再生を信じたラスキンは、ローズを失ったことを「自然」の真実として捉え、死と再生、眠りと目覚め、

喪失と回復のサイクルのなかで彼女を眠らせ、毎春彼女に目覚めの接吻をする夢を見る。バーン＝ジョーンズは、《いばらの森に入る王子》(1869)で(ラスキンのように)孤独に姫を探す王子を描き、1871-73年に制作した連作《いばら姫》では、疲弊した王子と深い眠りのなかで安らかに眠る姫を対比した。この姫のように、バーン＝ジョーンズは「自然」に背を向けて、自身が創り出した芸術の世界で守られ「眠る」ことを欲するようになる。1890年、バーン＝ジョーンズは4点からなる《いばら姫》を完成させる。この連作に描かれた王子と姫は、「不自然に称えられた静止」のなかにいる。王子は姫を目覚めさせて無垢の美を失わせる接吻を迷い、姫も目覚めることを望んではいない。姫は、もう愛することも死ぬこともないのだ。

Anne Chassagnol の“Nuptial Dreams and Toxic Fantasies: Visions of Feminine Desire in John Anster Fitzgerald’s Fairy Paintings *The Stuff That Dreams Are Made of* (1858)”は、フィッツジェラルドが1858年に「眠り姫」「白雪姫」「シンデレラ」を組み合わせて描いた《夢が作られるもの》と《仮面舞踏会後の夢》の眠りに、少女が大人の女性になる過程をみる。ウェディングドレスのような白いドレスに華美な上着や宝石を身につけた女性が、自身と男性が現れる夢を見ている。女性は、喜びのあまり感覚が麻痺して眠っているのだという。「装飾的なアッサンプラージュ」もしくは「洋服屋の飾り人形」のように眠る女は、彼女の体を覗き込む視線に晒されるが、著者によれば、彼女は王子を待っているのではなく、むしろ飾り立てられた自身を見せながら、「夢のなかに男性を呼び出している」。謎めいた微笑みが暗示するように、少女はみずから男性を幻想し、女になるのである。

Marie Cordié-Levy の“Julia Margaret Cameron’s Sleeping Beauties”は、ジュリア・マーガレット・キャメロンが「眠り姫」を写した写真、《春の日》(1865)、《ラファエル前派風習作》(1870)、《アレシア》(1872)、《ランスロットとグイネヴィアの別れ》(1874)を論じる。これらの写真は、それぞれ母性、愛、美、情熱を写したもののだが、著者は、各々の写真には代理母の問題、メランコリー、死、別れも含まれているという。キャメロンはこうした眠りの多層性をカメラに捉えて写真の可能性に挑んだ。写真は「真実」のみを写す手段ではないのだと。

論集最後の Anne-Florence Gillard-Estrada の“Beneath the Surface: Sleeping

Beauties in Representations of Antiquity and their Reception (1860-1900) ”は、フレデリック・レイトンらアカデミーの画家が描いた眠る女たちに迫る。ギリシャ神話を主題とした彼らの作品では、女の身体はアカデミーの教えに則った理想美と、リビドーの対立の場となった。レイトンの《テセウスに捨てられたアリアドネー》(1868)では、透き通る白い衣を身にまとい、蒼白となったアリアドネーが死んだように眠る。凍りついた姿勢で眠る彼女を見る者は、安心して欲望することができる。一方、《燃えるような6月》(1895)でオレンジの衣に身を包んで眠る女は、ミケランジェロが描いたレダのポーズを模したポーズで眠る。女は自身の欲望と夢の只中にいる。オレンジのドレーパリーは、そんな彼女の内的世界を表したものだ。アルマ＝タデマの《アムピッサの女たち》(1887)では、狂乱し粗暴なはずのマイナスが、白い衣に身を包んで「おとなしく」眠る。女たちがマイナスたちを見つめるが、アルマ＝タデマは、両者の境界を分明とはせずに、道徳的な女性が制御不能な女に変身する可能性を示した。アルバート・ムアが描いた眠る女もギリシャ風のキトンに身を包む。その襞の動きが肌の下の「無意識」を表すように、画家たちは、古代ギリシャを主題にして、眠る女の彫刻のような肌の下の「隠された心の領域」を開こうとしたのである。彼らが描いた女たちは窃視の対象ではあっても健やかに眠っていると見られていたが、本論を通して、女たちの肌の上でドレーパリーが心のうごめきによって震えていることを知った。

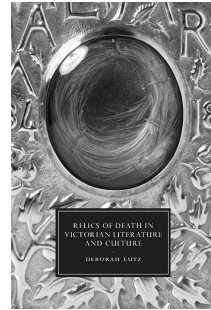
本書は始めにヴィクトリア朝における眠りの標準化という問題を提起して、読者を眠り姫の物語のなかへと誘った。だが、ページをめくるうちに、標準化した眠りの周囲に、多層化、多義化した眠りのラビリンスが広がっていたことに気づかされる。このラビリンスの道を表象から深層へと導く10本の論考を編んだ本書は、眠る女たちの蠅人形／人体モデル／彫像のような身体／心の表層を包む幾重もの襞を掻き分け、心の秘密、夢の世界、そして無意識の領域にふれた。無表情で無力な眠り姫は、実はこんなにも強くあるいは密かに表現していたのである。眠り姫の身体を覆うドレーパリーは半透明だが、姫が眠る森は鬱蒼としている。依然、未踏の地は残されている。

書 評

Deborah Lutz, *Relics of Death in Victorian Literature and Culture*

(Cambridge: Cambridge University Press, 2015)

福原 俊平



デスマスク、遺髪が編み込まれたアクセサリー、さらには人間の皮膚を表紙とした人皮装丁本。子供たちの歯をペンダントに加工し、夫の死後は故人の寝間着を抱いて毎晩眠ったヴィクトリア女王。現代の感覚からすればかなり奇妙であり、悪趣味とも感じられるかもしれないが、19世紀の英国においては、親しい人の死後、頭髮や歯などの遺体の一部や生前愛用していた日用品を形見として保持したり、身に着けたりすることは奇異なことではなく、むしろ当然のことであった。ウィルキー・コリンズの『隠れん坊』では、“a Hair Bracelet is in England one of the commonest ornaments of woman’s wear”とされているようだ。ヴィクトリア朝文学に形見の小道具が良く出てくることは周知の事実だろうが、本書はそのような遺物、遺品の文化を掘り下げ、ヴィクトリア朝における死のあり方を文学作品と関連付けて論じている。

本書の特徴は、何よりも着眼点の面白さだろう。19世紀英国における遺体、遺品という物質的な死の形に注目し、その物質性崇拝の中に当時の文化的な価値観を見出している。もちろん、このようなアプローチはフィリップ・アリエスに代表される死の文化史の系譜を踏まえたものであるが、19世紀英国の文学者にまつわる事例が豊富に紹介されているところが、ヴィクトリア朝文化を専門とする研究者には興味深いだろう。具体例をいくつか挙げると、ディケンズが死去した際、ジョン・エヴァレット・ミレーとトーマス・ウールナーが翌日にディケンズ宅を訪れ、ミレーはディケンズの遺体をスケッチし、ウールナーは胸像を作成するために型を取ったという逸話や、シャーロット・ブロンテが、エミリーとアンの死後、彼

女たちの頭髪で編まれたアクセサリーを身に着けていたという事実などが述べられており、雑学的な楽しさもある。また、数はさほど多くはないものの、写真資料も適宜用いられており、頭髪で編まれたアクセサリーの実物、シェリーの頭蓋骨の欠片、エミリー・ブロンテがそこで亡くなったとされるソファの写真などが収められている。

もちろん、本書は雑学を集めた娯楽書ではなく研究書である。タイトルにもあるように、文化と文学という二つの側面を論じつつ、その関連性を論じているのだが、その内容をいくつかのキーワードを用いてまとめた。まず、文化という観点では、死と遺品に対する態度の通史的な変遷が、「世俗化」というキーワードでまとめられている。遺物、遺品の収集の歴史を振り返ると、キリスト教聖人の亡骸や愛用品を人々が競い合って求めた聖遺物の時代にさかのぼる。当初は宗教的なものであったが、収集対象は徐々に世俗化し、ロマン派の時代の英雄崇拜、そして18世紀末以降のリテラリー・ツーリズムの勃興に伴い、文学者の遺物も収集および崇拜の対象となった。そして、ヴィクトリア朝時代を通して、聖人でも著名人でもない世俗の人間さえもが対象となり、愛おしい人々の記憶を保つため、様々な形で亡骸の一部や愛用品が保存されるようになった。

文化論としての本書のアプローチ方法としては、「物質性」をキーワードとして挙げることができる。Elaine Freedgoodの*The Ideas in Things*にたびたび言及していることから分かるように、ヴィクトリア朝における遺物や遺品というモノに注目し、モノを通して当時の死への態度を把握しようとする。また、物質性と言えば、ヴィクトリア朝は産業革命の影響により大量生産、大量消費という消費社会化した時代でもある。そのような社会の中で、遺物や遺品は機械製造が不可能なものとして特別な価値を獲得した。消費主義へのアンチテーゼとして、複製不能な唯一性を保持する存在でもあったとされる。

以上のような視点から、19世紀英国の死をとりまく文化がまとめられているのだが、そこから見えてくるのは死が美化された時代の死生観である。結核による死など、ロマン派における美化された死のイメージは、スーザン・ソントグの論以降よく知られているところではあるが、ヴィクトリア朝においても死は肯定的に、時に美化してとられた。Lutzはそこに

福音主義の影響を見出しており、平穏で幸福な死というイメージは福音主義者以外にも共有されていたと論じている。このような死のイメージを体現する一例として挙げられているのは、ディケンズが描いたネルの美しく穏やかな死である。

福音主義的な“afterlife”の概念は、死は終わりではなく、生と死は連続しているという認識をもたらした。ヴィクトリア朝小説においては、そのような連続性の意識が様々な形で表れており、『嵐が丘』におけるヒースクリフとキャサリンの死後の再会というテーマ、ディケンズにおける再生のテーマなどの形で見ることができる。また、この生と死の連続性は、当時のオカルト・ブームとも関連する。ヴィクトリア女王も没頭した降霊術では、生と死の連続性は極めて明瞭である。霊媒師がこの世と死者の世界をつなぐ仲介役となり、時として高度な技として霊の「物質化」を行ったように、物質は生と死の世界をつなぐ通路であった。このように、本書は生と死が連続したものとされた時代において、遺物や遺品が担った意義を論じている。

本書の文学研究としての側面に話を移すと、議論対象としては、詩においてはロマン派からラファエル前派の詩人たち、そしてこのテーマには欠かせないテニスンが含まれ、小説ではディケンズ、プロンテ、ハーディの作品が中心に論じられている。多様な文学作品を扱っており、それぞれの詩人や小説家の個性も論じられているのだが、この書評では、これらの文学者の共通点とされているものを紹介したい。それは、遺物や遺品が記憶の受け皿や物語の源泉となっており、その意味において、文学作品と同じ役割を果たしているということである。

本書は遺物の物語性に注目し、聖遺物の時代から、遺物と物語は切り離すことができない関係にあると論じている。聖遺物が本物であるということを実証し、その物体に価値を与えたのは、それにまつわる数々の逸話によってである。このような物体に込められた物語性にLutzは注目し、世俗的な遺物であっても、そこに愛情や記憶が注ぎ込まれ、様々なエピソードや物語の源泉となっていると指摘する。ヴィクトリア朝小説においても、遺物や遺品はしばしば物語の原動力であった。例えば、髪のはらは頻繁に用いられた物語上の装置であり、ハーディの『遙か狂乱の群れを離れて』、

『森林地の人々』、ウィルキー・コリンズの『ノー・ネーム』などにおいて、プロット展開上で重要な役割を担った。

本書の議論で興味深いのは、文学作品を聖骨箱や墓など、死にまつわる空間と同列のものとして論じている点である。例えば、キーツ論においては、「イザベラ」など死と死体を題材とした詩をいくつか取り上げ、死体が美的なものとして詩の中に納められることにより、詩が聖骨箱としての役割を果たしていると論じている。また、テニソンの『イン・メモリアム』論においては、哀歌をシュラインと、墓を墓碑銘と関連付けて論じ、哀歌は遺体を包み込むようにテキストで構成されたシュラインであるとしている。さらに、人間の身体も一つのテキスト空間だとされる。ディケンズの『二都物語』の冒頭において、人間の身体を秘密が隠された空間ととらえる記述は有名であるが、身体に込められた物語性を体現する究極の形が人皮装丁本である。犯罪者ジョージ・ウォルトンは、処刑後に自身の伝記を自身の皮膚で装丁するように依頼し、それが実現した。その結果、彼の人生と犯罪の物語は、自身の皮膚の中に収められることとなった。つまり、ウォルトンの人皮装丁本は、墓や墓碑銘と同様に、死の証であると同時に死を乗り越えて永遠に語り続けることになったのである。

そのような死の文化が終焉した一因として、Lutzは第一次世界大戦をあげている。第一次世界大戦では多くの戦死者を出したが、戦死者の遺体は大きく損傷し、あるいは遺体自体が発見不能な場合も多かった。ヴィクトリア朝的な死生観においては、死は美しいものであり、遺体の物質性が生と死の境界性を乗り越える通路であったが、大戦による無残な遺体と遺体の不在は、その前提を根本から崩壊させた。そのような死のあり方をLutzは慰霊碑という空間になぞらえている。慰霊碑と墓の決定的な違いは、遺体があるところに納められていない点である。ヴィクトリア朝の死の空間においては、遺体という物質性を拠り所として、記憶や理想化によって喪あるいは文学的な空間が構成されていたのだが、慰霊碑はその中心に空洞を抱えた追悼の場であり、そこにLutzは根本的な変化を見ている。

以上のように本書をまとめてみたが、遺物や遺品という物質に注目している点において、本書はPeter Conradの*The Victorian Treasure-House*やAsa Briggsの*Victorian Things*のような、モノを中心とした文化論の伝統に

つながる研究である。また、聖骨箱や墓という空間と文学作品との類似性を論じているという点では、Conradの論もそうであったように、すぐれた空間論あるいは文学建築論にもなっている。さらに、遺物や遺品を通して、死者にまつわる過去や記憶を論じるという点では、ヴィクトリア朝における「記憶」という近年盛んな研究テーマの一形態だと言えるだろう。そのような研究コンテキストにおける本書の特徴は、ナショナリズムなどの大きなテーマを射程に入れるよりも、あくまでも近しい人々による故人への思いに焦点を当てている点である。例えば、本書ではリテラリー・ツーリズムにも言及されているため、それをナショナリズムや帝国主義などと関連付けて論を広げることもできたかもしれない。しかし、本書は基本的にはパーソナルな記憶を中心として扱っており、政治性の領域にはあまり踏み込まない。それを限界と取るか美点と取るかは、読み手次第であろうが、私は後者であると考えている。

——福岡大学准教授

書 評

河村民部著『セオドア・ワッツ＝ダントン評伝
——詩論・評論・書評概説と原文テキスト付』
(英宝社、2015)

松村 伸一



セオドア・ワッツ＝ダントンの名に当節聞き覚えがある者といえおそらくは、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティかアルジャノン・スウィンバーンに関心を寄せる人くらいではないだろうか——それも、マイナーな文人でもあった介助者として、記憶にとどめていることだろう。ロセッティの晩年を通してワッツ＝ダントンは、法務実務(「テューダー・ハウス」の賃貸契約更新やパトロンとの厄介な交渉など)を委ねられるとともに、文学上の助言も求められた忠実な友人であり、その最期をロセッティの肉親とともに看取った数少ない友人の一人だった。また1879年には、著しく健康を害していたスウィンバーンをロンドン郊外のパットニーに用意したパインズ邸に引き取って同居し、健康回復へと導いた。その一方で、これら著名詩人との親しい関係がワッツ＝ダントン自身の文名を高からしめたとは、必ずしも言いがたい。彼は長年ロセッティと親交を結んだにもかかわらず、その回顧録を書かなかった(「親しすぎる者は書かない方がよい」という助言に従い、代わりにそう助言したジョゼフ・ナイトが筆を執った)。またエドマンド・ゴスの『スウィンバーン伝』(1917)には、ワッツ＝ダントンの庇護下におかれて以降、スウィンバーンの生活と文筆から生彩が失われたかのような、いささか責任転嫁めいた暗示が随所に見受けられる。

もちろん、曲がりなりにもワッツ＝ダントンの名を知る者の中には、その代表作である小説 *Aylwin* (1898) を読み、その奇妙な魅力に接したことのある読者もいるかもしれない(戸川秋骨による邦訳が1925年に刊行されている)。あるいは同時代人たちの思い出を記した *Old Familiar Faces* (1916)

や唯一の詩論集 *Poetry and the Renascence of Wonder* (1916)、さらには同じタイトルの詩劇を主とする詩集 *The Coming of Love* (1898) を拾い読みしたことくらいあったかもしれない(私自身もその域を出ない)。しかし、そうした読者の中に、今はほぼ忘れられたこの文人独自の文学的な価値と意義を信じ、その復権に務めようとした者がいたかと言うと、皆無であったと言わざるを得ない——本書の著者より以前には。

復権という言葉の含意として、まずかつてはその評価が高かったということ、そしてその忘れられた価値を再び思い起こす意味があるということ、このふたつが前提条件となるはずである。河村民部はこの文字通り重厚な一巻を通して、ワッツ＝ダントンの条件をふたつとも満たしているのだと伝えようとしている。その試みがどこまで成功しているのかについては、以下本書の内容に沿ってセオドア・ワッツ＝ダントンの生涯と業績をたどることで、検討してみたい。

Theodore Watts (1832-1914) は、Huntingdonshire (現 Cambridgeshire) の主要市街地のひとつ St. Ives に事務弁護士の息子として生まれた(1897年に母方の姓 Dunton を加えたのは遺産相続の都合らしい)。父が地質学者 Charles Lyell と親交を結んだ科学者でもあった一方、叔父からは文学と神秘主義への関心を受け継いだ。10歳の時から7年間、ケンブリッジの私立学校 Academy for Young Gentlemen で学んだ後、実家に戻って父のもとで法律事務に携わるようになった。そのかわり、父の蔵書を貪るように読み、地方紙に意見記事を投稿したり、ひそかに詩や散文を書いたりした。とりわけ、同じく「東 部 地 方」^{イースタン・カントリース}出身の作家で、ロマニー(いわゆるジプシー)の生活に取材した小説群で知られる George Borrow (1803-1881) には早くから魅了され、直接の面識もあった。セオドアはその後も長く、ロマ文化への造詣の深さで知られることとなる。

仕事の都合でロンドンを頻繁に訪れるようになった1870～72年頃に転機が訪れる。まずロンドン下層民を描いて人気を博した小説 *Owen: A Waif* (1862) の作者 Frederick William Robinson (1830-1901) と、偶然の出会いから意気投合して文壇とのつながりができた。折しもロンドンで弁護士として成功を収めていた弟が急逝したのを期に、ロンドンに移り住むことになる。元医師で美術にも造詣の深い詩人 Charles Gordon Hake (1809-95) の

知遇を得たのもこの頃であった。Hakeの神秘主義的傾向を持つ作品にはロセッティが早くから注目していた関係で、この人を介してセオドアはロセッティ・サークルの一員となる。1872年9月に偽造小切手でロセッティの銀行口座から金が引き出される事件があり、これを裁判沙汰にしないで処理する手助けをしたのが直接のきっかけだったようである。また、当時すでにAylwinの執筆にも取りかかっていた。

Great James Streetに引っ越して隣人となったスウィンバーンとは特に個人的なつきあいが深くなった。さらに一年後に移ったDanes Innではやはりそこで隣人となったWilliam Minto (1845-93)に誘われて、Mintoが1874～78年に編集長を務めた*The Examiner*に評論を寄稿するようになる。同じ頃に自宅で開いた水曜夜会にはリチャード・バートンやジョゼフ・ナイトなど新たな友人も集った一方、劇作家John Westland Marston (1819-1890)の主宰する日曜夜会やMrs. Louise Chandler Moulton (1835-1908)の「金曜日の団欒」にも足繁く通うなど、急速に文化人の間に社交を広げていく。1874年7月にロセッティがケルムスコットからチェルシーに戻るとセオドアも同居し、「肉感派」との非難を受けて心身とも衰弱しきった詩人画家の生活を身近で支えた。ロセッティの助手Henry Treffry Dunnによる、この二人のよく知られた肖像画(1882年作、National Portrait Gallery所蔵)はそうした日々を想起して描かれたものだろう。1876年には影響力のある高級誌*The Atheneum*に社員として迎えられ、以後、そこに書評を寄稿することがセオドアの主な仕事となり、それが彼の文人としての地位を確固たるものとした(「殆ど毎週6～8コラムのエッセイを一つ書いていた」)。

セオドアは書評その他の依頼原稿を書き続けるかたわら、自作の詩と小説を書き継いだ。そして冒頭に述べたとおり、ロセッティとスウィンバーンという二人の友人の支えでありつづけた。1905年11月末、73歳のセオドアは19年にわたる婚約の末に40歳年下のClara Jane Reichと結婚した。ヘイク編『セオドア・ワッツ＝ダントンの伝記と書簡』にはクララによる回想録が収められており、河村によるその詳しい内容紹介はセオドア晩年の私生活を彷彿とさせる。しかし、1909年にスウィンバーンが没して以降、大きな目標を失ったセオドアは1914年6月、仕事の合間の午睡のさなかに死去したという。

順序が前後するが、本書は三部構成で、その第一部が上に要約した評伝である。『愛の到来』や『エイルウィン』の内容紹介のほか、妻による回想録や友人による印象記も含まれる。「人柄」に末尾の一節を割いているのがヴィクトリア朝風である。第二部は「詩論・評論・書評概説」として、第三部に転載された原文テキストの要約を載せている。

さかのぼれば、本誌第7号で中島俊郎が書評した『詩から小説へ——ワーズワスとロマン派の末裔』（2008年10月）のあと、2014年には4月に『ワーズワス^{リリカル・バラッド}『抒情民謡集』再読』を、10月に『エロスとアガペ：^{シンボリック}饗宴の比較文学——ヴィーナス・タンホイザー伝説から川端康成まで』を立て続けに刊行していた（いずれも英宝社）。2012年に近畿大学を定年退職した後の精力的な研究活動がうかがえる。『エロスとアガペ』において河村はすでにD・G・ロセッティとワッツ＝ダントンの関係に一章を割いていた。その一章について、著者は同書の「はじめに」で、松村昌家編『日本とヴィクトリア朝英国——交流のかたち』（大阪教育図書、2012。本誌第11号で村岡健次が書評）に収められた山口恵里子の「英国ヴィクトリア朝の日本趣味と明治芸術のラファエル前派受容——中世主義と装飾芸術を結び目として」と、飛ヶ谷美穂子「ロンドンの異邦人たち——漱石・カーライル・シャープ」（『比較文学』第55巻、2012）に触れ、それらを読んだことが執筆のきっかけになったと述べている。さらに「ないと思っていたロセッティとワッツ＝ダントンとの交友関係についての詳細な論文」が1993年にすでに山口恵里子によって発表されていたことを本人から聞き及んで吃驚したことも告白している。そしてあえて（と言って良いだろう）「補遺」として、山口の当該論文「ロセッティの裸体画にみる“Nature”——ウォッツ＝ダントンとの関係を踏まえて」（*The Round Table*, Vol. 8, 1993）の論旨を、コメントを交えつつ、紹介している。なお、*The Round Table*は慶應義塾大学の高宮利行研究室で刊行が始まり、今も継続中の院生・学部生による論文集で、山口や飛ヶ谷を含め、現在第一線で活躍中の研究者たちが若き日に書いた論文が収められているが、その性質上、慶應義塾大学図書館以外でこれを閲覧することはほぼ不可能なので、河村が^{あえて}自著で「紹介」しているのも、故なきことではない。

話を本書に戻すと、河村は「総序」と「結語」で繰り返し、前著で「仕残

したこと」すなわち「ワッツ＝ダントンの伝記的事実や、彼の評論家としての具体的論文を十分に渉猟する」ことを果たしたかったのだと、執筆動機を述べている。結果としてわれわれはいわば「ワッツ＝ダントン大全」とも呼ぶべき一書を手にすることとなった。およそセオドア・ワッツ＝ダントンについて知るべき事実と資料は、網羅しているものと思われる。反面、内容紹介に終始し、作品テキストへの批評的分析的アプローチに欠けるくらいは否めない。ただ、本書を以前の河村の業績と照らし合わせると、明瞭な批評の一貫性は見えてくる。すなわち、神秘の源としての自然というテーマである。山と海というロマン主義的トポスに関する比較文学研究から始まった河村の遠い旅は、海と山とジプシーの神秘に魅せられた一人の埋もれた文人の再発見で（ひとまず）区切りをつけたように見える。

他人事のように語っている場合ではない。そういえば、山口恵里子の「ロセッティの裸体画……」も、実は彼女自身が前年に発表した論文に谷田博幸から誤りの指摘を受けたことが論文執筆のきっかけだったと、その謝辞で述べられていた。このように新旧世代の間で純粋な学知の交流が生まれていた／いることに、改めて胸を打たれる。若き研究者が掘り起こしたワッツ＝ダントンへの関心を、年長者が引き継いで、丁寧に堅固な基礎固めを果たした。この再発見された詩人批評家をヴィクトリア朝文化や詩学の歴史の中に位置づけるという作業の〈バトン〉は、河村から下の世代へとふたたび返されたのである。

——青山学院女子短期大学教授

書 評

海老根宏・高橋和久編著

『一九世紀「英国」小説の展開』

(松柏社、2014)



宮丸 裕二

本書は、十九世紀の英国小説に関する論考がまとめられた論集であり、その20本にのぼる論考の寄稿者は、編者の海老根宏氏が東京大学大学院にて英国小説を講じた際の受講者たちと、氏の同僚にしてみてもう一人の編者でもある高橋和久氏と、それから海老根氏本人である。ここでいう「英国」は厳密にイギリスに限っているのではなくイギリスとその近隣の地域である英語文学圏を本論集は対象範囲としている。

本書の内容を一章ずつ紹介するのも本当は書評の役割の一つかも知れないが、実は本書の序文にて海老根氏が編者の立場から実に簡潔明瞭に各論の紹介をしてくれているばかりかこれが短い書評にまでなっているので、本書を手にとった方はそちらをまずは参照されたい。大変実用性に優れた序文である。この序文を見ればお分かりの通り実に幅広く多くの対象やテーマを扱っている。海老根氏が説明するとおり、いずれの論考も小説「作品の『外部』へ向かう関心」を共有している。これはテキストの内的な精査や分析を疎かにしているという意味ではなく、テキストを必ず外側の何らかの文脈に置くことで読み方の可能性をそれぞれ提示しているという点で共通しているのである。

興味深いのは、海老根氏は二本の論考を寄稿しており、一本は最近書かれたものであるが、もう一本は40年前に書かれた『虚栄の市』に関する論文である。氏は序文の中で「ただ唯一の不安は、文学研究の方法も内容も、私の時代と比べてはるかに、あえて進歩とは言わないが、変化してしまったことである」と懸念を隠さないが、一方で、「これら十八編の論文に目を通した私は、当初恐れていたほど、私の論文と他の論文との不整合を気

にする必要はないように思い、少しばかりの安心感を覚えた」とも言う。実際、多くの論考はここ数十年の学界の研究の成果を踏まえて書かれていて、その間にまた追加的に投じられた新理論や新たに注目されることである種の研究ジャンルを形成したようなものもあるが、しかしそれぞれの論考を見る限りそうした理論が論文の軸としてそのまま利用されることもなければ、新興の研究ジャンルであることを謳ってそのまま当てはめる例というものは見られず、ここ数十年の成果が利用されるとしてもそれが研究に際しての問題意識として論考の中に沈殿しているのを見るに留まる。そうした問題意識があるというのであればここ数十年で名前がつけられるその以前から既に研究の中には存在していたことも少なくないのである。あるいは、昨今の多くの研究が依拠する前提的知識として共有する古典的研究というものも、もう随分前にリストとして並んだものから長らく変化していないとも言えるかも知れない。そうしてみると、今も昔も数十年程度では批評において作品に投げかける視点というものはあまり変わっていないのかも知れない。研究を取り巻く状況は変わったし、大学にポストを維持しつつ研究成果を発表しないでいられる人も減ってきたことは歴然としていても、実は研究そのもののあり方だけを見るならば、数十年の時代の経過はゆに飛び越えられる研究分野だということも、海老根氏の過去の論考の掲載が教えてくれる。私の見るところでは、変わっているのは文体であり、研究の成果の書き方、見せ方であって、その関心はほとんど不変なのである。

そして、本書が刊行されることで新たに示されるのは英文学研究あるいは英文化研究の「これまでの教育の成果」と「これからの教育の可能性」の二つである。「教育の成果」とは、すなわち、伝統ある東京大学の英文科の大学院の研究室がこれだけの数の有能な研究者を比較的近い過去にも輩出してきたことが改めてよく分かる書物だということである。研究書の出版を目指して特別に研究会などを開催してきたという種類の書籍ではないし、同じ研究科に在籍していても執筆者全員が時期を同じくして同席していたというわけではないのだが、長い時間を通じてその教室で各世代の学生が海老根氏の元で論を開陳し、意見を交換し、互いに切磋琢磨してきたその様子がその教室に一度も足を踏み入れたことのない私にも本書か

ら伝わってくるのである。本書を手にして、私の念頭に自然と浮かんできたのは、『イギリス／小説／批評―青木雄造先生追悼論集』（小池滋・高松雄一・野島秀勝・前川祐一編）である。これは、『青木雄造著作集』（小池滋編）と姉妹本のようなかたちで、共に1986年に南雲堂より刊行された論文集である。英文学者青木雄造氏の元でかつて学んだ者たちが論考を寄せた作品である。当時既に有名な研究者（実は英文学者を名乗る者ばかりではない）となっていた錚々たる執筆陣が集まり、常日頃出版している普及版の書籍で見せるよりは随分と学術的な内容および口調で、久しぶりに固い内容をそれぞれに扱うという興味深い一冊であった。かつての同窓が集って各々の研究歴や執筆歴の開始点に戻り、改めて本来のテーマに取りかかって見せ、かつての教室の様子を伝えたと共に、教室にいた頃の研究への取り組み方を教室の外にいる読者にも見せてくれた。この書と比べると、30年近くを経て出版された本書は同じ趣旨で編まれたのかどうかは確言できないが、少なくとも同じ効果を持つと言えるのではないだろうか。

実際、本書を読んでいると、章を横断しての連鎖を感じることは頻繁で、それは一つの教室から元々発しているからではないだろうか。例えば、第一章高橋和久氏の論考にあるロンドン側にいる人間から見たスコットランドの映り方というウェイバリー的な問題設定は、第三章の高桑晴子氏の論考においてそれが違う小説を題材にしながら問題として共有されている。そして、その第三章でスコットランドが既に抱える固定的なイメージの中でどのように英語を発信したのかというネイションの物語にまつわる問題は、遡る第二章の吉野由利氏の論考においてアイルランドに場を移して同じ問題意識を共有した論として展開される。これらはほんの一例に過ぎず、本書のいろいろなところで同じ関心が別のところと連鎖しており、蜘蛛の巣が張り巡らされるようにして、各章同士が幾重もの呼応関係にあるのである。それぞれの扱うテーマも方法もばらばらでありながらも本書の中で互に通じ合っている様子は、在籍した時代も専門も論じ方もばらばらであった学生がそれでも同じ教室で切磋琢磨していた様子を伝えるのである。とはいえ、それでも本書のあとがきによれば東京大学の英文科というところはどうも先生を孤独へと追い込む職場であるらしいのだ

が。いずれにしても、英文科や文学科や文学部の斜陽ばかりが言われる昨今であるが、前掲『イギリス／小説／批評』を机上において本書と照らし合わせるとき、青木雄造氏のときよりもっと幅広くもっと多様になり、なによりこの分野を専門とする研究者の裾野も広がっていることは明らかなのである（専門家を裾野とは言わないかも知れないが、要は市井でのこの分野の関心の深まりと同じくこのことは重要なのである）。

いま一つの点として挙げておいた「これからの教育の可能性」についてであるが、本書が企画されるに際して、高橋和久氏の中に「学生が読んで卒論執筆の助けになり、同時に学術的にも意味のある英国小説論集を」という目標があったようなのだが、それを一方では「学生向きでありながら、学術的にも意味を持つ論文という自己矛盾」と呼んでみたりもしている。しかし、そうであろうか。文学研究というものには常々教育方法上の課題がつきまといっていて、これは既にして文学研究に宿命的なメタなトピックの一つである。文学にまつわるどんな知識を知って、何を実演できたら「教え、教わったことにするか」という、成績評価も含めての、教育という体制に仕上げねばならないという問題があり、いや、そもそも個人個人が生まれ持ったセンスに依存するのだから何を教えても無駄なのだという議論や、「読む」という行為は元々教育不可能な営みだという見方もあるだろう。確かに、英文学を学ぶことに関連しては、伝統的にある翻訳作業を通じて英文読解内容の確認をしていくことも基礎を形成する重要な方法の一つであろうし、従来の文学史の中で作家・作品とその意義を一つひとつおさえることも必要な知識かも知れないし、文学分野で批評理論として応用される思想をアンソロジー的にまとめた教科書で一つずつ理解することも助けになるかも知れない。しかし、その手の教科書が自分の試論を作る上で有効であった試しはやはりないのである。私の経験したところで言うと、文学批評こそは先行する研究成果の実例に触れることでしか、本質的には学ぶことはできないものなのではないだろうか。上に挙げるような基礎や補助的な知識は教科書にして書かれ得るし、パッケージとしてまとまった知識として学び得るとは思うが、こと作品の批評の方法について、あるいはどういうことが批評になっているのか、どういう批評が意義を持ち得るのかということについては、ついで一冊一冊の研究書、一つひとつ

の論文、あるいは一つひとつの口頭発表を聞くことでしか学んでくるということはなかった。その中には無理矢理に設定されたテーマだって随分あったが、無理にテーマを設定して論ずることだって無意味ではなくて、数々の試論の一つを形成するならば所詮は説得力を持ちうる試論かそうでない試論であるかという分類を経てからそれもまた論じ方のパターンのストックにおさまっていく。そうして集めた数々の批評の方法論を、物真似も含めて今度は教室で試してあれこれと指摘をもらう。演習だけが可能であり、根本的に講義ということが不可能な分野。そしてその演習は壇上で発表されても印刷されてもどこかで教室の演習の延長であり続ける。文学部以外のところで働いていると、他分野を専門とする研究者の方から「文学が一冊で分かる教科書でお薦めはありませんか」と訊かれることが多いのだが、勿体ぶって思われるのを回避したい気持ちで一杯でありながら、しかしこれ一冊で文学研究のなんたるかが分かるというものを挙げるができない。逆に他の分野にはそういう一冊があるのだとしたら、学問としての性質がやはり大きく異なっているのだろう。文学研究は研究の実例を知り続ける、その積み重ねの中でしか学ぶことができないのだと思う。

こうした方法でしか、自分たちがその分野で何をする事になっているのかを学び得ないのが文学批評の特徴であるとき、「学生向きでありながら、学術的にも意味を持つ論文」というのは自己矛盾であるどころか、その逆である。学術的に意味を持つ論文のみが学生向きの格好の教科書になるのである。高橋和久氏は本書を編むにあたって「啓蒙性を捨てた」とも言うが、むしろこうした学術的な論文集をくまなく読ませることをもってしか学生の卒論指導などできないのではないかと思ひ至るのである。こうした、一つひとつの論考がある程度の質的な高水準を維持しつつ、かつ広い範囲の題材が扱われつつ、採られる方法も多様であり、それでいて各章の論を一般化したり他への応用する欲望を鼓舞するようなもので溢れているような論文集こそが、英文学を学ぶ学生に対して意義ある研究がどのようなもので、現在の研究の最先端がどんなものかを示すと共に、自らの独自のテーマをやがて見つける方向へ向かわせる最適な教材になるだろうと考える次第である。

研究を取り巻く環境が転変する今日にあって、場合によっては英文学を

同窓と共に学ぶ機会が減るところもある中で、これまでの教室という場に代えて、学会や書籍が教育の役割を引き継いでいかねばならないところも大きいだろう。そうした中で本書のような図書が一冊でも世に出ることが、それ自体の業績としての成果に加え、教育に貢献するところが大きいだろうと考えるのである。

——中央大学教授

第15回全国大会

(2015年11月21日(土)、於 同志社大学 今出川キャンパス 良心館)

要 旨

I 研究発表

第1会場(105室)

1 Mariana Reimagined: Tennyson and Shakespeare in Millais's *Mariana* (1850-51)

浅野 菜緒子(聖心女子大学 大学院)

Mariana (1850-51) by John Everett Millais (1829-96) is one of the three principal works based on Shakespeare's plays during his Pre-Raphaelite period (1848-53). Precisely, it is not directly inspired by a Shakespearean play (*Measure for Measure*) but by a Tennyson poem, 'Mariana' (1830), unlike the other two works; *Ferdinand Lured by Ariel* (1848-49) and *Ophelia* (1851-52). Yet as in the other two, Millais was faithful to the original text, in this case, of Tennyson in conceiving his version of Mariana. Simultaneously, we can observe how a distance from the original source by Shakespeare allowed the artist to experiment with his own imagination.

This study has examined various elements of the painting such as the claustrophobic room and nature around 'the moated grange' as against the landscape rendered by Tennyson's language; Mariana's practice of embroidery which echoes a particular domestic activity imposed on the Victorian women; the female sexuality which separates Millais's Mariana from a femme fatale and a virginal woman; as well as the contemporary Victorian culture related to the composition, including the culture of 'reading Shakespeare' especially for women, and the appeal of the figure of the forsaken woman. Through the whole, it has examined three different images of Mariana by Shakespeare, Tennyson, and Millais respectively. As primary sources, it has looked into Shakespeare's plays, Tennyson's poems, Millais's paintings as well as the

letters and diaries of the latter two, and also Victorian essays and reports. Furthermore, this study has aimed to seek to what extent a Shakespearean source might have influenced Millais's representation via Tennyson's. Overall, it has attempted to identify the importance of the literary sources in Pre-Raphaelite Millais.

2 エドワード・バーン＝ジョーンズの絵画に見るキリスト教イメージ 久保 美枝(京都ノートルダム女子大学 研究助手)

エドワード・バーン＝ジョーンズの手がけた神話を主題とした絵画作品では、キリスト教絵画のモチーフによって絵画空間が構成されていることが、ファビアン・フレリッヒによって指摘されている。本発表では、バーン＝ジョーンズのイタリアでの絵画修行とその後の展開という絵画活動の流れに、作品《プシュケの婚礼》(*The Wedding of Psyche*, 1895年完成)を位置づけ、その作品の構図がジョットの《マリアの結婚》に倣ったものであり、またプシュケの身振りがシモーネ・マルティーニによる《受胎告知》のマリアの身振りへと通ずることを例証した。質疑では、婚礼のモチーフとは裏腹に、行列を成す人物たちの視線、そして色彩は、プシュケの嫁ぎ先を予感させる、喪を想起させる行列であることが指摘された。キリスト教絵画モチーフとギリシャ神話を融合させたバーン＝ジョーンズの絵画空間において、キリスト教美術の伝統的な構図に新たな意味合いを付そうとするその革新性について考察することを今後の課題としていきたい。

3 女性労働者がレディに変身する時——アーサー・マンビーの写真 におけるラファエル前派的なもの

吉本 和弘(県立広島大学)

本発表では、ロンドン在住の役人であり女性労働者を謳う詩人でもあったアーサー・マンビー(1828-1910)の写真コレクションとラファエル前派

の絵画との共通項を検証することによって、写真という新技術の出現とこの美術運動の間にどのような影響関係があったのかを考察した。

批評家ラスキンの‘Truth to Nature’という言葉に代弁される精密な細部描写というラファエル前派の特徴は写真の影響が大きいと考えられる。一方で写真術はラファエル前派のもうひとつの特徴であるナラティブ・ペインティング、つまり聖書や文学作品から題材をとる手法から影響を受け、物語性の強い演出を施した写真を撮るようになってゆく。

労働を賛美し自発的降格による魂の救済を説いたマンビーの写真の場合、汚れの細密な描写や重労働をする女性の肖像群に混じり「宿命の女」を演出したものが見受けられ、そこにはラファエル前派との共通項を見ることができる。

第2会場(106室)

1 *The Lancashire Witches* におけるペンドルの魔女裁判

田邊 久美子(関西外国語大学)

歴史小説家 William Harrison Ainsworth は、1848年に *The Sunday Times* に *The Lancashire Witches* を連載した。この連載は1612年に魔法により周囲の住民に危害を加えたとして処刑されたペンドルの魔女と魔女裁判についての実話を基にし、1849年に *The Lancashire Witches: A Romance of Pendle Forest* という題で小説として出版された。1846年から1847年にかけて Ainsworth はランカシャーにあるペンドル・ヒルを取材し、この魔女裁判の書記であった Thomas Potts が1613年に出版した *The Wonderfull Discoverie of Witches in the Countie of Lancaster* の公的記述をもとに執筆しているが、小説では Ainsworth の創作による部分も多くみられる。ペンドルの魔女狩りにはプロテスタントによるカトリックの迫害という宗教的要因も絡んでいる。本発表では、この作品の中で特に‘fancy’, ‘fantasy’ という用語が多用されている点や、当時の魔女のイメージ、および、チェサム協会の影響によりピクチャレスクな視点で風景を描写している点についても触れた。

2 手遣い人形劇「パンチ&ジュディ」について

平野 惟(神戸大学 大学院)

パンチ&ジュディ (Punch & Judy) は英国の伝統的な人形劇として知られるが、主人公パンチの登場(1662年)から彼と妻ジュディとの闘争を描く手遣い人形 (glove puppet) 劇という現在知られる形式の完成(19世紀初頭)までには、変化に満ちた150年もの発展期間がある。

本発表では「パンチ&ジュディ」の形成が19世紀半ばまでの英国民衆娯楽の衰退状況と重なっていることに着目し、発展期を通して娯楽への様々な障碍を潜り抜けてきたパンチが、この時期までにイギリス民衆の遊び心の象徴として定着し、ジュディに象徴される抑圧とせめぎ合うこの劇形式において結晶化したことを示した。そのとき「パンチ&ジュディ」とは、あくまで350年の歴史を持つ「パンチ劇」の一形態であり、その独自性は、当時の他の娯楽には一方的な圧力として働いた娯楽行動基盤の「真空」(マークムソン)という当時の状況を、むしろ完成形のエートスとして取り込んでしまっている点にあると言える。

3 第一回クリスタルパレス・コンテスト(1900年)再考——ブラスバンド運動拡大とその後のゆくえ

上宮 真紀(甲南大学 非常勤)

1900年7月21日、長引くボーア戦争への募金を目的に、ブラスバンド・コンテストがクリスタルパレスで大々的に行なわれた。このコンテストは、従来、19世紀半ば以降、労働者階級を中心とするブラスバンド運動 (brass band movement) の「全国化」を象徴するものとして強調されてきた。

しかしながら、このコンテストの様子を伝える『タイムズ』紙や『マンチェスター・ガーディアン』紙などの新聞報道からは、これが「全国規模」の大会でなかったことは明らかである。1900年のクリスタルパレス・コンテストとは何だったのか。なぜこのような「誤解」が生じたのか。

本報告では、このコンテストの具体的な中身を当時の報道記事を中心に

検証し、その意味を問い直した。そして、そこから新たに浮かび上がる問題点を整理しながら、最後に20世紀初頭のプラスバンド運動の展開とそこに絡む「音楽と社会」というより大きな問題を考える糸口を示唆した。

II シンポジウム (101 室)

神はどこにおられるのか——ヴィクトリア時代知識人にとっての信仰

司会：河村 民部 (近畿大学 名誉教授)

本シンポジウムは〈19世紀の宗教と信仰〉に纏わる文化史的・思想史的小および宗教史側面からの討論であり、文学的側面からのものではない。要点は、本学会が「ヴィクトリア朝文化研究学会」と銘打つからには、ヴィクトリア朝の思想文化の重要な一翼を担っていた当時の宗教事情、神と信仰の問題を避けて通ることはできないというわけで、これまでにこの分野の纏った討論がなされてこなかったという弱点を補うことにある。パネリストは纏め役の有江大介氏をはじめ、松本哲人氏、小田川大典氏のお三方で、松本氏は「J. プリーストリーと T. H. ハクスリー——18世紀後期イングランド啓蒙の遺産とヴィクトリア時代知識人」、有江氏は「J. S. ミルのイエスと J. H. ニューマンの神」、そして小田川氏は「ヴィクトリア朝「教養」論の宗教的背景——ユニテリアニズムとリベラル・アングリカニズムを中心に」という題目のもとに、各人の蘊蓄の一端を披露して頂いた。

J. S. ミルのイエスと J. H. ニューマンの神

パネリスト：有江 大介 (横浜国立大学 名誉教授)

ミルとニューマンはヴィクトリア時代の宗教と科学との相克の中で、信仰と神の存在について真摯に考えた。

合理主義の旗手ミルは、遺作『宗教三論』の第2部迄で、啓示抜きに世俗的道德教たる、人間イエスを理想像とする「人類教」を提示した。しかし、

第3部「有神論」において、肉体と靈魂の不滅を蓋然性として容認する“希望の宗教”を表明した。これはミルの支持者だけでなく正統信仰を持つミルの反対者をも驚愕させた。

イングランド国教会に対する信仰復興運動であったオクスフォード運動の指導者ニューマンは、科学的認識の意義を承認しつつその上で、バトラーに倣った蓋然性を媒介にした推断的感觉による神に向かう信仰への“飛躍”を試みた。この過程でニューマンは国教会からカトリックへと改宗し、当時の知識人社会に大激震をもたらした。

これらは神の名において日々殺戮が行われる現代に、“信仰”の意義について再考するための素材を提供している。

J. プリーストリーと T. H. ハクスリー——18世紀後期イングランド啓蒙の遺産とヴィクトリア時代知識人

パネリスト：松本 哲人(徳島文理大学)

本報告の目的は、ヴィクトリア期を代表する科学者であるトマス・ヘンリー・ハクスリー(Thomas Henry Huxley, 1825-1895)の伝記的著作の中で、比較的的成功している論説と評価されているジョゼフ・プリーストリー(Joseph Priestley, 1733-1804)に関する論文「ジョゼフ・プリーストリー」(“Joseph Priestley”, 1874)を分析することである。ハクスリーの本論文は、1874年8月2日、バーミンガム市に寄贈されたプリーストリーの銅像の除幕式典のときに行った記念講演にハクスリー自身が加筆、修正を施し出版したものである。本論文において、ハクスリーは、18世紀後期イングランド啓蒙運動が目指した「自由」から強く影響を受けていたことが見受けられる。本報告ではその中でも特にハクスリーが学問の自由を主張するとき、プリーストリーを高く評価し、彼の考えに傾倒していたことを明らかにした。

ヴィクトリア朝「教養」論の宗教的背景——ユニテリアニズムとリベラル・アングリカニズムを中心に

パネリスト：小田川 大典(岡山大学)

S・コリーニによれば「節制、自助、儉約、勤勉、義務、自律といったヴィクトリア期の中産階級の一般的な徳目」の根底には「意志の力によって、官能的すなわち動物的な衝動と情念を克服する能力」を過度に強調する「ヴィクトリア朝道徳の自覚されざるカント主義」としての「品性」(character)のエートスが存在し、J・S・ミルやM・アーノルドの「教養」(culture)論は、まさにそうした厳格なピューリタンの「品性」のエートスに対する批判をその眼目としていた。本報告では、コリーニの指摘を踏まえながら、ミルの教養論が、三位一体と原罪を否定し、善人イエスを模範とした人間の完成可能性を唱えるユニテリアニズムを背景としていたこと、そしてアーノルドの教養論が、父トマスから継承したリベラル・アングリカニズムの影響下で形成されたことに着目し、ヴィクトリア朝の教養論の宗教的な背景の一端を明らかにすることを試みた。

III ラウンドテーブル

第1会場(105室)

大阪・神戸とヴィクトリア朝英国——産業と文化の観点から

開市後の大阪とヴィクトリアン・マンチェスター

司会・提題者：松村 昌家(大手前大学 名誉教授)

1914年に大阪紡が東洋紡になってから大阪は東洋のマンチェスターであることを誇るようになった。東洋のマンチェスターを実現させるのに功績があったのが、渋沢栄一と山辺丈夫であったことは夙に知られている。しかしマンチェスターの産業を代表する紡績業そのものが、マンチェスターから大阪へ直接に輸入されたのではなかった。日本最初の紡績業は鹿児島に始まり鹿児島から大阪へ伝わったのである。そこで1862年のロンドン

万博へ目を向ける必要がある。その機械展示場には新型の紡績機が展示されていて、時を合わせてロンドンを訪れていた幕末使節団の眼を奪った。それから5年後には、鹿児島磯の浜に日本最初の紡績工場が出現したのだ。紛れもなく鹿児島藩代表として使節団に加わっていた寺島宗則の先見の明によるものであった。

本ラウンドテーブルに関して特記しておきたいのは、外部の同好の士を招いての最初の試みであったことである。1868年に開市・開港を経た大阪と神戸は、東京・横浜と同様に文化・文明のあらゆる面でヴィクトリア朝英国と密接な関係をもつ。それぞれの立場でどのような領域をどのように開拓しているのかを語り合いたいと思った。司会者が不慣れで十分に役を果たし得なかったが、横浜にも一度踏みこんでみたい気がする。

神戸外国人居留地とヴィクトリア朝文化の影

提題者：濱下 昌宏(神戸女学院大学 名誉教授)

ヴィクトリア時代(1837-1901)と、神戸外国人居留地時代(1868-99)とは歴史的に重なる。経済活動を通じての国際化、あるいは植民地主義そして帝国主義という英国の栄華は神戸にも反映され、英国人は在日外交団のリーダー格であり、神戸における英国人在住者数は際立って多かった。英国はすでに東インド会社から新興の商社への継承によって英国—インド—中国という三角貿易を成功裏に展開していたが、その取引の闇の部分とはいうまでもなくアヘンの密売・専売であり、それによって富を増大させたサッスーンやジャーディン・マセソン等の商会は、その富の安全かつ迅速な本国送金のために設立されたチャータード銀行(1853年)や香港上海銀行(1865年)と並んで、当然のように神戸にも進出してきた。国際的近代都市の体裁を整えての神戸の発展はめざましかったが、しかし一方で、1894年より2年間ほど神戸滞在をしたラフカディオ・ハーンは居留地の欧米人の生活ぶりに嫌悪感を示している。それは、無批判に西洋文明を吸収しようとする近代日本人への警鐘でもあったであろう。

神戸外国人居留地とヴィクトリア朝文化

提題者：石戸 信也 (兵庫県立西宮高等学校・神戸大学 大学院)

開港150年を目前にした近代港都である神戸の文化形成や市民生活の上で、大英帝国のヴィクトリア朝文化の果たした役割は大きい。居留地126区画中65区画と最多を取得し、明治20年代に欧米人中のイギリス人の比率が横浜より高かった神戸であるからこそ、都市インフラ、建築、スポーツ、鉄道、教育、洋服、食生活、キリスト教、ホテル、新聞、ガラス器製造などあらゆる分野でその影響や交流が見られたのは言うまでもない。

今回は特に古写真、絵葉書、錦絵、挿絵、引札、地図周縁図などで「名所」として表現、視覚化された神戸外国人居留地を約5千点の石戸コレクションから抽出して見ながら、たとえば棟梁たちによる擬洋風建築の伝播の調査例などをあげ、その文化史的意義を提示した。ヴィクトリア朝文化の受容と変容の理解は、表層的な「大英帝国の光と影」イメージでの把握を脱して、その具体的な深層に迫ることによってこそ可能であると考えている。

第2会場(106室)

ヴィクトリア朝文学と宝塚歌劇

——ダンディズム・植民地・スペクタクル

司会：玉井 史絵 (同志社大学)

宝塚歌劇は人によって好き嫌いが二分される。人生の一部と言っていいくらいに情熱を傾ける人もいる一方で、見たくもないという人がいる。今回のラウンドテーブルでは前者の熱烈な宝塚ファンである二人の研究者が、宝塚歌劇とヴィクトリア朝文学の関連性を「熱く」論じた。司会を務めた私は好き嫌い以前に、宝塚にはほとんど無関心であったが、宝塚基礎知識から始めてくれたお蔭で、その豊かな世界の一端を知るよい機会となった。このラウンドテーブルを通して見えてきたのは、宝塚だけではなく、日本から見たヴィクトリア朝という時代である。日本人はヴィクトリア朝をど

のように解釈し受容したのか、何を「ヴィクトリア朝的」であると感じ自らの創出したハイブリッド的芸術のなかに取り込んでいったのか——こうしたさまざまな問いかけが生まれる刺激的な議論が展開された。今後のさらなる発展を十分に期待させる実り多い企画であったと思う。

提題者：西垣 佐理(近畿大学)

本発表で目指したのは、女性だけの劇団である宝塚歌劇という日本独自の演劇形態でヴィクトリアニズムがいかに消化されているかを分析することだった。実際に上演されたヴィクトリア朝文学、特にディケンズの『二都物語』、『大いなる遺産』、ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』と宝塚版を比較し、原作と宝塚男役の美学に通底する「ダンディズム」や、その他帝国主義的植民地をテーマにした作品、そしてヴァンパイアや精霊などといったヴィクトリア朝的要素が宝塚作品でいかに用いられ、スペクタクル化されてきたかについて論じた。現在でも、宝塚歌劇では原作を用いるか否かにかかわらず、ヴィクトリア朝的要素は随所に取り入れられていることも指摘した。その意味で、宝塚歌劇や日本で行われている演劇等に関してヴィクトリア朝文学・文化の側面から分析することは、今後の学際的研究において十分有効なアプローチとなり得るとわかったのは大きな収穫であった。

提題者：桐山 恵子(和歌山大学)

学会という名のもとでラウンドテーブルを行う機会を頂いたので、宝塚ファンの井戸端会議に陥ることなく、さらに歌劇を下手物趣味とする視点を避けることに留意し、舞台作品におけるヴィクトリア朝文学の特徴的な要素を考察することを目指した。とはいっても、ディケンズやワイルドの小説を翻案した宝塚作品を扱った前半では、ファン心理やファンクラブの実態についての質問も頂いた。その際、阪急電車に乗れば公演ポスター

を目にする関西在住者と、そのような条件下にはない関東在住者との宝塚への距離感の違いが判明し、興味深かった。後半では、大英帝国の植民地をめぐる作品における主人公のアイデンティティーの問題が提起されたり、ヴィクトリア朝文学に登場する妖精やヴァンパイアは、宝塚で舞台化しやすい存在であることが確認されたりした。また昨今、宝塚でも海外ミュージカルの上演回数が増え、文学の翻案作品が少なくなっていることは、宝塚を超えた文学離れを象徴しているのかもしれないという意見が出された。

IV 特別講演(101室)

「希望の巡礼」——ウィリアム・モリスの1880年代

川端 康雄(日本女子大学)

1880年代のウィリアム・モリス(William Morris, 1834-96)は一方で草創期のイギリスの社会主義運動を牽引し、他方、本業のモリス商会ではテキスタイル部門を主としたデザイン制作で目覚ましい成果を上げた。後者の仕事は1880年代後半に本格化するアーツ・アンド・クラフツ運動の源泉となる。この時期にイギリスで展開された政治と芸術の前衛運動の両面で彼は決定的に重要な役割を果たした。

本講演では1880年代におけるこれらのモリスの活動とその意義を検討するための手がかりとして、『希望の巡礼』(*The Pilgrims of Hope*)を取り上げた。これはモリスが設立に関わった社会主義同盟の機関紙『コモンウィール』(*The Commonweal*)に1885年から翌年にかけて随時連載された。1871年のパリ・コミュンに参加したイギリス人青年の愛と戦いを描いたこの物語詩は従来さほど注目されてこなかったが、そこには自伝的な要素も含む闘士の苦悩や希いが田園と都市を舞台に語られていて興味深い。これを頼りに、130年前のモリス自身の希望の中身をそのコンテキストとともに浮かび上がらせることを図った。

編集委員会からのお知らせ

『ヴィクトリア朝文化研究』第15号は、2017年11月に発行の予定です。会員の方々はふるってご投稿ください。投稿の締切は、2017年6月末日です。投稿規程、掲載論文の著作権および転載許可願いについては、以下をご覧ください。

投稿規程

1. 投稿原稿は論文のみとする。編集委員会が審査し、採否を決定する。
2. 投稿資格は会員であり、当該年度の会費を納入した者であること。ただし協会主催の講演、シンポジウム等に基づいた論文の場合、本学会会員以外の原稿を掲載することがある。
3. 投稿原稿は未発表のものであること。ただし、口頭で発表されたものは投稿可。
4. 投稿原稿は、本学会の設立趣旨に沿い、広くヴィクトリア朝文化に関わる学際的な視野を持つものが望ましい。(学会の設立趣旨に関しては、本学会会則第2条およびHPを参照のこと。)
5. 投稿原稿はMicrosoftWordファイル形式(.docx, .doc)あるいはリッチテキスト・ファイル形式(.rtf)で保存すること。
6. 分量は、和文の場合20,000字以内(40字×30行で16.5枚程度、図版を含む)、英文の場合8,000語以内(65ストローク×25行をめやすに約29枚、図版を含む)とする。和文の論文には上記英文の要領で英文要旨(1枚)をつける。
7. 著作権のある図版等を使用する場合は、あらかじめ許可を得ておくこと。投稿者は、現住所・電話番号・メールアドレス・氏名・所属・職位を明記した別ファイルを同時に提出のこと。
8. 引証の形式は、MLA、APA、シカゴスタイルなど各自の専門分野の慣行に従うこと。
9. 原稿ファイルの送付先は、「victorianstudies.japan@gmail.com」。メールの表題を「『ヴィクトリア朝文化研究』投稿」とすること。印字原稿の送付は必要としない。

著作権および掲載論文の公開について

1. 『ヴィクトリア朝文化研究』に掲載される論文(書評等を含む、以下同)について、本会は以下の方針を適用する。この方針は第9号掲載分以降に対して適用する。
2. 本誌掲載論文の著作権は日本ヴィクトリア朝文化研究学会に帰属する。

3. 掲載号発刊後12箇月が経過した論文は、PDFファイルで本会ホームページ上に一般公開する。
4. 執筆者個人がインターネット上に本誌掲載論文を公開する場合は、本会ホームページ上にあるPDFファイルへのリンクという方法をとることとする。個人のウェブサイト内で別フォーマットのものを公開してはならない。
5. 執筆者個人がインターネット上に本誌掲載論文を公開する場合は、以下の条件を満たさなければならない。
 - (a) 掲載号発刊後12箇月が経過していること
 - (b) 権利表示を行うこと
 - (c) 出典表示を行うこと
 - (d) 公開された文書の利用は著作権の範囲内に限られる旨の表示を行うこと
6. 執筆者個人が自身の著書等に本誌掲載論文を転載する場合は、事前に本会事務局に申し出て許可を得なければならない。

転載許可願について

1. 上記第6項にあるように、本誌掲載論文(研究ノートおよび書評を含む)を転載する場合、転載許可が必要です。本会ホームページからダウンロードした申請用紙(「転載許可願」)に、必要事項を記入の上、電子メールで事務局までお送りください。

優秀論文賞規程

- (名称) 本賞は日本ヴィクトリア朝文化研究学会優秀論文賞と称する。
- (目的) 本賞は本会会員の学術研究の奨励と、日本におけるヴィクトリア朝文化研究の振興を目的とする。
- (対象) 会誌『ヴィクトリア朝文化研究』各号に掲載された論文のうち優秀なもの1編を受賞の対象とする。受賞に値する論文がない場合には、受賞に準ずる論文を佳作に選出することもある。
- (賞金) 本賞の賞金は5万円とし、学会会計より支出する。佳作の賞金は3万円とする。
- (審査) 審査は会誌編集委員会が行なう。編集委員長は、必要に応じて編集委員以外の会員にも参考意見を求めることができる。
- (発表) 本会総会において当該年度を受賞論文を発表し、受賞者を表彰する。
- (改正) 本規程の改正は運営委員会、理事会の議によって行なう。
- 付則 本規程は平成23年11月19日より施行する。

編集後記

本号より編集委員長の大役を仰せつかることになった。基本的には代々の編集長による編集の積み重ねで自ずと生じている「伝統」を踏襲するということになるはずである。ただしヴァラエティ重視の前号とはやや趣を異にして、「論文」「エッセイ」「書評」の三本立てというシンプルな構成にしてみた。「論文」に関しては、本号より、昨年度大会の講演とシンポジウム発表の内容を、記録としてではなく査読論文として掲載する方針を採用している。本号の新機軸である「エッセイ」は、学会内外の三人の執筆者に、「特集」という枠で原稿をお寄せいただいた。個人的に長年その文章を愛読している方々の原稿を掲載できて望外の喜びである。そして現在、第一線で活躍される研究者を評者として迎える「書評」は例年通りの構成である。同時に、例年にも増して日本人著者のものも含めた重厚な文化的歴史研究を多く取り上げることができたのは何より嬉しい。本誌の学術的水準の維持と読み物としての豊かさの実現という編集方針が、ある程度実現できていれば幸いである。

一方で、一般投稿論文の採用はゼロに終わった。四篇の投稿論文を通常通り査読した結果であり、もちろん残念ではあるが、論文査読という制度に、個人的な感情や何らかの外的な配慮、都合などが介在する余地はない。今回不採用だった投稿者には、査読コメントを参照の上、来年度の再投稿を検討いただきたい。

最後になりましたが、ご多忙中充実した原稿をお寄せくださった学会内外の執筆者の方々、そしてご尽力いただいた編集委員の皆様に厚くお礼を申し上げます。
(編集委員長 田中裕介)

編集委員

石橋 悠人
大久保 譲
小田川大典
佐藤 繭香
田中 裕介
林田 敏子
渡辺 美樹

ヴィクトリア朝文化研究 第14号

2016年11月1日

発行 日本ヴィクトリア朝文化研究学会
会長：川端康雄
事務局：〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-2
日本女子大学文学部英文学科 佐藤和哉研究室

印刷 清正堂加藤株式会社

表紙図版 Sir Edward Coley Burne-Jones, *Love and the Pilgrim* (1896-7)

ISSN 1882-3029

